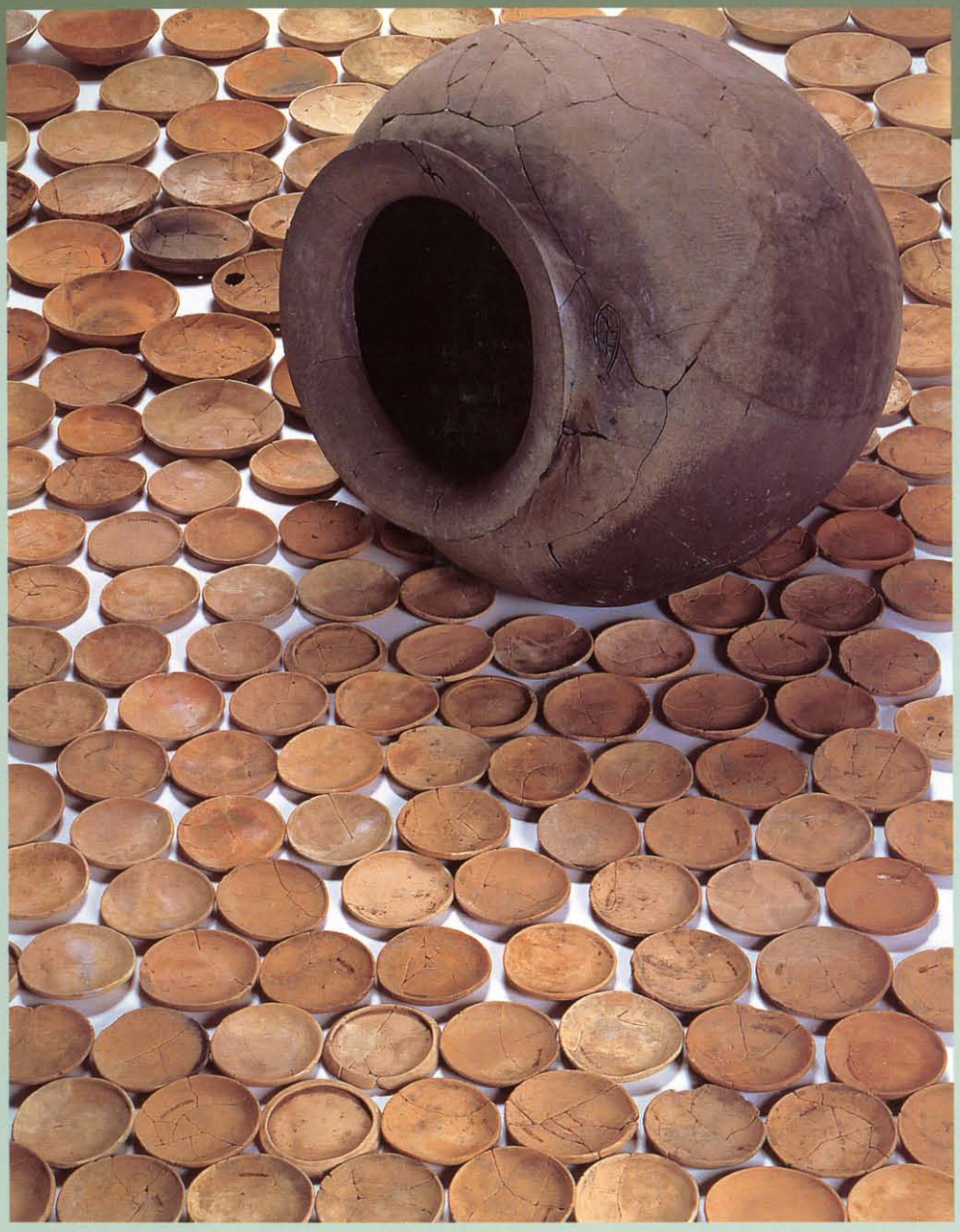
平成６年度

神戸市埋蔵文化財年報



１９９７

神戸市教育委員会

平成６年度

神戸市埋蔵文化財年報

１９９７

神戸市教育委員会

序

平成６年度の埋蔵文化財行政を取り巻く環境は、例年と変わらないものでしたが、年明け早々の平成７年１月17日早朝に発生した大震災によって、困難な問題が山積することとなり、苦悩の時期を迎えることになりました。

家屋の倒壊や火災によって、234haもの未曾有の埋蔵文化財包蔵地が被災しました。埋蔵文化財調査が復旧・復興の支障になるのではないか、と文化財関係者のみならず多方面で危惧されました。そのような中で、復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護の整合を図るため、文化庁から基本方針が出されました。そして、兵庫県教育委員会を通じ、全国各自治体から調査員の支援を受けることになりました。

地震発生後、ほぼ２年を経過した今日も、文化庁はじめ多くの自治体の支援により、復興に関わる調査は継続して行われています。

さて、震災発生直前まで実施されていました平成６年度の埋蔵文化財調査によって得られた成果は、西求女塚古墳が前方後方墳であることが判明したり、祇園遺跡では『福原京』との関連を強く感じさせる園池が発見されるなど、実りの多い年でもありました。

本書は、平成６年度に実施した主な発掘調査の成果を掲載するもので、現地調査中に公開できなかった多くの遺跡も、本書を通し、理解していただければ幸いです。

最後に、発掘調査およびこの年報作成にご協力いただきました関係諸機関、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成９年３月

神戸市教育委員会

例　　言

1．本書は、神戸市教育委員会が平成６年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財専門委員会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

檀上重光	神戸女子短期大学教授
和田晴吾	立命館大学文学部教授
山岸常人	奈良国立文化財研究所遺構調査室長

教育委員会事務局

教育長	小野雄示
社会教育部長	西川和機
文化財課長	杉田年章
埋蔵文化財係長	奥田哲通
文化財課主査	中村善則・渡辺伸行
事務担当学芸員	山本雅和・前田佳久
	川上厚志
調査担当学芸員	丸山潔
	菅本宏明
	千種浩
	黒田恭正
	安田滋
	須藤宏
	佐伯二郎
	山口英正
	東喜代秀
	浅谷誠吾
	橋詰清孝
	井尻格
	川上厚志

㈶神戸市スポーツ教育公社

理事長	福尾重信
専務理事	竹入正視
常務理事	谷敷勝美
事業課長	村田徹
文化財調査係長	中村善則
調査担当学芸員	西岡巧次
	口野博史
	丹治康明
	西岡誠司
	谷正俊
	富山直人
	斎木巌
	池田毅
	松林宏典
	阿部敬生
	内藤俊哉
	藤井太郎
	石島三和
	関野豊
	阿部功
	中村大介

2．本書に掲載した位置図は、神戸私立中学校教育研究部編集（神戸市スポーツ教育公社発行）の５万分の１神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の１地形図を使用した。

3．Ⅱ．阪神・淡路大震災と埋蔵文化財に使用した被災地図は、国際航業株式会社より提供を受けた社内技術資料「阪神大震災の被災マップ」を使用した。

4．本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、丸山潔、藤井太郎が編集した。

5．表紙写真は祇園遺跡出土の土師器皿・渥美窯甕で、楠本真紀子氏の撮影によるものである。裏表紙写真は同遺跡出土の吉州窯系玳玻天目小碗である。

目　　次

序
例　言

Ⅰ．平成６年度　事業の概要 …… 1
　平成６年度　埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 11
　平成６年度　神戸市埋蔵文化財調査位置図 …… 17

Ⅱ．阪神・淡路大震災と埋蔵文化財 …… 23

Ⅲ．平成６年度の発掘調査 …… 47
　１．西求女塚古墳　第６次調査 …… 47
　２．西求女塚古墳　第７次調査 …… 53
　３．日暮遺跡　第６次調査 …… 57
　４．楠・荒田町遺跡　第13次調査 …… 59
　５．祇園遺跡　第２次調査 …… 63
　６．祇園遺跡　第３次調査 …… 71
　７．塚本遺跡　第２次調査 …… 77
　８．日下部遺跡　第１次調査 …… 79
　９．淡河・萩原城遺跡　第３次調査 …… 83
　10．五番町遺跡　第５次調査 …… 89
　11．戎町遺跡　第12次調査 …… 93
　12．大田町遺跡　第５次調査 …… 99
　13．垂水・日向遺跡　第11次調査 …… 105
　14．舞子浜遺跡　第９次調査 …… 109
　15．清水が丘遺跡　第１次調査 …… 119
　16．白水遺跡　第３次調査 …… 123
　17．新方遺跡　北方地区　第４次調査 …… 127
　18．新方遺跡　丁の坪地点　第５次調査 …… 131
　19．栃木遺跡 …… 137
　20．菅野遺跡 …… 149
　21．如意寺三重塔 …… 153
　22．印路遺跡　第４次調査 …… 161
　23．小山遺跡　第２次調査 …… 165
　24．玉津田中遺跡　第７次調査 …… 173

Ⅳ．平成６年度の大規模試掘調査 …… 177

Ⅴ．平成６年度の保存科学処理 …… 187

挿　図　目　次

fig. 1　震災直後の処女塚古墳とその周辺〔写真〕…… 23
fig. 2　火災が発生した戎町遺跡、松野遺跡付近〔写真〕…… 25
fig. 3　被災した松野遺跡付近〔写真〕…… 25
fig. 4　被災した上沢遺跡付近〔写真〕…… 27
fig. 5　被災した都賀遺跡付近〔写真〕…… 27
fig. 6　東灘区の遺跡と被災構造物〔写真〕… 30
fig. 7　東灘区の遺跡と被災構造物〔写真〕… 31
fig. 8　灘区の遺跡と被災構造物〔写真〕…… 33
fig. 9　長田区の遺跡と被災構造物〔写真〕… 35
fig. 10　須磨区の遺跡と被災構造物〔写真〕… 36
fig. 11　崩壊した鬼塚古墳の石室〔写真〕…… 38
fig. 12　埋蔵文化財センター収蔵展示室〔写真〕…… 39
fig. 13　埋蔵文化財センター収蔵展示室〔写真〕…… 39
fig. 14　全壊した重池住宅〔写真〕…… 40
fig. 15　全壊した重池住宅〔写真〕…… 40
fig. 16　重池住宅　埋もれたコンテナを搬出する職員〔写真〕…… 41
fig. 17　重池住宅　梁の下敷きになったコンテナ〔写真〕…… 42
fig. 18　玉津環境センター展示室〔写真〕…… 42
fig. 19　散乱した大開遺跡の遺物〔写真〕…… 43
fig. 20　五色塚古墳墳頂部被災状況〔写真〕… 43
fig. 21　調査地点位置図 …… 47
fig. 22　第２遺構面平面図 …… 48
fig. 23　SD33出土土器実測図 …… 50
fig. 24　出土土錘実測図 …… 51
fig. 25　周濠状遺構（SX06）と古墳の位置 …… 52
fig. 26　調査地点位置図 …… 53
fig. 27　遺構平面図 …… 54
fig. 28　墳丘推定復元ライン …… 55
fig. 29　出土土器実測図 …… 56
fig. 30　調査地点位置図 …… 57
fig. 31　遺構平面図 …… 58
fig. 32　調査地点位置図 …… 59
fig. 33　遺構平面図 …… 60
fig. 34　方形周溝墓２・３・４〔写真〕…… 61
fig. 35　SD06土器出土状況〔写真〕…… 61
fig. 36　調査地点位置図 …… 63
fig. 37　遺構平面図 …… 64
fig. 38　SX19平・断面図 …… 65
fig. 39　SK14平・断面図 …… 66
fig. 40　SK22平・立面図 …… 66
fig. 41　調査区南半全景〔写真〕…… 66
fig. 42　SX07平面図 …… 67
fig. 43　SX07土器出土状況〔写真〕…… 68
fig. 44　出土瓦拓本 …… 69
fig. 45　SX07（園池）出土土器実測図 …… 70
fig. 46　調査地点位置図 …… 71
fig. 47　調査区断面図 …… 72
fig. 48　出土土器実測図 …… 73
fig. 49　出土土器実測図 …… 74
fig. 50　出土遺物実測図 …… 75
fig. 51　出土瓦拓本 …… 76
fig. 52　調査地点位置図 …… 77
fig. 53　第２遺構面平面図 …… 78
fig. 54　SK09土器出土状況〔写真〕…… 78
fig. 55　調査地点位置図 …… 79
fig. 56　遺構平面図 …… 80
fig. 57　SB01〔写真〕…… 80
fig. 58　SK02平・立面図 …… 80
fig. 59　出土土器実測図 …… 82
fig. 60　調査地点位置図 …… 83
fig. 61　平成６年度検出遺構平面図 …… 85
fig. 62　平成５・６年度検出遺構平面図 …… 86
fig. 63　出土土器実測図 …… 87
fig. 64　出土土器実測図 …… 88
fig. 65　調査地点位置図 …… 89
fig. 66　遺構平面図 …… 90

fig. 67　第３遺構面全景〔写真〕…… 91
fig. 68　SK302〔写真〕…… 91
fig. 69　第３遺構面平面図 …… 91
fig. 70　第４遺構面平面図 …… 91
fig. 71　SK402〔写真〕…… 92
fig. 72　調査地点位置図 …… 93
fig. 73　調査区断面図 …… 94
fig. 74　第２遺構面平面図 …… 94
fig. 75　出土土器実測図 …… 95
fig. 76　第１層～第２層出土土器実測図 …… 96
fig. 77　第10層出土土器実測図 …… 97
fig. 78　土製品・石庖丁実測図 …… 98
fig. 79　調査地点位置図 …… 99
fig. 80　調査区平面図 …… 99
fig. 81　調査区断面図 …… 100
fig. 82　Ａ・Ｃ区第１遺構面平面図 …… 101
fig. 83　埋納土器〔写真〕…… 102
fig. 84　Ａ・Ｃ区第３遺構面平面図 …… 103
fig. 85　Ａ・Ｂ・Ｃ区第５遺構面平面図 …… 104
fig. 86　調査地点位置図 …… 105
fig. 87　第Ⅰ遺構面平面図 …… 106
fig. 88　縄文人の足跡〔写真〕…… 108
fig. 89　縄文人の足跡 …… 108
fig. 90　調査地点位置図 …… 109
fig. 91　遺構平面図 …… 110
fig. 92　埴輪棺１（ST01）平・立面図 …… 111
fig. 93　埴輪棺２（ST02）平・立面図 …… 112
fig. 94　埴輪棺３（ST03）平・立面図 …… 113
fig. 95　埴輪棺４（ST07）平・立面図 …… 114
fig. 96　埴輪棺５（ST05）平・立面図 …… 115
fig. 97　埴輪棺６（ST08）平・立面図 …… 117
fig. 98　調査区全景〔写真〕…… 118
fig. 99　調査地点位置図 …… 119
fig. 100　遺構平面図 …… 120
fig. 101　調査区全景〔写真〕…… 121
fig. 102　調査区南土坑群〔写真〕…… 122
fig. 103　調査地点位置図 …… 123
fig. 104　第２トレンチ全景〔写真〕…… 124
fig. 105　流路２木製品出土状況〔写真〕…… 124
fig. 106　第５・６トレンチ全景〔写真〕…… 126
fig. 107　ピット03〔写真〕…… 126
fig. 108　第５・６トレンチ遺構平面図 …… 126
fig. 109　調査地点位置図 …… 127
fig. 110　第１調査区水田〔写真〕…… 129
fig. 111　水田稲株痕〔写真〕…… 129
fig. 112　第１・２調査区第３遺構面平面図 …… 129
fig. 113　第１～４調査区遺構図 …… 130
fig. 114　調査地点位置図 …… 131
fig. 115　調査区平面図 …… 132
fig. 116　調査区断面図 …… 132
fig. 117　遺構平面図 …… 133
fig. 118　15グリッドSB01〔写真〕…… 133
fig. 119　出土土器実測図 …… 134
fig. 120　出土土器実測図 …… 135
fig. 121　出土土器実測図 …… 136
fig. 122　調査地点位置図 …… 137
fig. 123　調査区平面図 …… 138
fig. 124　第Ⅰ・Ⅱ調査区SB301〔写真〕…… 139
fig. 125　第Ⅰ・Ⅱ調査区遺構平面図 …… 140
fig. 126　第Ⅱ調査区SB301〔写真〕…… 142
fig. 127　第Ⅲ調査区SG201〔写真〕…… 145
fig. 128　第Ⅳ・Ⅴ調査区遺構平面図 …… 146
fig. 129　調査地点位置図 …… 148
fig. 130　曲物出土状況〔写真〕…… 150
fig. 131　柄状木製品出土状況〔写真〕…… 150
fig. 132　２～４区遺構平面図 …… 150
fig. 133　７区遺構平面図 …… 151
fig. 134　７区SB01〔写真〕…… 152
fig. 135　SB01平・断面図 …… 152
fig. 136　調査地点位置図 …… 153
fig. 137　現況基壇平・断面図 …… 154
fig. 138　SP403〔写真〕…… 156
fig. 139　SP403平・断面図 …… 156
fig. 140　出土土器実測図 …… 157
fig. 141　第３遺構面平・断面図 …… 158
fig. 142　SD301〔写真〕…… 159

fig. 143　調査地点位置図 …… 161
fig. 144　遺構平面図 …… 162
fig. 145　SB02・03平面図 …… 163
fig. 146　調査区北半全景〔写真〕 …… 163
fig. 147　SB01〔写真〕 …… 163
fig. 148　調査地点位置図 …… 165
fig. 149　第10トレンチ遺構平面図 …… 167
fig. 150　第14トレンチ遺構平面図 …… 169
fig. 151　第17トレンチ遺構平面図 …… 170
fig. 152　第17トレンチSB02〔写真〕 …… 171
fig. 153　調査地点位置図 …… 174
fig. 154　遺構平面図 …… 175
fig. 155　微高地Ａ端部出土土器〔写真〕 …… 176
fig. 156　北区試掘地域全体図 …… 178
fig. 157　上小名田地区試掘調査地点 …… 179
fig. 158　八多地区試掘調査地点 …… 180
fig. 159　八多地区試掘調査地点 …… 181
fig. 160　西区試掘地域全体図 …… 182
fig. 161　松本地区試掘調査地点 …… 183
fig. 162　木津地区試掘調査地点 …… 184
fig. 163　木津地区試掘調査地点 …… 185
fig. 164　城ケ谷遺跡試掘調査地点 …… 186
fig. 165　舞子浜遺跡断面土層転写作業〔写真〕 …… 187
fig. 166　同左展示パネル〔写真〕 …… 187
fig. 167　西求女塚古墳11号鏡付着織物〔写真〕 …… 188
fig. 168　狩口台きつね塚古墳鉄鏃の茎部に付着した有機物の痕跡〔写真〕 …… 188
fig. 169　同左の断面〔写真〕 …… 188
fig. 170　狩口台きつね塚古墳花形杏葉鉄地板に付着した有機物の痕跡〔写真〕 …… 188
fig. 171　同左の拡大〔写真〕 …… 188
fig. 172　狩口台きつね塚古墳轡（保存処理前）〔写真〕 …… 189
fig. 173　同左（保存処理後）〔写真〕 …… 189
fig. 174　大田町遺跡出土須恵器壺内部のＸ線透過像〔写真〕 …… 189
fig. 175　大田町遺跡出土銭貨Ｘ線透過像〔写真〕 …… 190
fig. 176　大田町遺跡出土銭貨〔写真〕 …… 190

Ⅰ．平成６年度　事業の概要

１．普及啓発事業　〔神戸市埋蔵文化財センター〕

子供たちの考古学講座

開館４年度目の本年は、従来の企画展示のほかに新規事業として、『こどもたちの考古学講座』を企画した。この講座は、第２土曜日が休校となったのを受け、小学校４年生以上の子供たちを対象にしたものである。講座の基本方針は、机上の学習よりも体験を大切にしようとするものである。しかし、小・中学生対象の講座は始めての経験であり、手さぐりのスタートであった。いずれの講座も予想以上に申込者が多く、対応可能な人数に抽選により参加者を絞り込まざるを得なかった。なお、参加費は無料とした。

開講日	講　座　名	講　座　の　内　容	申込者	参加者
5/14	発掘された木との出会い	垂水・日向遺跡出土の縄文時代の木の葉を水洗選別しフィルムに封入する。現生のものと同定	126人	86人
6/11	はにわ作り	焼かずに硬化する粘土で、埴輪・土器などを作る	180人	136人
7/9	土器に親しむ	遺跡出土の土器を水洗したり、拓本をとったりする	179人	84人
9/10	古代玉つくりに挑戦	印材の青田石や寿山石で、勾玉などを作る	97人	68人
10/8	出た！ 遺跡を発掘	発掘調査中の遺跡に行き、主として遺物包含層を発掘する	309人	64人
11/12	古代人の生活体験	大歳山遺跡公園で貫頭衣をつくり、脱穀・火おこし・料理・煮たきなどを行う	AM 135人 PM 98人	55人 51人
12/10	石器をつくろう	滋賀県産高島石で、石庖丁などの磨製石器をつくる	117人	67人
1/14	縄文クッキーをつくろう	アク抜きせずに食べられるシイの実を粉にしてクッキーを作る	116人	63人
合　計			1,357人	674人

企画展示 海辺の古墳

企画展示は、神戸市内に点在する海岸沿いの古墳の調査が進行していることから、『海辺の古墳』と題し、他機関からも関連遺物を借用し、７月26日から９月11日まで開催した。この間の入館者数は4,147名であった。また、展示期間中の８月28日に、二上山博物館館長石野博信氏による講演会「海洋航海民と古墳」を開催した。聴講者は169名であった。７月30日と８月６日にはスライド映写による展示遺跡の解説を行い、それぞれ67名、48名の参加者を得た。

『海辺の古墳』展示遺物は次頁の通りである。

資　料　名	点数	出土遺跡名	所　　蔵	備　考
船形土製品	4	大浦浜遺跡	香川県教育委員会	
ミニチュア土製品	7	〃	〃	
石製祭祀遺物	14	〃	〃	
耳環(銅製)	1	〃	〃	
ミニチュア土製品	4	〃	〃	
土玉	2	〃	〃	
朝顔形埴輪	1	打出小槌古墳	芦屋市教育委員会	
円筒埴輪	2	〃	〃	
人物埴輪	1	〃	〃	
入れ墨を持つ人物埴輪	1	〃	〃	レプリカ
形象埴輪(破片)	3	〃	〃	
人物埴輪(破片)	1	〃	〃	
金製垂飾付耳飾　1対	2	女木島丸山古墳	高松市歴史資料館	
三角縁神獣鏡	1	水堂古墳	尼崎市教育委員会	
鉄刀	1	〃	〃	
鉄剣	1	〃	〃	
鉄槍	1	〃	〃	
鉄斧	2	〃	〃	
ヤリガンナ	1	〃	〃	
胡ろく金具	1	〃	〃	
船形埴輪	1	寺口和田1号墳	奈良県立橿原考古学研究所	
鉄鏃	6	御旅山3号墳	姫路市教育委員会	
銅鏃	6	〃	〃	
鉄製刀子	2	〃	〃	
竹管文のある土師器(破片)	2	丁瓢塚古墳	〃	
三角縁神獣鏡	1	コヤダニ古墳	淡路文化史料館	
製塩土器	1	旧城内遺跡	〃	
土師器甕	1	〃	〃	
滑石製臼玉	1連	〃	〃	
四獣鏡	1	御旅山1号墳	妻鹿連合自治会	
金製垂飾付耳飾　1対	2	カンス塚古墳	加古川市教育委員会	
鶏形埴輪	1	金津山古墳	芦屋市教育委員会	
円筒埴輪	1	〃	〃	
須恵器　坏蓋	2	明神古墳	一宮町教育委員会	
須恵器　提瓶	1	明神古墳	一宮町教育委員会	
土師器　小型坩	2	〃	〃	
土師器　坏	1	〃	〃	

資　料　名	点数	出土遺跡名	所　蔵	備　考
鉄製U字形鍬先	1	明神古墳	一宮町教育委員会	
碧玉製管玉	7	〃	〃	
耳環	1	〃	〃	
鉄鏃	8	〃	〃	
鉄製刀子	2	〃	〃	
用途不明石製品	2	〃	〃	
土玉	1連	〃	〃	
須恵器　坏身	2	〃	〃	
棒状石製品	6	明神古墳	西淡町教育委員会	
鉄鏃	5	〃	〃	
鉄刀	1	〃	〃	
鉄製刀子	1	〃	〃	
鉄製釣針	1	〃	〃	
耳環	1	〃	〃	
土玉	2連	〃	〃	
勾玉	1	〃	〃	
碧玉製管玉	1	〃	〃	
水晶製切子玉	1	〃	〃	
蛸壺形土器	1	〃	〃	
土錘	1	〃	〃	
軽石製浮子	1	〃	〃	
須恵器	8	〃	〃	
棒状石製品	2	〃	〃	
鉄鏃	6	〃	〃	
鉄刀	1	〃	〃	
碧玉製管玉	1	〃	〃	
ガラス小玉	1	〃	〃	
土玉	35	〃	〃	
水晶製切子玉	4	〃	〃	
須恵器	8	〃	〃	
三角縁神獣鏡	1	御旅山3号墳	兵庫県立歴史博物館	
鏡・玉類	5	大歳山1号墳	神戸市立博物館	
三角縁神獣鏡	1	東求女塚古墳	〃	レプリカ
車輪石	1	〃	〃	〃
石釧	1	ヘボソ塚古墳	〃	
総　点　数　　201点　　4連				

本年度は震災当日の１月17日より年度末まで閉館したため、入館者数は27,861人となり、前年度までに比べ激減した。なお、１月31日から３月31日までの毎日、被災した受験生のために学習室として埋蔵文化財センター研修室を午前９：00から午後９：00までの間開放し、延べ276人の利用があった。

〔文化財保護強調週間の催し〕

大歳山遺跡公園（垂水区西舞子４丁目）では例年どおり、11月１日から11月７日までの間、復元した竪穴住居の内部の公開とともに、古代人の生活の一部を実際に体験できるよう、舞錐による火おこし、臼・杵による脱穀等を行った。また、火おこしができた参加者には「古代人認定書」を配付した。なお、７日間の参加者は1,100名であった。

〔地域活動への参加〕

市内各地の公民館や学校では、さまざまな地域・文化活動が行われているが、各地域の歴史を地元の方々に知っていただくことを目的に、周辺遺跡の出土遺物や写真パネルの展示会を開催している。今年度は以下の施設で文化財展を開催した。

(1) 西区玉津南公民館　「明石川流域の弥生の村」（５月21日～５月26日）

今年度で11回目の文化財展で、同公民館の所在する明石川流域の弥生遺跡から出土した遺物を展示した。

(2) 北区長尾町公民館　「長尾町文化財展」（11月１日～11月３日）

今年度で９回目の文化財展で、同公民館の所在する長尾町内の平安時代から鎌倉時代の遺跡出土遺物や写真パネルを展示した。

〔現地説明会の開催と資料配付〕

(1) 祇園遺跡　平安時代末期の庭園内の園池と多量の山城系土師器小皿が出土し、福原京と関連する遺構ではないかと考えられた。現地説明会は11月15日～18日の間開催し、480名の見学者があった。

(2) 西求女塚古墳第７次調査　前年度11面の青銅鏡が出土し、多数の見学者があった。今年度はくびれ部の発掘調査を実施し、前方後方墳であることが確認された。12月４日に現地説明会を開催し、330名の参加者があった。

〔刊行物〕

平成６年度の埋蔵文化財関係刊行物は以下の３点である。

(1) 平成４年度　神戸市埋蔵文化財年報　頒価1,800円

(2) 上沢遺跡発掘調査報告書　頒価1,100円

(3) 海辺の古墳　頒価　200円

〔資料等の貸出し〕

平成６年度に各機関等へ貸し出した資料は、写真資料80点、遺物等75点であった。貸出し先及び貸出し資料名は次のとおりである。

写真資料名	点数	貸出先	掲載書等名	貸出期間
五色塚古墳	3	株式会社　徳間書店	国指定史跡大観第５巻	６．４．28～６．５．17
処女塚古墳	5			
五色塚古墳　鰭付円筒埴輪	1	群馬県立歴史博物館	群馬の埴輪	６．５．９～６．９．30
五色塚古墳　航空写真	2	株式会社　風土社	兵庫県風土記	６．６．７～６．６．20
鰭付円筒埴輪	1			
処女塚古墳　航空写真	1			
西求女塚古墳　出土鏡集合	1	株式会社　松本企画	歴史Ｅｙｅ	６．６．８～６．７．11
滝ノ奥経塚　銅銭	4	兵庫埋蔵銭調査会	出土銭の分類法	６．６．15～６．８．30
Ｘ線写真	7		中世編	
高塚山古墳　石室線刻画	3	神戸市立博物館	装飾古墳の世界	
宅原遺跡　岡下地区　ST01	2	芦屋市立美術博物館	中世の芦屋	６．７．18～６．９．30
塩田遺跡　SK02	1		－戦乱と庶民生活－	
新方遺跡高ナギ地点	3			
第１遺構面全景				
新方遺跡高ナギ地点　SE01	1			
新方遺跡高ナギ地点	1			
SE02・03				
新方遺跡高ナギ地点	1			
土器出土状況				
郡家遺跡城の前地区	1			
１次調査土壙１				
如意寺塔址　SE01断面	1			
森北町遺跡　遺物出土状況	2			
五毛遺跡　遺物出土状況	4			
五毛遺跡　調査風景	2			

写真資料名	点数	貸出先	掲載書等名	貸出期間
五色塚古墳　航空写真	2	垂水区役所		6．7．26～6．8．5
五色塚古墳 後円部円筒埴輪列	1	東京書籍株式会社	新しい社会歴史資料集	6．8．1～6．8．26
五色塚古墳　航空写真	1	高槻市埋蔵文化財 調査センター	新池遺跡ガイドブック ・陶板製説明板	6．8．24～6．9．30
五色塚古墳　航空写真	2	㈶広島市歴史科学 教育事業団	第17回文化財展 図録・ポスター	6．8．24～6．9．30
五色塚古墳 後円部円筒埴輪列	2	㈱教材開発センター	小中学校歴史教材	6．9．1～6．9．10
五色塚古墳　鰭付円筒埴輪	1	至文堂	日本の美術　器材埴輪	6．9．6～6．11．30
大開遺跡　航空写真	1	株式会社　風土社	兵庫県風土記	6．9．8～6．9．18
住吉東古墳　家形埴輪	1	至文堂	日本の美術　器材埴輪	6．9．13～6．11．30
五色塚古墳　航空写真	1	㈱秋田書店	歴史と旅	6．9．　～6．10．24
西求女塚古墳	2	日本考古学協会	日本考古学年報46号	
滝ノ奥経塚　出土状況 〃 出土遺物集合写真	1 1	奈良県立 橿原考古学研究所 附属博物館	中世びとのくらしと 喜怒哀楽	6．9．28～6．11．28
西求女塚古墳　出土鏡	3	灘区役所	味泥・祭りの下町計画	6．10．6～6．10．31
大歳山遺跡　復原住居 〃 復原住居公開風景	1 1	垂水区役所	広報こうべ 垂水区版	6．11．　～6．12．22

写真資料名	点数	貸出先	掲載書等名	貸出期間
五色塚古墳　航空写真 〃　近景 〃　後円部 葺石を上げる 〃　後円部 葺石を葺く	2 1 1 1	近畿地方建設局	土木技術史を学ぶ 出展記録書籍作成	6．11．14～6．11．24
宅原遺跡	1	北区役所	広報こうべ　北区版	3．12．12～7．1．12
大開遺跡	1	㈶横浜市ふるさと歴史財団	大塚・歳勝土遺跡の時代	7．1．10～7．4．10
五色塚古墳　航空写真	1	㈲地人館	日本の歴史　第3巻	7．3．3～7．3．20
垂水・日向遺跡 縄文人足跡	1	㈱騎虎書房	日本一ブック	7．．～7．．
山田・中遺跡　焼失住居 池上遺跡　焼失住居	2	吉川弘文館	古代住居のはなし	7．3．～7．4．30
西求女塚古墳 調査風景ビデオ	1	毎日放送	MBSナウ 古墳と地震	7．3．27～7．4．7
神出古窯址群　須恵器鉢 〃　椀 〃　甕 軒丸瓦 軒平瓦	3 2 6 2 1	愛知県陶磁資料館	全国古窯陶磁片展	6．6．20～7．3．31
塩田遺跡　丹波壺 宅原遺跡岡下地区　青磁碗 宅原遺跡岡下地区　土師器皿 郡家遺跡地蔵元地区　瓦器椀 二ツ屋遺跡　白磁皿 森北町遺跡　瓦器羽釜	2 1 2 2 2 1	芦屋市立美術博物館	動乱と民衆の生活 －中世芦屋の動向－	6．9．21～6．11．25

写真資料名	点数	貸出先	掲載書等名	貸出期間
森北町遺跡　土師器皿	1	芦屋市立美術博物館	動乱と民衆の生活 －中世芦屋の動向－	6．9．21～6．11．25
五毛遺跡　青磁碗	1			
五毛遺跡　瀬戸碗	1			
五毛遺跡　土師器皿	10			
本山遺跡　曲物	1			
新方遺跡　曲物	1			
新方遺跡　下駄	1			
如意寺塔頭　舟形木製品	1			
居住遺跡　下駄	1			
滝ノ奥経塚　和鏡	6	奈良県立 橿原考古学研究所 附属博物館	中世びとのくらしと 喜怒哀楽	6．9．28～6．11．28
〃　青白磁・合子	2			
〃　刀子	1			
〃　飾金具	1			
〃　独鈷杵	1			
〃　経筒	1			

遺物名	点数	貸出先	展示会名	貸出期間
塩田遺跡　磨製石庖丁	3	兵庫県埋蔵文化財 調査事務所	米づくりの道具展	6．10．24～6．11．18
〃　磨製石庖丁未製品	4			
〃　砥石	1			
〃　石錐	2			
神出古窯址群　軒丸瓦	2	吹田市立博物館	瓦　－平安の都へ－	6．10．26～6．12．22
〃　軒平瓦	3			
〃　丸瓦	1			
〃　鬼瓦	1			
〃　須恵器　鉢	1			
〃　須恵器　椀	1			
〃　須恵器　皿	1			
〃　須恵器　硯	1			

2．文化財調査事業

本年度の埋蔵文化財発掘調査件数は、ほぼ前年度と同数の81件であった。発掘調査面積（底地面積）は42,264㎡、複数遺構面での延べ発掘調査面積は81,898㎡であった。その調査に要した経費は、およそ1,092,000千円であった。

本年度の各届出・通知・依頼等は下表の通りである。

保護法 57－1	保護法 57－2	保護法 57－3	保護法 57－5	保護法 57－6	保護法 98－2	開発行為 事前審査	試掘 依頼	発掘 依頼
11件	130件	50件	3件	1件	207件	180件	203件	24件

上表の届出件数から見ると、民間事業が圧倒的多数を占める。しかし、開発等の性格から見て圃場整備・区画整理事業等を公共事業と同等とみなし、面積比で見ると個人住宅に伴う発掘調査面積は1,370㎡、純然たる民間開発事業に伴う発掘調査面積は5,348㎡、公共事業及び公共事業的なものに伴う発掘調査面積は35,546㎡となり、公共主導事業に伴う発掘調査が大規模で、大勢を占めることが明確になる。

なお、文化財保護法第98条の2による通知件数は207件で、本項冒頭に記した発掘調査件数81件と齟齬をきたすが、ごく小規模な試掘調査を発掘調査件数と見なしていないためである。また、文化財保護法第57条の1による届出11件は、すべて民間発掘調査組織から届け出された開発事前調査で、いわゆる学術調査に伴うものは1件も含まれていない。

3．市内発掘調査の概要

本年度の発掘調査で注目された遺跡を時代順にまとめておきたい。

垂水・日向遺跡では第11次の調査になる。これまでに干潟を歩いた縄文時代早期人の足跡が数多く確認されているが、今回の調査では、海中に堆積したアカホヤ火山灰の上を歩いた足跡が確認された。現代に生きる我々とは異なり、降灰という理解できない現象に出くわした縄文人の驚きが感じられる。

昨年度に引き続き実施している**西求女塚古墳**は、慶長元年（1596年）の伏見地震によって竪穴式石室が破壊されていたことが判明した。散乱する石室石材中から青銅鏡12面が出土し、昨年度は新聞報道等で大きく取り上げられた。今年度はくびれ部の発掘調査を実施し、墳丘裾部の根石の配列から、前方後方墳であることが判明した。山陰系の土師器を出土し、前方後方墳であることは東方2㎞に存在する処女塚古墳との共通性の強さが確かめられた。

舞子浜遺跡では昨年度に引き続き本四架橋関連工事に伴う発掘調査を実施しているが、かつての砂浜に埋置された円筒棺群が出土した。その保存状態は良好で、人骨が完存している例もある。昨年度までの調査のものと併せると、これまでに17基が確認された。その範囲は東西350ｍ、南北50ｍ程度で、総数はかなりの数に昇ると考えられるが、点的な調査であるため、その分布状況は明らかでない。棺として使用された埴輪は、東方1㎞の五色塚古墳に併行する時期と考えられ、その性格と関連について考察しなければならない遺跡である。

大田町遺跡は旧山陽道沿いの遺跡で、これまでの調査で確認された建物跡や遺物から、須磨駅家との関連が指摘されている。本年度調査では同様の遺構の他に、据え置かれた奈良時代の高台を打ち欠いた須恵器壺中から和同開珎２枚、萬年通寶３枚、神功開寶１枚、判読不能銅銭１枚やメロンの仲間、ナス、モモの種が出土した。胞衣壺あるいは子供の成長を願う歯固めの儀式に関連するものでは、と考えられている。

神戸と平清盛は密接な関係を持つことは広く知られ、「福原京」について語られることが多いが、遺跡としてのそれは未確認であった。しかし、兵庫区の有馬街道の拡幅に伴う発掘調査で、**祇園遺跡**から強い関連を考えさせる調査成果があった。貴族の邸宅に伴うと考えられる石組みの園池が確認され、その池底から大量の土師器皿（かわらけ）が出土した。また、出土例としては希有な「吉州窯系玳玻天目小碗」や山城系軒瓦が出土した。これらの遺構・遺物は12世紀後半に限定され、この地域に存在したと伝えられる平氏の別邸との関連が注目される。

萩原城は、13世紀後半に築城され、16世紀後半に廃城になるまでの300年間、歴史の舞台にたびたび登場した中世城郭である。本年度の調査では、掘立柱建物、柵列、石垣、石橋、堀、横矢などが確認され、良好な中世城郭資料を得ている。

平成６年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (1)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	森北町遺跡	東灘区森北町 ２丁目	神戸市教育委員会	内藤　俊哉	50㎡ 200㎡	94.９.26～94.10.７	ピット・落ち込み	個人住宅建設
2	本山遺跡	東灘区本山中町 ４丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	口野　博史	100㎡ ㎡	94.８.３～94.８.24	弥生時代のピット・土坑	下水管敷設
3	出口遺跡	東灘区本山北町 １丁目	神戸市教育委員会	井尻　格	120㎡ ㎡	94.10.28～94.11.17	中世の土坑 弥生時代中期・中世の遺物包含層	個人住宅建設
4	郡家遺跡岸本地区 第３次調査	東灘区御影町 岸本	(財)神戸市スポーツ教育公社	内藤　俊哉	120㎡ 600㎡	94.11.６～95.１.16	掘立柱建物・溝・土坑 古墳時代後期の遺物	御影北地域福祉センター建設
5	篠原遺跡第９次調査	灘区篠原中町２	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	72㎡ 216㎡	94.５.10～94.５.30	中世の溝・土坑 弥生時代後期の土坑 弥生時代の溝・土坑	個人住宅建設
6	篠原遺跡第10次調査	灘区篠原北町 ２丁目	神戸市教育委員会	山口　英正	80㎡ 160㎡	94.６.１～94.６.14	弥生時代中期～後期の柱穴・土坑・溝	個人住宅建設
7	篠原遺跡第11次調査	灘区篠原本町	神戸市教育委員会	山口　英正	100㎡ ㎡	94.７.21～94.８.１	弥生時代後期の土坑 中世の溝	共同住宅建設
8	西求女塚古墳第６次調査	灘区都通３丁目	神戸市教育委員会	須藤　宏	600㎡ 1,800㎡	94.４.５～94.６.６	西求女塚古墳の周隍？ 奈良～平安時代の掘立柱建物・溝	会社社屋建設
9	西求女塚古墳第７次調査	灘区都通３丁目	神戸市教育委員会	安田　滋	265㎡ ㎡	94.８.22～94.12.16	前方後方墳、後方部・くびれ部裾の葺石、張り出し部、山陰系土器・布留式甕	重要遺跡範囲確認
10	日暮遺跡第６次調査	中央区筒井町 ３丁目	神戸市教育委員会	東　喜代秀	390㎡ ㎡	94.７.25～94.８.30	平安時代の掘立柱建物 緑釉陶器・土錘	共同住宅建設
11	雲井遺跡第６次調査	中央区旭通 ２丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	松林　宏典	268㎡ 804㎡	94.４.25～94.６.４	弥生時代中期の溝・流路 古墳時代後期の溝・ピット 墳砂	小野柄地域福祉センター建設工事
12	楠・荒田町遺跡 第13次調査	兵庫区荒田町 １丁目	神戸市教育委員会	丸山　潔 中村　大介	495㎡ ㎡	94.６.23～94.７.15	弥生時代中期の方形周溝墓４基	共同住宅建設
13	祇園遺跡第２次調査	兵庫区上祇園町	神戸市教育委員会	須藤　宏	380㎡ 1,140㎡	94.６.15～94.12.13	縄文の流路、弥生後期の溝、古墳時代の土坑、平安後期の屋敷、室町時代の石組溝	神戸三田線街路築造
14	祇園遺跡第３次調査	兵庫区上祇園町	神戸市教育委員会	口野　博史	56㎡ ㎡	94.６.23～94.７.14	明確な遺構なし 多量の遺物	個人住宅建設
15	祇園遺跡第４次調査	兵庫区上祇園町	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	20㎡ 40㎡	94.11.８～94.11.14	平安～鎌倉時代の溝 弥生土器	個人住宅建設
16	塚本遺跡第２次調査	兵庫区塚本通 ５丁目	神戸市教育委員会	富山　直人	1,030㎡ 2,060㎡	94.４.１～94.４.30	弥生時代前期の土坑 中世のピット	民間再開発 (御旅市場)
17	兵庫津遺跡	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	井尻　格	65㎡ ㎡	94.７.11～94.７.21	江戸時代の井戸・土坑・溝	マンション建設
18	岡場遺跡第１次調査	北区有野町岡場	神戸市教育委員会	山口　英正	150㎡ ㎡	94.10.12～94.10.26	中世の柱穴・焼土坑・溝	社員寮建設

平成６年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (2)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
19	宅原遺跡群有井地区 第４次調査	北区長尾町宅原	神戸市教育委員会	阿部　敬生	220㎡ ㎡	94.4.1～94.5.25	古墳時代の竪穴住居、柱穴・畦畔・流路	汚水管布設
20	中遺跡 日下部遺跡	北区八多町中・ 道場町日下部	神戸市教育委員会	口野　博史 橋詰　清孝	220㎡ ㎡	95.3.27～95.4.3	試掘調査 中世の遺構・遺物包含層	特定区画整理
21	中遺跡 下小名田遺跡	北区八多町中・ 下小名田・ 日下部	神戸市教育委員会	西岡　誠司 阿部　敬生	770㎡ ㎡	94.6.6～94.6.17	中世～近世の溝・土坑・ピット	汚水管布設
22	中遺跡 下小名田遺跡	北区八多町中・ 下小名田・ 日下部	神戸市教育委員会	井尻　格	30㎡ ㎡	94.10.11～94.10.14	試掘調査 遺構・遺物なし	下水管敷設
23	日下部遺跡第１次調査	北区道場町 日下部	神戸市教育委員会	菅本　宏明 谷　正俊	450㎡ ㎡	94.9.19～94.11.7	弥生時代後期の竪穴住居・土坑 平安時代後期の掘立柱建物・土坑	共同住宅建設
24	日下部遺跡	北区道場町 日下部	神戸市教育委員会	菅本　宏明	165㎡ ㎡	94.11.2～94.11.29	弥生時代後期の溝・落ち込み 平安時代の土坑・柱穴	県道三木三田線自歩道設置工事
25	日下部北遺跡	北区道場町 日下部	神戸市教育委員会	菅本　宏明	150㎡ ㎡	94.8.4～94.8.19	古墳時代の土坑 平安時代の土坑・柱穴	県道三木三田線自歩道設置工事
26	上小名田遺跡 吉尾遺跡	北区八多町 上小名田・吉尾	神戸市教育委員会	石島　三和 阿部　功	1,724㎡ ㎡	94.12.5～95.2.28	上小名田－ピット・土坑 吉尾－中世の掘立柱建物	圃場整備
27	深谷遺跡	北区八多町深谷	神戸市教育委員会	内藤　俊哉	650㎡ ㎡	94.4.26～94.5.28	近世の井戸・土坑	圃場整備
28	上小名田遺跡 附物遺跡	北区八多町 上小名田・附物	神戸市教育委員会	丹治　康明 石島　三和	633㎡ ㎡	94.4.11～94.4.25	試掘調査	圃場整備
29	奥遺跡第２次調査	北区淡河町萩原	㈶神戸市スポーツ教育公社	藤井　太郎	500㎡ ㎡	94.11.9～94.12.20	12～13世紀の土坑・水田畦畔	河川改修
30	淡河・萩原城第３次調査	北区淡河町 萩原字状ケ市	神戸市教育委員会	黒田　恭正 藤井　太郎	2,400㎡ ㎡	94.5.17～94.11.9	14～17世紀の掘立柱建物・柵列・溝・集石遺構・土坑・石室・石垣・石橋・堀・横矢	圃場整備
31	萩原城跡第４次調査	北区淡河町 萩原字野田	神戸市教育委員会	池田　毅 井尻　格	950㎡ ㎡	94.7.4～94.8.23	中世末～近世の掘立柱建物・土坑・溝	個人住宅建設
32	淡河・歳田遺跡	北区淡河町 淡河字歳田	㈶神戸市スポーツ教育公社	阿部　敬生	170㎡ ㎡	95.1.9～95.2.18	遺構なし 中世の遺物	国道428号線道路改良
33	三番町遺跡第７次調査	長田区三番町 ３丁目	㈶神戸市スポーツ教育公社	西岡　誠司 東　喜代秀	550㎡ ㎡	94.11.17～95.3.22	中世のピット・土坑 近世の溝・土坑	市営住宅建設 （番町第４住宅）
34	五番町遺跡第５次調査	長田区四番町 ６丁目	㈶神戸市スポーツ教育公社	松林　宏典	790㎡ 3,950㎡	94.6.23～94.10.28	縄文時代後期の土坑・ピット 縄文時代晩期の流路・土坑 中世のピット・土坑	番町第５住宅地区改良事業
35	戎町遺跡第12次調査	須磨区戎町 ３丁目	神戸市教育委員会	黒田　恭正	75㎡ 375㎡	94.4.20～94.6.2	弥生前期の遺物包含層 弥生中期の溝・土坑・ピット	共同住宅建設
36	戎町遺跡第13次調査	須磨区平田町 ３丁目	神戸市教育委員会	東　喜代秀	12㎡ ㎡	94.9.6～94.9.7	遺構なし 弥生土器	個人住宅兼共同住宅

平成６年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (3)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
37	大田町遺跡第５次調査	須磨区大田町 ５丁目	神戸市教育委員会	山口　英正 東　喜代秀	1,500㎡ 12,000㎡	94.9.19～95.2.21	弥生前期の壺８ 弥生中期の竪穴住居・大型石庖丁、水田址、平安掘立柱建物・井戸	市営住宅建設 （大田第２住宅）
38	大田町遺跡第４次調査	須磨区大田町 ６丁目	神戸市教育委員会	丸山　潔	54㎡ 162㎡	94.4.20～94.4.28	平安時代のピット・土坑	共同住宅建設
39	若木町遺跡	須磨区若木町 ３丁目	神戸市教育委員会	池田　毅	300㎡ 600㎡	94.12.5～95.1.17	12～13世紀のピット・溝	東須磨福祉センター・児童館建設
40	垂水・日向遺跡 第11次調査	垂水区日向 １丁目	㈶神戸市スポーツ教育公社	富山　直人	780㎡ 3,900㎡	94.6.27～94.12.17	縄文時代早期の足跡 縄文時代後期の流路 平安時代の柵列	垂水駅東第２種市街地再開発
41	舞子浜遺跡第９次調査	垂水区東舞子町	㈶神戸市スポーツ教育公社	西岡　誠司 中村　大介	500㎡ ㎡	94.4.1～94.7.15	古墳時代前期末～中期初めの埴輪円筒棺６基、周溝状遺構２基	舞子駅裏雨水幹線築造
42	舞子浜遺跡第10次調査	垂水区東舞子町	㈶神戸市スポーツ教育公社	谷　正俊 中村　大介	1,600㎡ ㎡	94.4.5～94.9.28	縄文時代の剝片埋納坑 弥生時代中期の土坑・石器製作址 古墳時代中期の溝状遺構	都市計画道路舞子多聞線建設
43	清水が丘遺跡第１次調査	垂水区清水が丘 ３丁目	神戸市教育委員会	安田　滋	490㎡ ㎡	94.7.19～94.8.17	弥生中期～後期の竪穴住居 古墳後期の竪穴住居・土坑・掘立柱建物、奈良時代の土坑	共同住宅建設
44	前開遺跡	西区伊川谷町 前開	神戸市教育委員会	池田　毅	32㎡ ㎡	94.8.11～94.8.11	試掘調査 文化財なし	前開地区土地基盤整備
45	前開遺跡	西区伊川谷町 小寺	㈶神戸市スポーツ教育公社	口野　博史	28㎡ ㎡	94.12.19～94.12.20	試掘調査 文化財なし	西神中央線拡幅
46	安養院庭園	西区伊川谷町 前開	神戸市教育委員会	前田　佳久 井尻　格	60㎡ ㎡	94.9.12～94.10.28	確認調査	安養院庭園史跡整備
47	小寺遺跡第３次調査	西区伊川谷町小寺字上ノカイチ	㈶神戸市スポーツ教育公社	阿部　敬生	220㎡ ㎡	94.10.3～94.11.30	６世紀末～８世紀前半の土坑・鋳造遺構・溝・ピット・落ち込み	長坂前開線道路改良
48	鬼神山遺跡	西区伊川谷町 上脇字鬼神山	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	200㎡ ㎡	94.11.22～94.11.25	試掘調査 文化財なし	ゴルフ場開発
49	白水遺跡第３次調査	西区伊川谷町 潤和	㈶神戸市スポーツ教育公社	安田　滋	1,310㎡ 3,930㎡	94.4.6～94.7.6	弥生後期の埋甕・溝 古墳中期～後期の掘立柱建物・祭祀遺構、平安後期の掘立柱建物	特定土地区画整理
50	今津遺跡	西区玉津町 今津字唯来	神戸市教育委員会	黒田　恭正	73㎡ ㎡	94.11.30～94.12.21	弥生時代前期の土坑 弥生時代中期の溝・土坑	共同住宅建設
51	新方遺跡北方地点 第３次調査	西区玉津町 新方字北方	神戸市教育委員会	浅谷　誠吾	300㎡ 600㎡	94.6.6～94.8.3	奈良時代の溝・柱穴 弥生時代中期の溝・土坑・柵	明石木見線 街路築造
52	新方遺跡北方地点 第４次調査	西区玉津町 新方字北方ほか	神戸市教育委員会	内藤　俊哉	450㎡ 1,350㎡	94.6.6～94.9.3	弥生中期の溝・土坑・柵列 古墳時代の溝・奈良時代 中世の掘立柱建物・土坑・溝	明石木見線街路築造
53	新方遺跡丁の坪地点 第５次調査	西区玉津町 高津橋字丁の坪	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	154㎡ 462㎡	94.6.7～94.7.29	中世の溝・土坑 弥生時代中期の竪穴住居・土坑・溝・石庖丁・玉	共同住宅建設
54	新方遺跡北方地点 第５次調査	西区玉津町 新方字北方	神戸市教育委員会	東　喜代秀	60㎡ 180㎡	94.6.20～94.7.1	弥生時代中期の壺形土器・石鏃 古墳時代のピット	倉庫建設

平成６年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (4)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
55	新方遺跡（大日地点）	西区玉津町 新方・伊川谷町 潤和	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	450㎡ 900㎡	94.11.28～95.2.14	中世のピット・溝 古墳時代以前の水田	分譲住宅建設
56	長谷遺跡	西区櫨谷町長谷	(財)神戸市スポーツ教育公社	丹治　康明 石島　三和	1,533㎡ 3,066㎡	94.5.12～94.10.12	中世の溝・ピット・土坑	西神中央線拡幅
57	栃木遺跡	西区櫨谷町 菅野字上井	(財)神戸市スポーツ教育公社	西岡　巧次 関野　豊	3,600㎡ 10,800㎡	94.4.12～95.3.10	弥生～古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物 平安時代の土坑・井戸・池状遺構	小部明石線道路改良
58	栃木遺跡	西区櫨谷町 栃木・菅野	神戸市教育委員会	井尻　格 山口　英正	144㎡ 244㎡	94.6.7～94.6.8 94.7.5～94.7.13	試掘調査 弥生時代の土坑、中世の土坑	土地改良 圃場整備
59	松本遺跡第３次調査	西区櫨谷町松本	神戸市教育委員会	山口　英正	450㎡ ㎡	94.4.7～94.4.21	中世の溝・畦畔	圃場整備
60	菅野遺跡 栃木遺跡	西区櫨谷町菅野	神戸市教育委員会	池田　毅 中村　大介	1,200㎡ 2,400㎡	94.8.26～94.11.25	弥生時代後期～中世の掘立柱建物・土坑・溝	圃場整備
61	菅野遺跡	西区櫨谷町菅野	神戸市教育委員会	井尻　格	480㎡ ㎡	94.4.13～94.5.16	伝菅野城に関する確認調査	圃場整備
62	西神N.T.内第65地点遺跡 第６次調査	西区樫野台 １丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	丹治　康明 池田　毅	650㎡ ㎡	94.4.6～94.5.31	弥生時代中期の竪穴住居・土坑・溝	西神地区開発 （公園整備）
63	城ケ谷遺跡	西区櫨谷町菅野	(財)神戸市スポーツ教育公社	丹治　康明 山口　秀正	1,500㎡ ㎡	94.5.16～94.5.31 94.7.20～94.9.9	試掘調査 弥生時代中期・中世の柱穴	西神地区開発
64	如意寺三重塔	西区櫨谷町谷口	神戸市教育委員会	浅谷　誠吾	100㎡ 400㎡	94.9.12～94.11.17	創建時期に伴う二成基壇 17世紀以降の雨落ち溝 塔築造以前の祭祀遺構	如意寺三重塔修理
65	松本遺跡	西区櫨谷町松本	神戸市教育委員会	井尻　格	450㎡ ㎡	94.12.8～94.12.27	中世の水田・溝 試掘調査 平安～鎌倉の遺物包含層	圃場整備
66	木津遺跡	西区押部谷町 木津	神戸市教育委員会	中村　大介	328㎡ ㎡	94.11.7～94.11.9	試掘調査	圃場整備
67	木津遺跡	西区押部谷町 木津	(財)神戸市スポーツ教育公社	丹治　康明	250㎡ ㎡	94.10.11～94.10.25	文化財なし	河川改修
68	養田中の池遺跡	西区押部谷町 養田	(財)神戸市スポーツ教育公社	谷　正俊	530㎡ ㎡	94.10.26～94.11.16	弥生時代中期の竪穴住居２棟・地山整形溝１か所	公園整備工事 （西神地区開発）
69	堅田遺跡	西区平野町堅田	神戸市教育委員会	谷　正俊	9㎡ ㎡	94.11.17～94.11.21	時期不明の溝状遺構	道路補修工事
70	権願寺遺跡	西区平野町 西戸田	神戸市教育委員会	浅谷　誠吾	210㎡ ㎡	94.4.6～94.4.28	弥生中期～後期の流路・ピット・落ち込み	個人住宅建設
71	印路遺跡	西区平野町印路	(財)神戸市スポーツ教育公社	内藤　俊哉	1,200㎡ ㎡	94.4.1～94.4.22	古墳後期～飛鳥～中世の掘立柱建物・土坑・溝 前年度からの継続調査	野村明石線道路改良
72	日輪寺遺跡	西区玉津町 小山字日輪寺	神戸市教育委員会	前田　佳久 松林　宏典 浅谷　誠吾	145㎡ 290㎡	94.11.18～94.11.29	中世の掘立柱建物・ピット・溝・土坑	宅地造成

平成６年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (5)

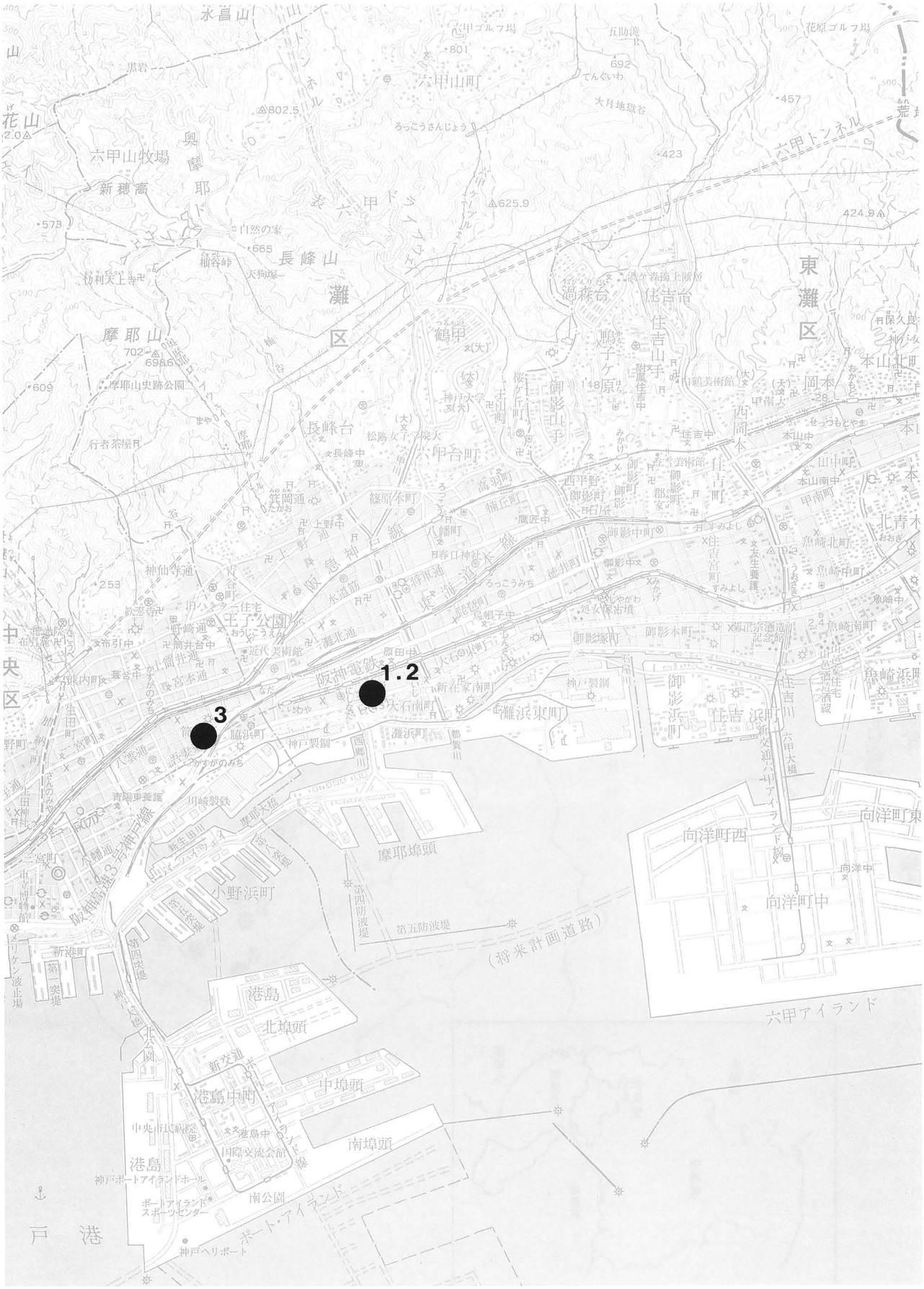
No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
73	小山遺跡	西区玉津町 小山字竹ノ戸	(財)神戸市スポーツ教育公社	斎木　巌 阿部　功 中村　大介	3,980㎡ ㎡	94.4.1～94.12.26	弥生時代後期の竪穴住居・溝・土坑	小山地区特定区画整理
74	水谷遺跡	西区玉津町水谷	神戸市教育委員会	山口　英正	280㎡ ㎡	94.9.26～94.10.12	中世の水田	宅地造成
75	玉津田中遺跡第７次調査	西区平野町中津	神戸市教育委員会	藤井　太郎	313㎡ 939㎡	94.4.5～94.5.12	弥生時代中期～古墳時代初期の微高地端部の溝	圃場整備
76	玉津田中遺跡第８次調査	西区平野町下村	(財)神戸市スポーツ教育公社	口野　博史 阿部　功	650㎡ 1,950㎡	94.4.5～94.6.17	弥生時代前期の貯蔵穴群・土坑・流路 弥生時代中期の流路・土坑	宮前田中線道路改良事業
77	玉津田中遺跡	西区玉津町 田中字城ケ市	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	75㎡ ㎡	94.8.2～94.8.5	中世以降の遺物包含層	共同住宅建設
78	玉津田中遺跡	西区玉津町田中	(財)神戸市スポーツ教育公社	口野　博史	258㎡ ㎡	94.11.2～94.12.12	中世の溝・ピット 弥生時代前期の落ち込み状遺構	下水管敷設
79	居住小山遺跡	西区長畑町	神戸市教育委員会	井尻　格	10㎡ ㎡	94.10.24～94.10.25	ピット 遺物なし	個人住宅建設
80	出合古瀬遺跡	西区玉津町 出合字古瀬	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	292㎡ ㎡	94.8.25～94.9.20	古墳時代？の溝・ピット	共同住宅建設
81	吉田南遺跡	西区森友１丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	口野　博史	246㎡ ㎡	94.9.2～94.9.14	遺物・遺構なし	下水処理場拡張
82	神戸大学医学部附属病院構内遺跡	中央区楠町 ７丁目	兵庫県教育委員会	吉田　昇 岡崎　正雄 水口　富夫	392㎡ ㎡	94.10.24～94.12.7	鎌倉時代　柱穴群・井戸・呪符木簡４点	神戸大学医学部附属図書館・管理棟新営工事
83	神戸大学医学部附属病院構内遺跡	中央区楠町 ７丁目	兵庫県教育委員会	西口　和彦 岡崎　正雄	㎡ ㎡	94.12.7～94.12.8		神戸大学医学部附属病院第一病棟建替工事
84	兵庫津遺跡	兵庫区西出町	兵庫県教育委員会	岡崎　正雄	㎡ ㎡	94.6.　～94.12.		神戸共同溝状 （西出その２）
85	二郎宮ノ前遺跡	北区有野町二郎字宮の前、竹、他	兵庫県教育委員会	渡辺　昇 山上　雅弘 所崎　明雄	12,317㎡ ㎡	94.7.5～95.3.17	鎌倉時代の棺跡と園池	公園都市線（第２期）車両留置施設設置事業
86	二郎宮ノ前遺跡	北区有野町二郎字竹、他	兵庫県教育委員会	渡辺　昇 山上　雅弘 所崎　明雄	940㎡ ㎡	94.12.19～95.1.13	近世　土坑・溝 古墳時代　溝 古代中世　掘立柱建物　居館堀	公園都市線第２期車両留置施設設置事業
87	八多中遺跡	北区八多町中	兵庫県教育委員会	長濱　誠司 井本　有二 仁尾　一人	320㎡ ㎡	94.4.18～94.4.25	水田に伴う７世紀　溝９条・土坑１基	山陽自動車道（神戸～三木）建設事業
88	八多中遺跡	北区八多町中	兵庫県教育委員会	久保　弘幸 岡本　一秀	1,321㎡ ㎡	94.8.1～94.10.14	平安時代後半の集落跡	山陽自動車道（神戸～三木）建設事業
89	八多中遺跡	北区八多町中 227-1	兵庫県教育委員会	井守　徳男 種定　淳介 長濱　誠司	256㎡ ㎡	94.7.4～94.7.12	12世紀後半　掘立柱建物２棟・溝１条	山陽自動車道（神戸～三木）建設事業
90	八多中遺跡	北区八多中字 戸崎227	兵庫県教育委員会	井守　徳男 種定　淳介 長濱　誠司	2,315㎡ ㎡	95.2.2～95.3.24	平安時代後期　溝・掘立柱建物 古墳時代　竪穴住居	山陽自動車道（神戸～三木）建設事業

平成６年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (6)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
91	勝雄城	北区淡河町勝雄 三木市志染町 戸田	兵庫県教育委員会	山下　史朗 松岡　千寿	235㎡ ㎡	95.2.13～95.3.8	室町時代末期　経塚	山陽自動車道三木ジャンクション建設事業
92		北区有野町有野 五社、他	兵庫県教育委員会	水口　富夫 三原　慎吾 高井　治巳	㎡ ㎡	94.11.17	文化財なし 試掘調査	兵庫県道高速北神戸線、神戸市道高速道路道北神戸線建設事業
93	中坊遺跡	垂水区名谷町 西名	兵庫県教育委員会	水口　富夫	48㎡ ㎡	94.11.7～94.11.8	文化財なし	神戸市道高速道路湾岸線（７期）事業
94	神戸市西区No.222地点	西区伊川谷町布施畑字中小白川 1348-8・9・13	兵庫県教育委員会	深井明比古 中村　弘 深江　英憲	111㎡ ㎡	94.5.17～94.5.20	文化財なし	一般国道28号線（西神道路）建設事業
95	西神自動車道No.８地点	西区伊川谷町西山ノ谷474-5	兵庫県教育委員会	深井明比古 中村　弘 深江　英憲	30㎡ ㎡	94.5.17～94.5.20	文化財なし	一般国道28号線（西神道路）建設事業
96	芝崎遺跡	西区平野町向井 12-2	兵庫県教育委員会	別府　洋二 鐵　英記 鈴木　敬二	73㎡ ㎡	94.5.18～94.5.19	弥生末～古墳　古墳末～中世初包含層　中世末遺物	一般国道175線平野拡幅事業
97	長坂遺跡	西区伊川谷町 長坂	兵庫県教育委員会	岡田　章一 岸本　一宏 服部　文章 菱田　淳子	3,494㎡ ㎡	94.5.24～94.9.22	鎌倉時代　掘立柱建物、鋳造施設	一般国道２号（神戸西バイパス）建設事業
98	上脇遺跡	西区伊川谷町 上脇	兵庫県教育委員会	岡田　章一 岸本　一宏 服部　文章 菱田　淳子	3,496㎡ ㎡	94.9.27～95.3.24	鎌倉時代　土坑 古墳時代　竪穴住居 弥生～古墳　堰・護岸柱	一般国道２号（神戸西バイパス）建設事業
99	神出古窯跡群	西区神出町南	兵庫県教育委員会	久保　弘幸 池田　征弘 岡本　一秀	3,517㎡ ㎡	94.10.3～95.3.24	平安時代後半　須恵器窯跡７基	神出浄水場施設拡張工事
100	神出古窯跡群	西区神出町南字大西574-42　他	兵庫県教育委員会	西口　和彦 久保　弘幸	㎡ ㎡	94.11.7～94.11.8		神出浄水場施設拡張工事
101	福中城跡	西区平野町福中	兵庫県教育委員会	山田　清朝	88㎡ ㎡	94.11.28	福中城の塀跡？	一般国道175線平野拡幅事業
102	福中城跡	西区平野町 福中207-2　他	兵庫県教育委員会	別府　洋二 鐵　英記 鈴木　敬二	73㎡ ㎡	94.5.18～94.5.19	弥生末～古墳　古墳末～中世初包含層　中世末遺物	一般国道175号線平野拡幅事業
103	扁保曾塚古墳	東灘区岡本 １丁目111-11・12	淡神文化財協会	阿部　嗣治	829㎡ ㎡	94.6.20～94.9.9	古墳時代中期　掘立柱建物３棟 弥生時代中期　土器棺	共同住宅建設
104	淡河中山遺跡	北区淡河町中山	淡神文化財協会	村尾　政人	2,310㎡ ㎡	94.4.4～94.7.9	中近世　土坑・溝・ピット・井戸	圃場整備
105	垂水日向遺跡	垂水区天ノ下	妙見山麓遺跡調査会	神崎　勝	㎡ ㎡	95.1.5～95.1.16 95.2.12～95.3.31	中世末　土坑・一石五輪塔 平安時代　ピット・土坑 古墳時代　土坑・溝	再開発事業
106	白水遺跡	西区伊川谷町潤和字池ノ尻字垣ノ内	兵庫考古学研究会	眞野　修	891㎡ 1,782㎡	94.4.18～95.3.31	近世　粘土採掘坑 中世　溝	土地区画整理事業
107	白水遺跡	西区伊川谷町潤和字才ノ神	高山歴史学研究所	高山　正久	1,278㎡ 2,566㎡	94.11.1～95.3.31	平安時代　掘立柱建物１棟 弥生時代　流路	土地区画整理事業
108	今津遺跡	西区玉津町 高津橋	高山歴史学研究所	高山　正久	2,400㎡ ㎡	94.4.1～94.10.13	平安時代　掘立柱建物１棟 弥生時代後期　土壙墓・流路	土地区画整理事業

平成６年度　神戸市埋蔵文化財調査位置図

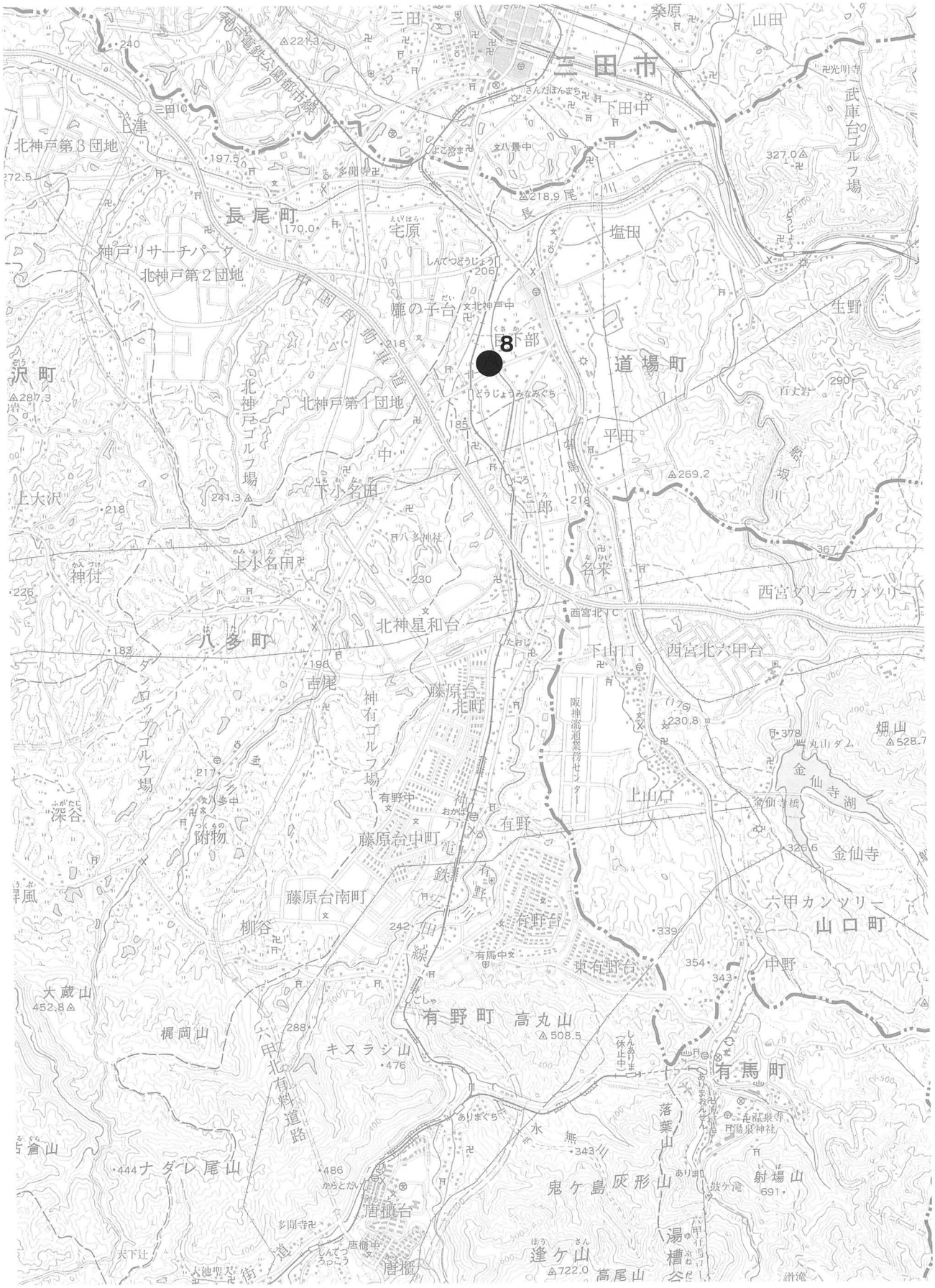
（各遺跡の番号は掲載遺跡と一致）


1.2
3
六甲山町
六甲山牧場
長峰山
摩耶山
摩耶山史跡公園
長峰台
六甲台町
鶴甲
灘区
東灘区
中央区
王子公園
阪急神戸線
阪神電鉄
東海道本線
灘浜東町
灘浜町
摩耶埠頭
小野浜町
向洋町西
向洋町中
向洋町東
六甲アイランド
港島
北埠頭
中埠頭
南埠頭
港島中町
港島
南公園
ポートアイランド
戸港
(将来計画道路)
第四防波堤
第五防波堤
六甲トンネル

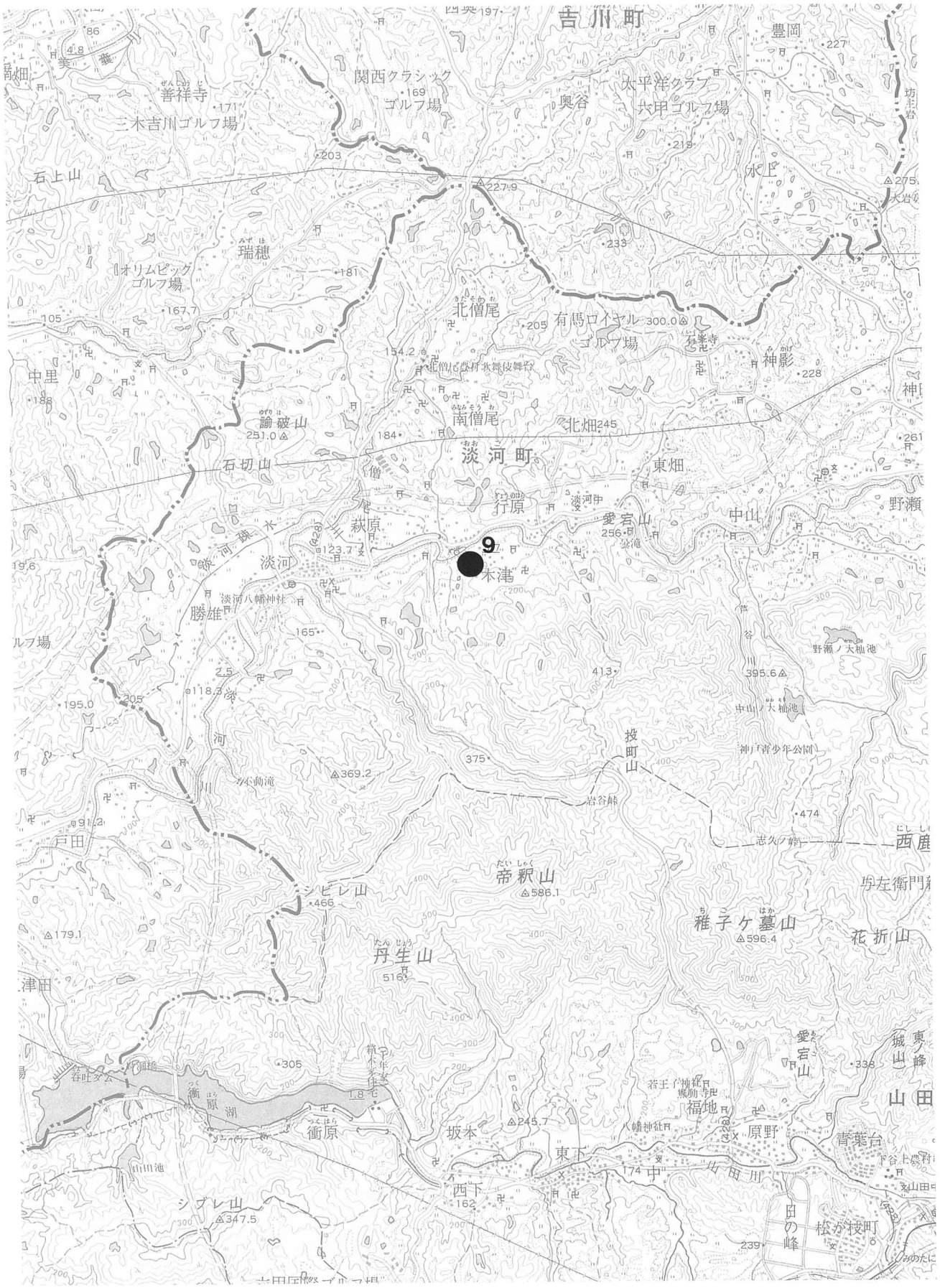
調査地点位置図１

5.6
4
7
10
11
12
兵庫区
長田区
須磨区
北五葉
南五葉
皇和台
君影町
高尾山
菊水山
再度公園
高雄山
修法ケ原
鍋蓋山
天王ダム
高取山
高取山町
横尾山
高倉台
高尾台
明神町
板宿町
若草町
萩乃町
鹿松町
緑が丘
妙法寺
東落合
南落合
白川
ひよどり台
ひよどり北町
しあわせの村
烏原町
平野町
石井町
氷室町
荒田町
湊川町
福原町
和田崎町
和田岬
兵庫港
須磨浦通
須磨港
海釣公園
高速道路
北神戸線
新幹線
山陽バイパス
阪神高速道路
西神有料道路
神戸高速鉄道
神戸電鉄有馬線
JR工場
長田港
新湊川
大橋中
須磨区役所
須磨浦公園
土砂積込桟橋

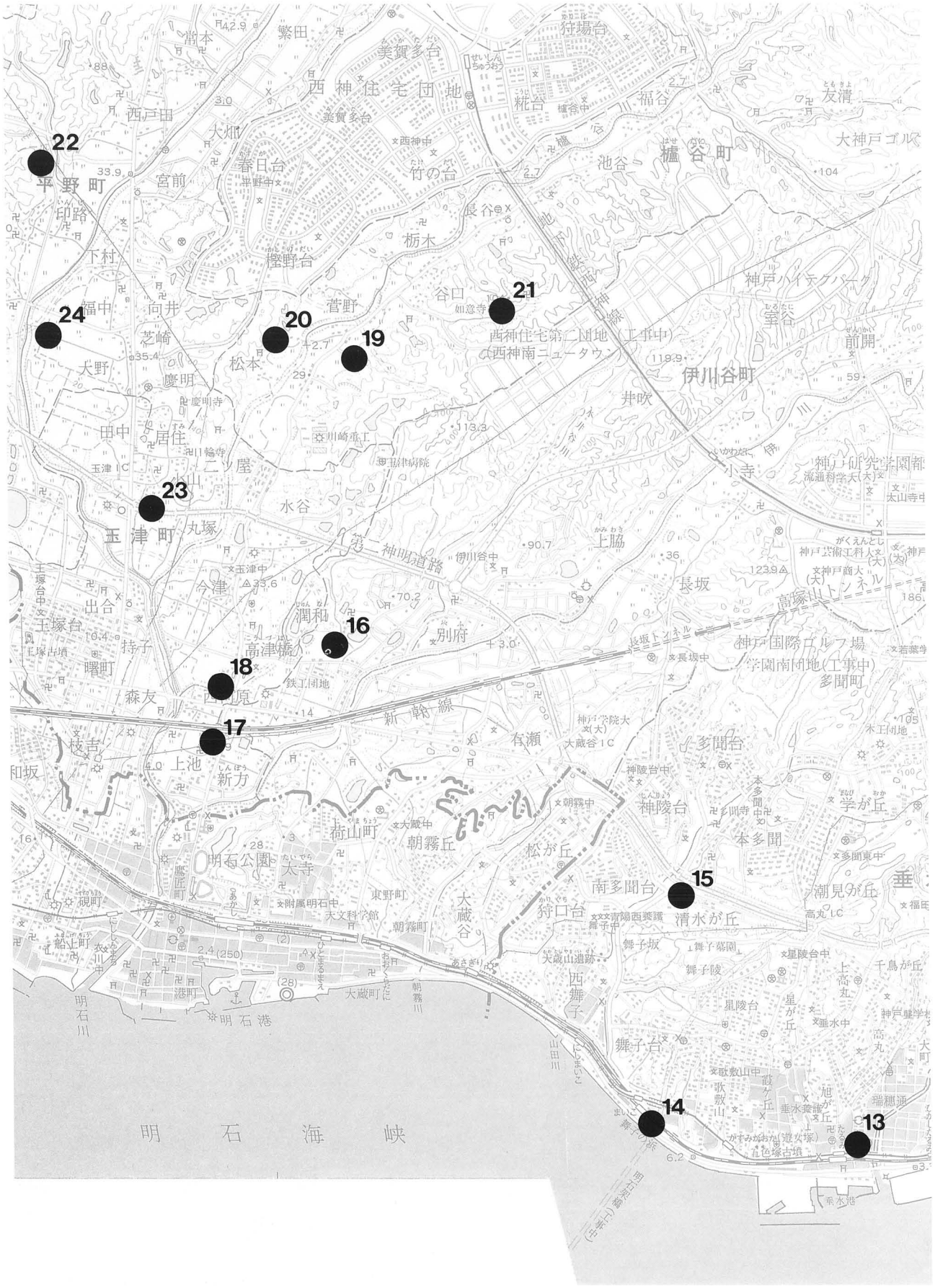
調査地点位置図２


8
三田市
長尾町
八多町
有野町
有馬町
道場町
山口町
北神戸第3団地
北神戸第2団地
北神戸第1団地
神戸リサーチパーク
北神戸ゴルフ場
神有ゴルフ場
武庫台ゴルフ場
西宮グリーンカントリー
六甲カンツリー
金仙寺湖
金仙寺
北神星和台
藤原台北町
藤原台中町
藤原台南町
有野台
東有野台
高丸山
キスラシ山
ナダレ尾山
鬼ケ島
灰形山
逢ケ山
唐櫃台
唐櫃
射場山
湯槽谷
落葉山
大蔵山
梶岡山
柳谷
深谷
附物
神付
上小名田
下小名田
名来
塩田
宅原
生野
平田
中野
下山口
上山口
西宮北六甲台
西宮北IC
三田IC
神戸電鉄公園都市線
JR福知山線
六甲北有料道路
阪神流通業務センター
丸山ダム
湯泉神社
有馬温泉寺
光明寺
多聞寺
八多神社
北神戸中
有馬中
有野中
八多中
三田中
下田中
長尾中
唐櫃中
ありまぐち
ありまおんせんぐち
しんありま（休止中）
水無
滑滝
天下辻
大池埋立街道

調査地点位置図３


吉川町
関西クラシック
ゴルフ場
太平洋クラブ
六甲ゴルフ場
三木吉川ゴルフ場
善祥寺
石上山
瑞穂
オリムピック
ゴルフ場
北僧尾
有馬ロイヤル
ゴルフ場
神影
中里
諭破山
南僧尾
北畑
淡河町
石切山
東畑
荻原
淡河
愛宕山
中山
野瀬
9
本津
勝雄
淡河八幡神社
野瀬ノ大池
中山ノ大池
神戸青少年公園
投町山
岩谷峠
志久ノ峠
西鹿
帝釈山
シビレ山
稚子ケ墓山
花折山
丹生山
戸田
津田
衝原湖
衝原
坂本
福地
原野
青葉台
東下
西下
中
シブレ山
松が枝町
山田
城東山
愛宕山

調査地点位置図 4


22
24
20
19
21
23
16
18
17
15
14
13
平野町
西神住宅団地
西神住宅第二団地（工事中）
（西神南ニュータウン）
伊川谷町
玉津町
第二神明道路
新幹線
明石海峡
明石港
神戸ハイテクパーク
神戸国際ゴルフ場
学園南団地（工事中）
多聞町
高塚山トンネル
長坂トンネル
神陵台
南多聞台
清水が丘
朝霧丘
松が丘
大蔵谷
狩口台
西舞子
舞子台
舞子坂
舞子陵
明石公園
太寺
垂水港

調査地点位置図５

Ⅱ．阪神・淡路大震災と埋蔵文化財

平成７年１月17日未明に発生した大震災は、市内各地域で多くの建物等に被害を及ぼした。その後に起こる復旧・復興に伴う土木・建築工事が、埋蔵文化財の保護に重大な影響を及ぼす事は、容易に推察できた。しかし、未曾有の出来事で、それに対処する方策を即座にたてるには、あまりにも困難が山積していた。

埋蔵文化財担当学芸員は、被災市民への支援活動の一方で、埋蔵文化財包蔵地上の被災状況の把握に努め、兵庫県教育委員会、文化庁と対応策を協議した。

１．被災埋蔵文化財包蔵地調査

神戸市内には約900か所、面積にして約3,400haの埋蔵文化財包蔵地がある。震災後の平成７年１月25日から１月29日にかけて、市内の埋蔵文化財包蔵地の被災状況調査を行った。被害が甚大であった東灘区から須磨区にかけての六甲山南麓の包蔵地を主として歩き、包蔵地内で今後予想される復旧・復興事業に伴って発生する埋蔵文化財調査の量を把握しようと努めた。

調査は市内を東と西に分け、当時はまだ困難な交通事情の中、限られた人員で徒歩により2,500分の１の地図に被災箇所を記入しながら調査した。その結果東灘区から須磨区の包蔵地207か所の内98箇所を調査し、234haに及ぶ被災包蔵地を確認した。また２月７日・８日にはこの資料に基づき、国・県・市合同で、東灘区から須磨区の13箇所の被災包蔵地調査をおこなった。

fig. 1　震災直後の処女塚古墳とその周辺（神戸市消防局撮影）

被災埋蔵文化財包蔵地の踏査

1月27日～29日、東灘区・灘区内の周知の遺跡内における被災状況を調査することになった。震災から10日後で、阪神高速道路など一部については、撤去工事がすでに始まっていたが、住宅などはほとんどまだ手つかずのころであった。倒壊した民家には、花が供えられているものや安否状況を記した紙が貼られたりしており、そのような中を一人で歩くことに心細いものを感じながらの3日間であった。

調査は東灘区から西へ向かうことにしたが、東灘区東部の芦屋市境の深江北町遺跡や本庄町遺跡から本山遺跡にかけては木造家屋を中心に相当な被害が認められた。このようなところでは倒壊家屋が道路を塞ぐところが多数あり、僅かな距離を進むのに相当なおおまわりを余儀なくされたりした。また、やむなく倒壊した家の上を通路としているところもあり、非常に複雑な気持ちで通ったことを覚えている。郡家遺跡では火災による被災もあったが、木造2階建住宅の2階部分がそのまま道路に飛び落ちているような状況も認められた。そして、処女塚古墳の少し北側には、阪神電鉄の高架があったはずなのにすでに撤去されており、見慣れたはずの景観が一変していた。このような、以前は何気なく目標物としていたものがなくなっているところが数多くみうけられた。また、地図を持って歩いていると、市民の方から様々な要望を託されることも度々であった。

灘区の都賀遺跡では火災による被災が認められたが、これまでの調査の後に建設された市営住宅については幸い延焼から免れていた。この後、近くの灘区民センターに立ち寄ることにした。当時、文化財課職員の一部は自衛隊員とともに援助物資の配送をここで担当しており、そこでみんなに会うことができた。僅かな時間ではあったが、この3日間で最も気持ちがホッとする時間であった。（Y．M）

fig. 2　火災が発生した戎町遺跡、松野遺跡付近（神戸市消防局撮影）

fig. 3　被災した松野遺跡付近

被災埋蔵文化財包蔵地の踏査

あの大震災の直後から、みんな何かに取りつかれたように各地へ支援に出ていた。

約１週間の時間が「埋蔵文化財の被害状況の把握をしなければ……」という声を出させたのだろうか。自身は「とてもそんな状況ではない」と思いながらも、職務を遂行せざるを得なかったジレンマに苛まれた。

１月24日　私自身震災後初めて、旧市街地に足を踏み入れた。マスコミの報道では感じ取れない、言葉では表現できない雰囲気が漂っていた。文化財課での泊明けの翌日午後、手始めに旧生田区から葺合区を同僚と二人で踏査を始めた。市章のついたヘルメットに防寒着、作業服、誰が見ても市役所の職員とわかる出で立ちのまま。足早に瓦礫の中を縫って歩いたことと、あるはずの道がなくて近道もできず倒壊寸前のビルの下を抜ける時の恐怖感が今更のように思い起こされる。そして、傍に人がいてくれる何とも言えない安堵感に満たされながら。

27日は単独で須磨区戎町遺跡から順に長田区の上沢遺跡まで踏査した。焼失家屋が多い地域であったため、単独行では心細く、何とも言えぬ恐怖感が襲ってきた。我が家より持参した弁当を頬張るにも、人目をはばかって。

28日は焚き出しのコーヒーで体を温めてから兵庫区をまたも単独踏査した。仮説住宅の申し込みが始まっていたためか、市民の方に何度も呼び止められた。偶然にも申し込み場所を知っていたのは幸いであった。

快晴に恵まれ、２日半をかけた旧市街地西半分の遺跡の被災状況調査は終わった。どこを見ても馴染みの「こうべ」の姿はなかった。これほど足を痛めて歩いたのは短い人生の中で初めての経験ではなかったか。しかし、そこには仕事を終えた満足感は微塵もなく、ただ虚しさだけが残った。（M．Y）

fig. 4　被災した上沢遺跡付近

fig. 5　被災した都賀遺跡付近

震災後の大歳山遺跡・五色塚古墳

１月20日、垂水区の給食センターから車におにぎりを積み、須磨区へと入った。国道２号線沿いの民家は、軒並み倒壊している。家財・衣類を運び出そうとしている人の姿が、時折目につく。しかし、両側の歩道はリュックを背負って、西へ向かう人々の列である。無言、早足である。車は少ない。

ＪＲ鷹取工場内の避難所へ向かう。周辺は焼け野原である。異臭が鼻をつく。道には人だかりが幾つもある。工場内に入るが、情報が混乱し、受取相手が見つからない。須磨区役所に連絡し、転送のため向かう。周辺は生活物資を受け取る人々で、車は動けない。長時間かかったが、全てのおにぎりを搬入する。

途中、幾つもの遺跡を通過しているが、その時は全くそのようなことは頭に浮かばなかい。境川遺跡、須磨浦公園遺跡、鷹取町遺跡、戎町遺跡、大田町遺跡……

１月21日、給食センターでの湯沸かし用燃料が不足したため、大歳山遺跡へと向かう。大歳山遺跡の復原竪穴住居内には薪が保管してある。毎年11月１日から７日までの公開期間中に、住居内で燃やすものである。

竪穴住居の扉の前に、盛り塩をし小豆が蒔かれている。これまでに見たこともないものである。近隣の人が、何かのまじないでもしたのであろうか。鳩の羽が散乱している。中へ入るのが少し怖い。竪穴住居には、全く被害はない。昔もそうだったのだろうか。薪を積めるだけ積み込む。遺跡の眼下の屋根は青いシートに覆われている。どうも川沿いの被害が大きいようだ。旧河道上に建築された家々であろうか。

１月22日、おにぎり配送後、カメラ・メジャーを携え被害状況確認のため五色塚古墳へ向かう。周辺は人気もなく、静かである。管理事務所の展示ケースのガラスがはずれ、床に散乱している。ケース内の埴輪は大きく移動し、傷だらけになっているが、転落しているものはない。埴輪を納めている収蔵庫内に入る。接合した円筒埴輪が転倒し、散乱している。高く積み上げたコンテナが傾き、もたれ合っているが、密集しているため幸いにも転倒はしていない。

墳丘上に登る。あちこちに亀裂が入り、葺石がずり落ちている。前方部上段の葺石には陥没も認められる。後円部上段は被害が大きい。墳丘復元のための盛土が大きいため、旧地表面を境に地滑りを起こしているようである。墳頂部埴輪列の外側には大きな亀裂が入り、斜面中央あたりで、葺石が外へ迫り出している。何ヶ所も同じ状況である。全ての位置と長さを計測し、写真撮影をする。

いつ大きな地滑りを引き起こすかわからないので、古墳入口の門扉を締め、針金で結束し、「当分の間　立入り禁止」即席の看板を掲げる。「当分の間」とはいつまでになるのだろう、と思いながら。

本庁へ向かう職員に、計測図とフィルムを託す。

１月23日、おにぎりをつくり、配送する。

１月24日、おにぎりをつくり、配送する。（Ｋ．Ｍ）

	分布図番号	遺跡名	包蔵地面積（千㎡）	被災率	被災面積（千㎡）	備考
東灘区	4	No. 4 散布地	20	0	0	
	5	郡家	400	50	200	
	7	No. 7 散布地	10	0	0	
	8	No. 8 散布地	10	1	1	*
	9	No. 9 散布地	20	20	4	
	10	坊ケ塚	70	40	28	
	11	処女塚古墳	30	15	5	
	12	東求女塚古墳	70	40	28	
	15	岡本梅林古墳	50	1	1	*
	16	No. 16 散布地	30	30	9	
	21	扁保曾塚	20	1	1	*
	22	No. 22 散布地	30	0	0	
	28	坂下山	20	1	1	*
	29	三条岡山	30	1	1	*
	30	森北町	190	1	2	*
	31	出口	40	1	1	*
	32	井戸田	50	60	30	
	33	本山中野	70	60	42	
	34	No. 34 散布地	80	30	24	
	35	北青木	150	1	1	*
	36	本山	250	70	175	
	37	岡本	20	20	4	
	38	深江北町	170	50	85	
	39	住吉宮町	220	50	110	
	40	本庄町	140	60	84	
	43	西岡本	20	0	0	
	44	西平野	20	1	1	*
	45	魚崎中町	150	80	120	
	46	岡本北	60	15	9	
	47	甲南町	10	80	8	
	48	御影山手	10	25	3	
	49	本山北	10	0	0	
	50	No. 50 散布地	3	15	1	*
	小計		2,473	—	979	

※　包蔵地面積が100,000㎡以下で、被災率１％の場合は、被災面積を1,000㎡として記載した。また、被災面積が1,000㎡を割った場合も1,000㎡として記載した。

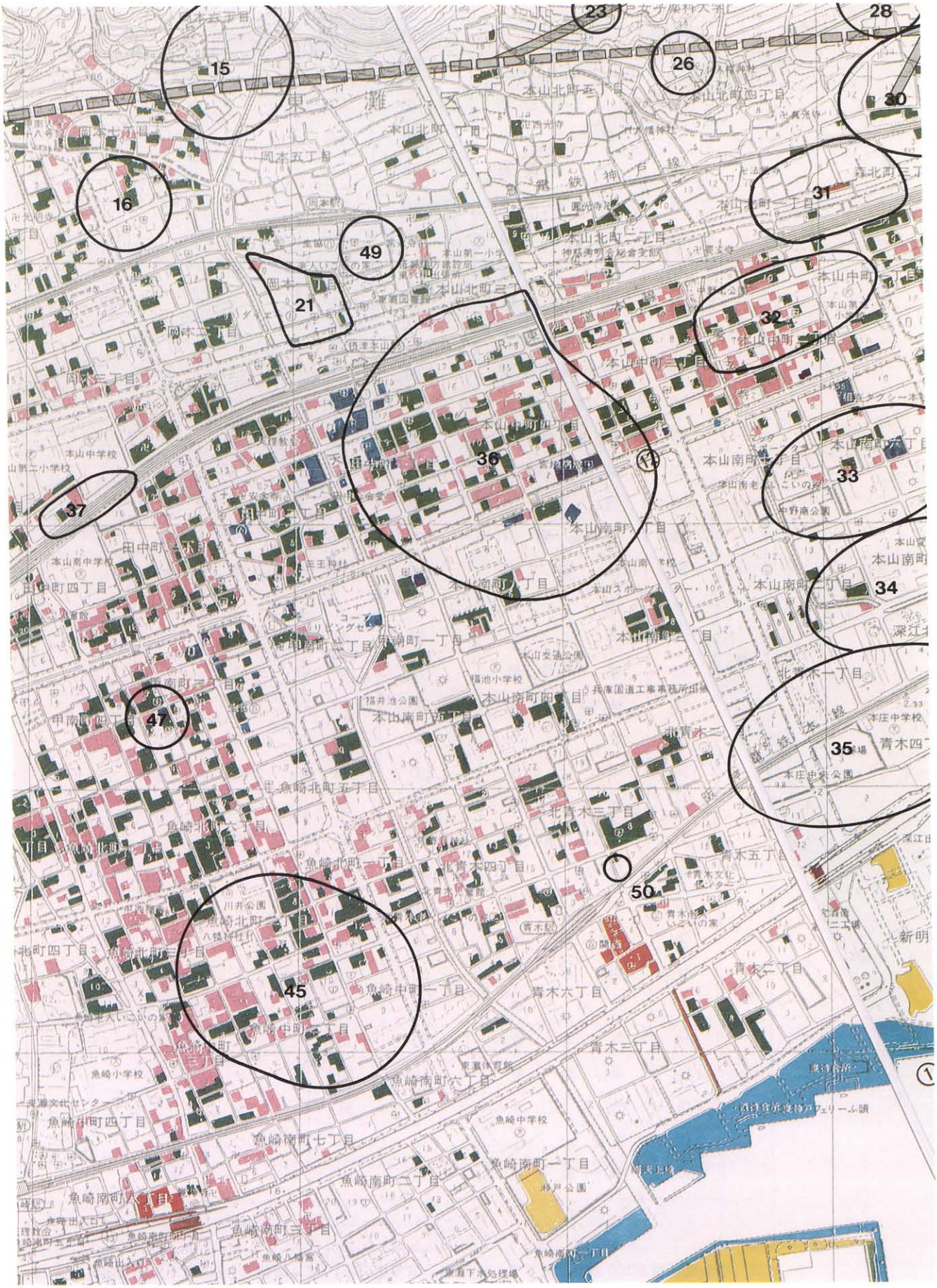


fig. 6　東灘区の遺跡と被災構造物

fig. 7　東灘区の遺跡と被災構造物

	分布図番号	遺跡名	包蔵地面積（千m²）	被災率	被災面積（千m²）	備考
灘区	9	No. 9 散布地	10	10	1	
	15	篠原	20	0	0	
	16	篠原	300	6	18	
	19	No. 19 散布地	10	30	3	
	20	No. 20 散布地	10	0	0	
	21	西求女塚古墳	40	40	16	
	22	No. 22 散布地	10	20	2	
	25	赤松町	10	0	0	
	26	赤坂通	30	5	2	*
	27	都賀	60	70	42	
	28	泉通	20	15	3	
	29	大石東	40	25	10	
	30	徳井町	20	70	14	
	31	八幡	90	5	5	*
	32	桜口町	20	75	15	
	33	篠原南	20	40	8	
	35	岩屋北町	10	10	1	
	36	五毛	70	1	1	*
	小計		790	—	141	

	分布図番号	遺跡名	包蔵地面積（千m²）	被災率	被災面積（千m²）	備考
中央区	22	旧三の宮駅構内	80	10	8	
	23	宇治川南	50	20	10	
	24	脇浜	40	20	8	
	25	東川崎町	90	0	0	
	26	中山手	70	10	7	
	27	雲井	220	15	33	
	28	日暮	140	30	42	
	37	生田	50	20	10	
	38	熊内	30	0	0	
	40	元町	20	10	2	
	41	花隈城跡	21	0	0	
	42	下山手	5	0	0	
	43	宮本通	20	25	5	
	44	磯上	10	1	1	*
	45	吾妻	20	20	4	
	小計		866	—	130	

fig. 8　灘区の遺跡と被災構造物

	分布図番号	遺跡名	包蔵地面積（千m²）	被災率	被災面積（千m²）	備考
兵庫区	7	祇園	40	1	1	
	12	熊野	40	0	0	
	13	河原	50	3	2	*
	15	No. 15	50	10	5	*
	16	雪御所	40	1	1	
	17	No. 17	35	20	7	
	21	東山	20	0	0	
	23	楠・荒田町	820	40	328	
	24	兵庫津	2,100	10	210	
	25	湊川	40	25	10	
	26	三川口	—	—	—	24と同一遺跡
	30	大開	80	40	32	
	31	上沢	60	60	36	
	32	福原	30	1	1	*
	33	水木	20	10	2	
	34	塚本	40	60	24	
	小計		3,465	—	659	

	分布図番号	遺跡名	包蔵地面積（千m²）	被災率	被災面積（千m²）	備考
長田区	4	室内	30	35	11	
	5	長田神社境内	170	10	17	
	11	長田南	30	1	1	*
	12	五番町	90	10	9	
	14	神楽	190	50	95	
	18	御蔵	20	60	12	
	19	苅藻	10	10	1	*
	21	念仏山古墳	20	1	1	*
	22	三番町	80	10	8	
	24	二葉町	70	50	35	
	小計		710	—	190	

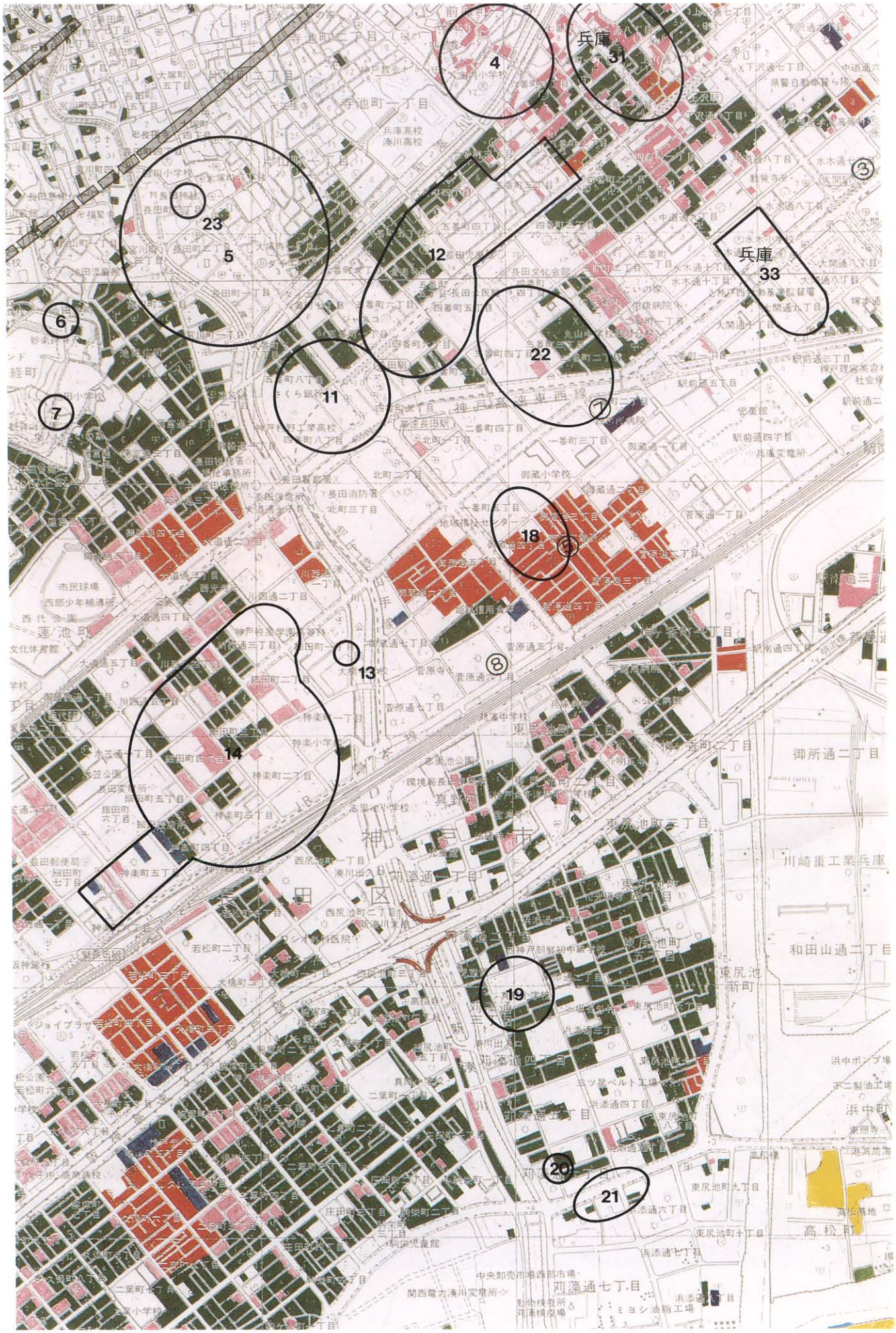


fig. 9　長田区の遺跡と被災構造物

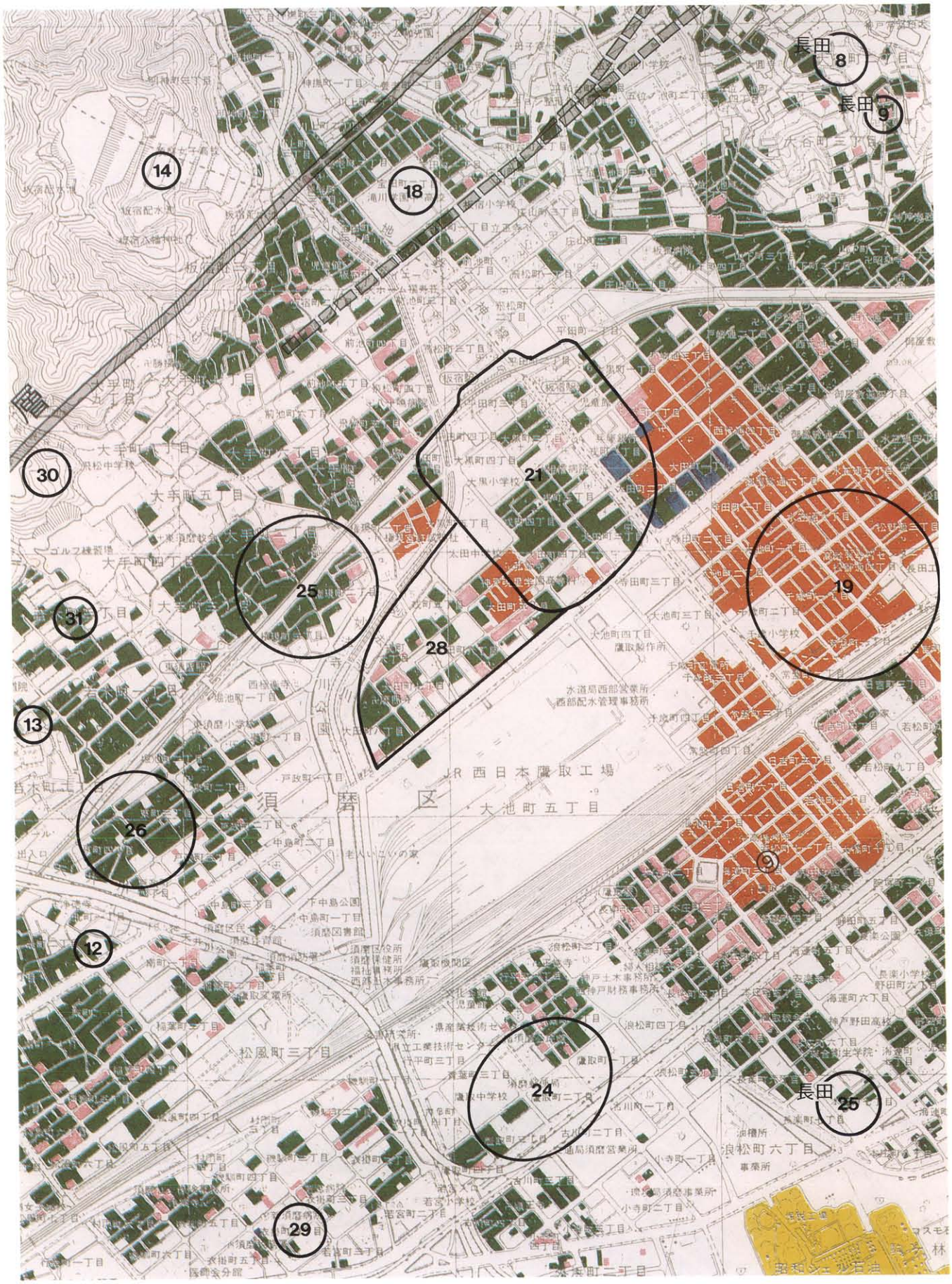


fig. 10　須磨区の遺跡と被災構造物

	分布図番号	遺跡名	包蔵地面積(千m²)	被災率	被災面積(千m²)	備考
須磨区	19	松野	80	75	60	
	21	戎町	170	50	85	
	24	鷹取町	40	1	1	*
	25	権現町	70	25	18	
	26	須磨東町	50	30	15	
	28	大田町	90	70	63	
	小計		500	—	242	

震災復興促進区域内　被災埋蔵文化財包蔵地

区名	対象遺跡数	調査対象包蔵地面積	被災面積	被災率
東灘区	33	247.3ha	98.0ha	39.6%
灘区	18	79.0ha	14.1ha	17.8%
中央区	15	86.6ha	13.0ha	15.0%
兵庫区	16	346.5ha	65.9ha	19.0%
長田区	10	71.0ha	19.0ha	26.7%
須磨区	6	50.0ha	24.2ha	48.4%
合計	98	880.4ha	234.2ha	

2．古墳の被害調査

県下最大の前方後円墳である**五色塚古墳**は、復元・整備し昭和50年度より公開されている。その五色塚古墳には、1月22日に被害状況の調査に入った。前方部・後円部ともに葺石がずり落ち、亀裂が無数に走っていた。殊に後円部上段は墳頂部の盛土が大きいため、地滑り状態であった。

3月14日から21日にかけて、市内に点在する古墳の被害調査を行った。灘区の**鬼塚古墳**は、市街地に残存する希少な横穴式石室で、基底部から3～4段の石材が露出して認められる。この石材のほとんどが崩落していた。

垂水区の**舞子古墳群**は、20基程度が残存する横穴式石室を埋葬施設とする古墳群である。この内の舞子台支群、尼ケ谷支群が被害を受けていた。舞子台支群2号墳は、南に開口する横穴式石室の右側壁最上段の数石が内側に転落し、天井石がずれていた。同3号墳は、南に開口する横穴式石室の右側壁が残存し露出していたが、そのうち最下段と2段目を残し、ほとんど転落崩壊していた。同5号墳は、南に開口する横穴式石室の奥壁最上段の石材が内側に転落していた。同6号墳は、南に開口する横穴式石室の入口付近の左側壁の石材が数石内側に転落していた。尼ケ支群1号墳は、道路工事によって削られた古墳の横穴式石室の側壁と思われる石材が露出していたが、その石材の数石が道路側に崩落していた。

西区の**日吉谷古墳群10号墳**は、南に開口する横穴式石室で、露頭していた石材のうち、

fig. 11　崩壊した鬼塚古墳の石室

右側壁の２石が外側に崩落していた。

北区の**北神第２、３号墳**は古墳の墳丘盛土が地滑りをおこし、古墳保護のために設けられた擁壁に亀裂が入った。

このように市内の古墳で、今回の地震により被害を受けた数は10か所になる。

３．出土遺物の被災

主として発掘調査によって出土した遺物は、埋蔵文化財センターにおいて保管・展示しているが、他に五色塚古墳の仮設管理事務所、長田区内の２か所の空き教室、学校、出土遺跡内の展示施設などもある。保管場所を問わず、多くの遺物が転倒、破損、そして不幸にも滅失した遺物もある。その被災状況は以下のとおりである。

保管場所	破損	転倒・混入	滅失	備考
埋蔵文化財センター	175点	6　箱		主として収蔵展示室内
二葉小学校	不明	多量		2,878箱収蔵
重池住宅	多量	多量	498箱	1,284箱収蔵
玉津環境センター	39点			吉田南遺跡関係遺物の展示
大開小学校	20点			大開遺跡関係遺物の展示
狩口台地域センター	2点			狩口台きつね塚古墳関係展示
五色塚古墳管理事務所	9点	軽微		古墳出土埴輪の収蔵・展示
その他	8点			

埋蔵文化財センター　震災当日、埋蔵文化財センターに出勤した職員は、大量の土器の転倒・破損に驚くとともに、余震による再度の被害を恐れ、収蔵展示室のスチール棚上に残る土器を安全な場所に移動するため室内に入った。しかし、通路には土器片が散乱し、歩ける状態ではなかっ

た。取り急ぎ、通路の破片を片付けた。できるかぎり、個体毎に分けようとしたが、その作業は困難であった。

埋蔵文化財センターでは、常設展示室で約600点、収蔵展示室で約3,000点を展示・公開している。今回の震災で被災した遺物は、常設展示室では7点に過ぎず、その他の168点は収蔵展示室のものである。この被災率の極端な差は、展示方法によるものである。常設展示室は、露出展示であり、また地震を予測して盗難・転倒防止の方策が取られていた。この内、転倒・破損したのは、テグスの結束が緩く、それをすり抜けたものである。

収蔵展示室は、スチール製物品棚に遺物を置いたものである。転倒防止策として取っていた措置は、自立出来ない底部を有するもののみ、アクリル製の輪台を使用していた。スチール製の棚は滑りやすく、また何らの結束も施していなかったため、多くの遺物が転倒・転落し、破損した。

なお、これらの破損した遺物は、平成7年度補助金を得て修復を終えている。

fig. 12　埋蔵文化財センター収蔵展示室

fig. 13　埋蔵文化財センター収蔵展示室

二葉小学校　小学校の木造・プレハブの2・3階空き教室6室に、吉田南遺跡出土土器等を、箱詰めで保管していた。遺物収納箱は、1.8m程度に積み上げていた。その多くが転倒し、ポリ袋から飛び出した遺物は混入し、破片となった窓ガラスなども遺物収納箱内に混じった。遺物の混入数は不明である。

震災後、被災者の避難所拡張のため、3月5日に4トンダンプトラックで、全てを埋蔵文化財センターに搬入した。未だ整理を終えていない。

重池住宅　1・2階が保育所、3～9階が市営住宅として利用されていた建物で、2階保育所の空き教室2室に、神出古窯址群、東川崎町遺跡等の出土遺物1,284箱を収蔵していた。この建物の2階部分が、地震により全壊し、収蔵遺物は搬出不能になった。住宅局や解体請負業者と交渉をもったが、芳しい返事はもらえなかった。建物解体中の3月22日、巡回中の職員が遺物収納箱の一部が見えているのを発見した。電話連絡等によって、急遽人手とダンプトラックを準備し、解体業者には時間的協力を求め、与えられた僅かな時間で可能な限りの遺物を搬出した。その結果、786箱を搬出した。残る498箱は、梁で完全に押しつぶされたり、搬出するにはあまりも危険な状態にあったため、諦めざるを得なかった。その後は、解体の重機によって飛び散るコンテナ片を、私たちは、ただ見つめているだけであった。

埋蔵文化財センターに搬入した遺物は、未だ整理を終えていない。

fig. 14　全壊した重池住宅

fig. 15　全壊した重池住宅

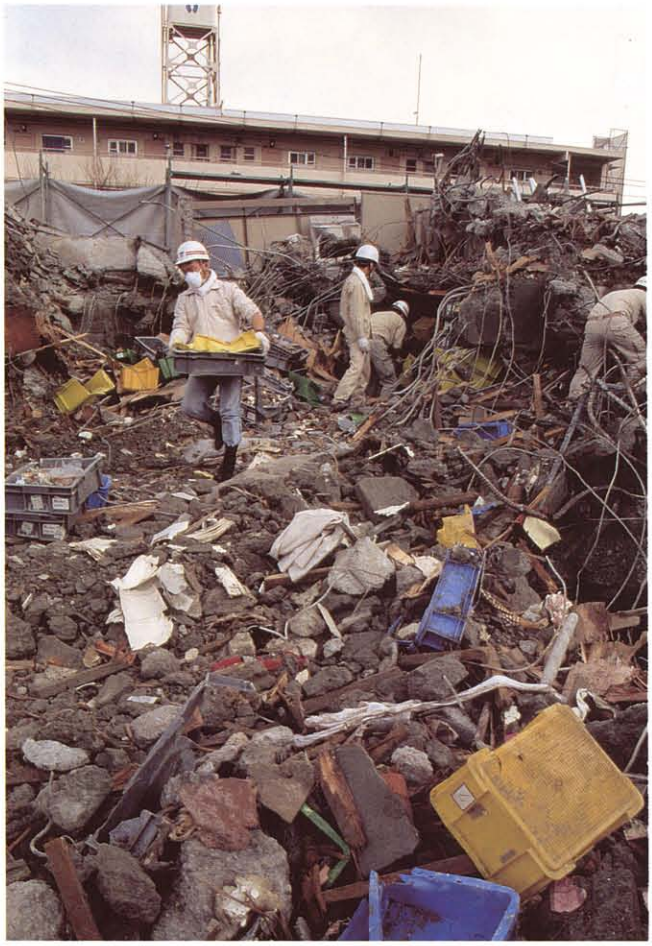


fig. 16　重池住宅　埋もれたコンテナを搬出する職員（上３点）

fig. 17　重池住宅　梁の下敷きになったコンテナ

玉津環境センター　吉田南遺跡に建設された環境センター建物のロビーに展示ケースを設け、吉田南遺跡出土遺物約250点を展示している。そのうち転倒し、破損した土器は39点である。

大開小学校　大開遺跡出土遺物のうち、代表的な遺物32点をショーケースに展示していた。地震によって、そのケースが転倒・全壊した。当該小学校は被災者の避難所となったため、ショーケースのガラス片に混じって散乱していた土器・石器は部屋の隅に押し込まれ、幸いにも一か所に保管されていた。石器を除く遺物はことごとく破損していたが、廃棄されていなかったのが救いであった。

fig. 18　玉津環境センター展示室

fig. 19　散乱した大開遺跡の遺物

狩口台地域センター　狩口台きつね塚古墳に隣接する地域センター内に、きつね塚古墳出土遺物20点を展示していた。展示ケースそのものに被害はなく、須恵器２点が転倒・破損していた。

五色塚古墳管理事務所　１月21日、墳丘被害の調査に訪れた際に、遺物の破損状況を確認した。五色塚古墳出土遺物は、古墳周濠内に設けられた仮設の事務所・倉庫に全てを収蔵し、復元したもの６点を展示している。倉庫内に積み上げられた遺物箱は、密集していたため、転倒は軽微であったが、復元された埴輪３本が転倒・破損していた。事務所内の展示ケースは、前面のガラスが破損し、内部の埴輪は大きく移動していた。埴輪のほとんどが破損していたが、軽微であった。

fig. 20　五色塚古墳墳頂部被災状況

その他の展示施設　遺跡調査地に建設された建物内に、事業主側が設けた展示ケースがあり、教育委員会が僅かではあるがその遺跡出土品を貸出し、展示をしていた。被害の数は多くはないが、いずれも土器は破損していた。

４．震災復興と埋蔵文化財発掘調査

震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについては、平成７年２月23日に国か

ら「阪神・淡路大震災に伴う復旧工事に係る埋蔵文化財の当面の取扱いについて（通知）」が出され、５月末日までの当分の間、復旧事業にかかる文化財保護法の届出・通知を不要とする取扱いが示された。その後３月29日に平成10年５月31日まで適用される「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針（通知）」が示された。これを受けて、４月28日に兵庫県から「阪神・淡路大震災の復旧・復興に伴う埋蔵文化財の取扱い適用要領について（通知）」が出され、震災の復旧・復興事業にかかる埋蔵文化財の取扱いが定められた。これによれば復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保護との整合を図ることを目的とし、個人住宅・店舗、小規模または簡易な集合住宅・事業所、生活関連公共施設、従前と規模・構造が大きく変わらない建物等の発掘調査が原則的に緩和されることになった。

(1)　補助対象事業の拡大と発掘調査支援体制の整備

発掘調査に要する費用は、個人住宅を除き原因者負担となっていたが、今回の震災による負担増を抑制する趣旨から、公費による助成枠が拡大され、従来の個人住宅の他に中小企業者まで補助対象事業が拡大された。一方、発掘調査業務の増大に対処するため、全国各自治体から専門職員が派遣され発掘調査にあたる体制が作られた。

(2)　復興調査

当初の試算では、今後の復興事業により生ずる調査業務量は民間・公共事業を含め、面積で約60haと推定された。毎年約12haの面積の調査が今後少なくとも５年間、新たに発生すると予測される。

５．埋蔵文化財担当職員の震災後の活動

地震発生当日、全ての発掘調査現場は停止し、埋蔵文化財担当職員は自転車・自家用車などで市役所・埋蔵文化財センターあるいは最寄りの神戸市の施設などへ出務した。一日中歩き続け、職場へたどり着いた職員もいる。その日のうちに、翌日以降の出務地に関して所属長より指示があり、市内各地の避難所・区役所・支援物資搬出入センター・学用品センター・給食センターなどへと分かれた。避難所では避難者の日常生活への支援を主としていた。区役所では、初動の頃は犠牲者の納棺を、それ以降は管内の避難者数の変動調査、苦情処理等をしていた。支援物資搬出入センターでは全国からの支援物資の受入れ、分別、避難所への配送等をしていた。学用品センターでは、全国から送られてくる学用品の受入れ、分別、配送等をしていた。給食センターでは震災直後に炊きだし、おにぎり製造及びその配送等をしていた。これらほとんどの出務地では24～36時間の連続勤務であった。

１月17日以降、３月31日までの埋蔵文化財担当職員の動向は、次頁の通りである。

なお、表中の「調査」とは、震災後１か月を経て緊急を要する住宅建設に伴う発掘調査を優先させ、再開したものである。また、「埋文Ｃ」とあるものの大部分は年度末にあたり特に急がねばならなかった実績報告書作成のため、一週間程度を交替で勤務したものである。

埋蔵文化財センターは、震災当日より閉館したが、臨時的任用職員による遺物整理等の作業は２月17日より再開した。

震災発生当日より年度末までの埋蔵文化財担当職員33名の動向

	1/17 31	2/1 15 28	3/1 15 31
1	区役所 — 避難所 —— 物資搬出入	学用品搬出入	埋文C
2	給食C —— 避難所	埋文C	学用品搬出入 —— 埋文C
3	給食C —— 物資搬出入	避難所	区役所
4	物資搬出入	学用品搬出入 —— 埋文C	避難所
5	給食C —— 物資搬出入	現場	埋文C —— 区役所
6	給食C —— 埋文C	学用品搬出入 —— 現場	物資搬出入
7	区役所 — 給食C	対策本部	
8	物資搬出入	避難所	物資搬出入
9	給食C —— 物資搬出入	埋文C —— 物資搬出入 — 学用品搬出入	埋文C —— 現場
10	給食C —— 物資搬出入	埋文C — 区役所	埋文C
11	給食C —— 物資搬出入	区役所	避難所 —— 現場 —— 避難所
12	物資搬出入	区役所 —— 現場 —— 物資搬出入	避難所 —— 埋文C
13	区役所 —— 物資搬出入	学用品搬出入	物資搬出入 — 埋文C — 区役所
14	避難所 —— 物資搬出入		現場
15	物資搬出入 — 区役所	現場	避難所
16	区役所 —— 物資搬出入		埋文C —— 区役所
17	給食C —— 物資搬出入	埋文C	
18	給食C —— 物資搬出入		避難所
19	物資搬出入	区役所	避難所
20	給食C —— 避難所		学用品搬出入 —— 埋文C
21	避難所		対策本部
22	給食C —— 区役所 —— 避難所		
23	物資搬出入	病欠	現場
24	給食C —— 避難所		学用品搬出入 —— 埋文C
25	物資搬入出	現場 —— 避難所	現場 —— 埋文C
26	区役所 —— 物資搬出入	区役所	避難所
27	対策本部		
28	物資搬出入		避難所 —— 区役所
29	給食C —— 物資搬出入	埋文C	
30	給食C	学用品搬出入	埋文C —— 避難所
31	物資搬出入	避難所	埋文C
32	埋文C —— 対策本部		
33	対策本部		

Ⅲ．平成６年度の発掘調査

１．西求女塚古墳（にしもとめづか）　第６次調査

１．はじめに

菟原処女の伝説で古くから知られる西求女塚古墳は、平成５年の第５次発掘調査により銅鏡をはじめとする豪華な副葬品が出土し、注目をあびている。

現在の神戸市街がひろがる六甲山南麓の平野部は六甲山系を供給源とする複合扇状地が発達しており、西求女塚古墳はこの扇状地末端、標高約６ｍの微高地上に築造されている。この地点は昭和初期の埋め立て以前の海岸線から約200ｍ、推定される古墳時代の海岸線からは約100ｍの位置にあたる。

この古墳の西約600ｍには式内社である敏馬神社が所在している。この神社の鎮座する高台は「往時敏馬の崎」とよばれる岬で、その周辺、西は脇浜から東は味泥の一帯にかけては敏馬の浦、あるいは敏馬の泊とよばれ、明石大門（海峡）の風待ち港として利用されていた。延喜式には「敏賈崎」として記載され、ここで新羅からの使節を生田社で醸造した神酒で接待すると記載されている。

敏馬神社の東にも小規模な入江が存在するほか、西求女塚古墳の西にも観音寺川と西郷川の流入する入江があり、この入江の沼沢地化したものが味泥（古くは深泥）という地名の起源になったとされている。かつての敏馬の浦は風光明媚なことで知られ、『万葉集』にはじまり、多くの文学作品に題材として取り上げられている。

西求女塚古墳の墳丘部分の調査は、これまでに第１次・第２次・第５次の３回が行われている。古墳近接地の調査は第３次と第４次の２回実施されており、中世の溝（第３次調査）、周濠状の落ち込み（第４次調査）が検出されている。

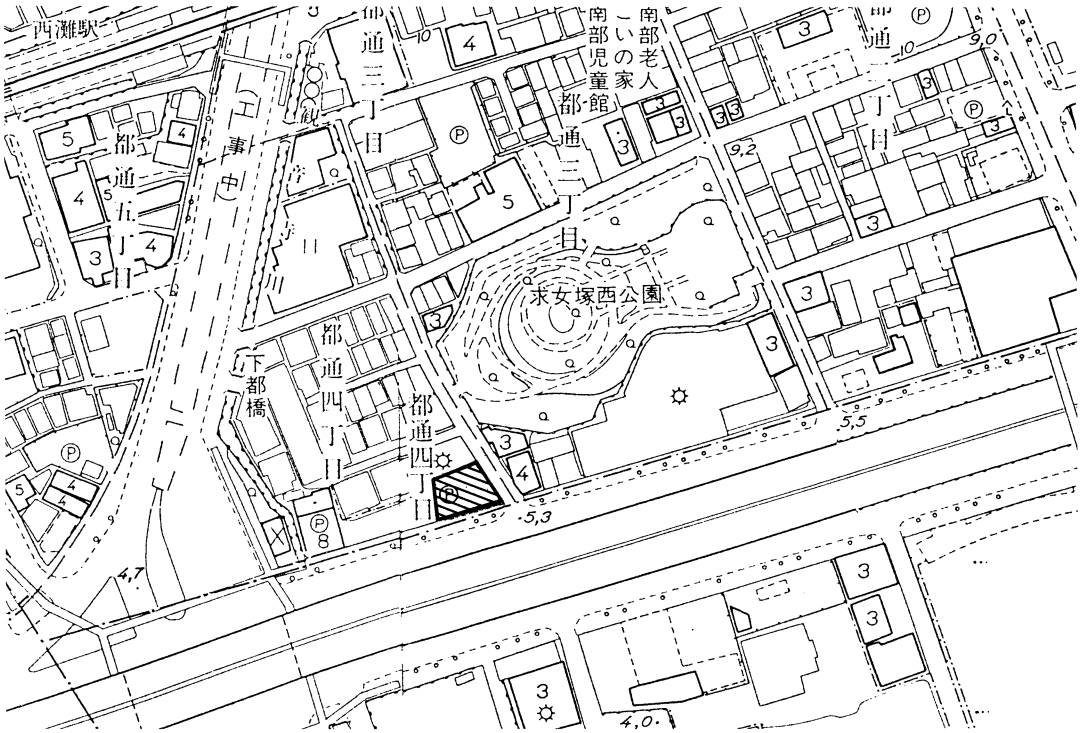


fig. 21
調査地点位置図
１：2,500

今回の調査地点は、東面するこの前方後方墳の前方部の南西部分にほぼ接する位置にあたる。

2．調査の概要　ビル建設工事の計画される部分について調査を行った。調査は作業の都合により西半を先行し、その終了後、東半の調査を行った。この結果、３枚の遺構面と遺物包含層が確認され、掘立柱建物・柱穴・土坑・溝・耕作痕・周濠状の落ち込みなどの遺構が検出された。

第１遺構面　現表土および旧表土（１層・２層）を除去すると、調査区の南半で石垣をもつ建物の基礎、石組みの排水溝２（SD01・02)、耕作地にともなう石垣（SW01）などが検出された。

SD01・SW01の北側は南側にくらべ一段高くなるが、この部分は３層を除去すると、４層上面で多数の耕作痕（鋤溝）が確認された。

SW01　調査区の南東部で検出した南北方向の石垣で、耕作地を区画する段に積まれたものである。11ｍ分を確認したが、さらに東の調査区外に続いている。南面する石垣面の大きさで20×10㎝ほどの亜角礫を４段積み上げる。遺存の良い部分で高さ46㎝をはかる。裏込めの石はない。SD33の覆土を削り込んで石垣が積まれているため、裏込め土の中から出土した遺物は奈良時代のものがほとんどである。この石垣を覆う土層は現代の盛り土であり、国道43号線の築造に伴ってこの遺構が埋められたと考えられる。

耕作痕　４層上面で検出した鋤溝は幅10～30㎝、深さ２～20㎝をはかる断面Ｕ字形のものである。SW01にほぼ直交する方向のものと平行するものがあるが、直交する方向である北北西から南南東へのものが多い。また転回するものもある。３層が耕作土であろう。３層出土の遺物は奈良時代から鎌倉時代のものがある。

SD05　幅約20㎝、深さ18㎝と、他の多くの鋤溝にくらべ幅があり、深い。この溝の東西で鋤溝の密度が異なることから、この溝は耕作地を区画する溝であるかと思われる。

第２遺構面　地形的には北から南へのわずかな緩斜面となっているが、調査区の南西分は南西方向にむかってやや急な角度で傾斜していく。調査区の西は現地形も急な傾斜で下がり、観音寺川へと続いている。

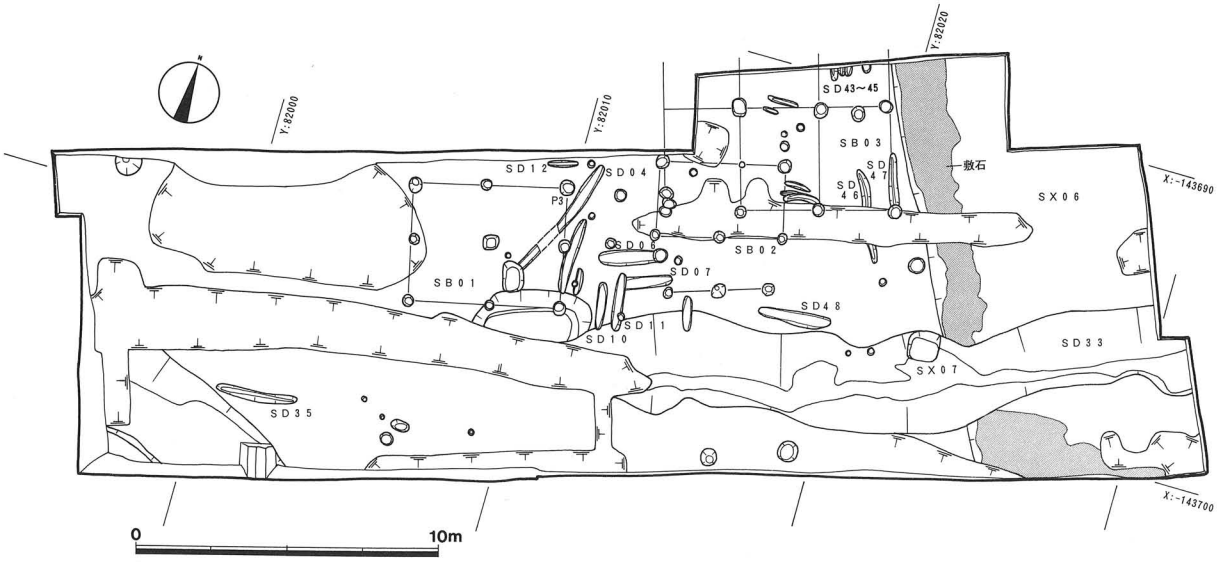


fig. 22　第２遺構面平面図

調査地の本来の地形は、西求女塚古墳の方向への北東に高くなる地形であったと考えられるが、ここを削平して土地利用がなされている。このため、西部の傾斜面では５層が残るが、東半では残らない。したがって第２遺構面は西半では５層、東半では６層上面で検出される。

第２遺構面の表土と考えられる第４層からは、古墳時代から平安時代の遺物が出土している。検出した遺構は、奈良時代以前のものから平安時代のものがあり、古墳周濠状遺構１（SX06）・掘立柱建物３（SB01～03）・溝13（SD04・06～12・33・35～37・48）・土坑７（SK01～04・06～08）・不整形の落ち込み１（SX01）・石組みをもつ土坑１（SX07）・鋤溝10（SD38～47）・柱穴などがある。

SX06　調査区の東部で検出した広く浅い遺構である。西求女塚古墳の兆域を画する浅い濠にも見える。西端の立ち上がり部には幅約1.4ｍで径３～10㎝程度の円礫が敷かれる。この石敷きは調査区の南部で東に屈曲しており、前方後方墳である西求女塚古墳を区画する濠としてうまく対応しそうに見える。ただし、この遺構からは奈良時代以降の遺物が底面から浮いた状態で出土しているが、底面からは遺物が出土せず、埋土からの古墳時代前期の遺物の出土もない。したがってこの遺構が古墳に関連するものなのか判断する材料に欠けるが、SD33と切り合い関係にあり、SD33の年代である奈良時代後期よりも古い遺構であることは確認できる。

SB01　柱間東西２間×南北２間（5.0×4.0ｍ）の掘立柱建物である。柱穴の掘形は径40～60㎝の平面円形で、遺構確認面からの深さは遺存状況の良いＰ３で61㎝をはかる。遺存状況の悪かったＰ４を除くすべての柱穴で柱の抜き取り痕が確認された。建物の中央部に柱穴かとも思われるSK01があるが、平面形や埋土の状況から別遺構と判断した。

Ｐ１・２・３・５・７・８から遺物が出土しているが、小破片が多い。Ｐ１の柱抜き取り穴から奈良時代の須恵器蓋の破片、Ｐ３の柱の抜き取り穴から土錘７点が出土している。奈良時代の建物であろうか。

SB02　柱間東西２間×南北１間（4.5×2.1ｍ）の掘立柱建物である。柱穴の掘形は径約45㎝の平面円形で、遺構確認面からの深さは遺存状況の良いＰ５で43㎝をはかる。南辺のＰ３・４・５では径約30㎝の断面円形の柱痕が確認されたが、北辺のＰ１・２では確認されず、土層堆積の状況から柱の抜き取りが行われたことが推測される。

すべての柱穴から遺物が出土しているが、小破片が多い。奈良時代か平安時代か時期を確定するのは困難である。

SB03　柱間東西４間×南北１間以上（10.1×3.4ｍ以上）の掘立柱建物である。建物は調査区の北に続くものと思われる。柱穴の掘形はほとんどが径50㎝の平面円形で、遺構確認面からの深さは遺存状況の良いＰ５で45㎝をはかる。埋土の堆積状況や柱痕が確認できなかったことなどから柱の抜き取りが行われたと推測される。

Ｐ１・２・３・４・５・７から遺物が出土しているが、小破片が多い。Ｐ２から内面黒色土器の破片が出土しており、平安時代の建物であろうと推測される。

SD04・06～12・37　調査区の中央北部に集中して存在する。幅40～60㎝、深さ約５㎝と、鋤溝にくらべて浅く、長さもほとんどが３ｍ以内におさまる短いものである。方向は東西方向のものと南北

方向のものがある。SD08はSB01のＰ５・SK03と切り合い関係にあり、両者よりも新しい。遺物は小破片が多く、遺構の時期判断に苦しむ。

SD33　調査区を東西に横切る幅2.5～3.0ｍ、深さ約50cmの溝である。調査区の西半はSD01など近現代の遺構によって撹乱をうけ、遺存しない。

調査区中部の東寄り部分で、礫とともに奈良時代後半の大量の土器が投棄されている。杯・高杯・甕・壺のほか、製塩土器・置きカマドなどが出土した。杯・高杯のつくりは都

fig. 23　SD33出土土器実測図（12～24：須恵器　その他：土師器）

風のもので、墨書土器も２点確認している。

SK03・SX06などの遺構と切り合い関係にあり、両者よりもSD33の方が新しい。

SD38～47　幅20～30cm、深さ約２cmのごく浅い鋤溝である。６層上面が遺構面となる部分で確認され、５層上面が遺構面となる部分では確認できなかった。４層上面で確認されたものと同様、北北西から南南東へのびるものとこれに直交するものがある。この遺構にともなう耕作土と考えられる４層からは土錘、古墳時代後期の耳環、奈良時代・平安時代の土器などが出土している。

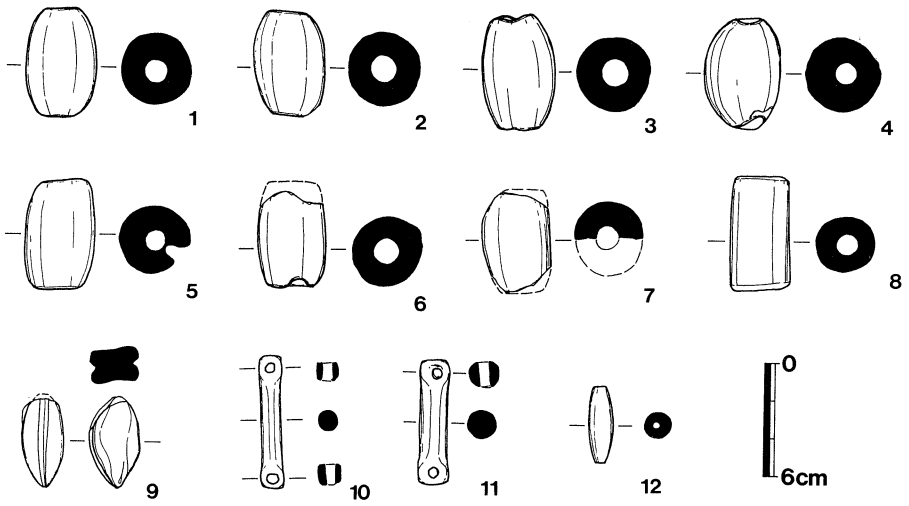


fig. 24　出土土錘実測図
（１～８：SD03－１
その他：４層）

SX07　石組みをもつ一辺約90cmの平面方形の土坑で、平安時代の杯などが出土した。SD33よりも新しい。

第３遺構面　調査区の西半に残る５ａ層から、縄文時代のサヌカイト石鏃・剝片が出土し、５ｂ層上面において遺構の検出作業をおこなった。この結果、約2.4×1.0ｍの平面長楕円形の土坑（SX08）が検出されたが、遺物の出土はなかった。

３．まとめ

濠状遺構（SX06）は今回の調査地では掘削時のものと考えられる遺物が出土せず、遺物からの時期決定ができなかった。しかし、敷石はないものの、第４次調査において同様の濠の立ち上がりと思われる段が確認されており（第３次調査地点は撹乱により平面プランとしては確認できなかった）、今回検出された周濠状の遺構とともに古墳にともなうものである可能性は高い。これが認められれば、本例は前期古墳の濠の例として貴重な資料となるだろう。

これにもまして重要と思われるのが、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物である。SD33から出土した土器類は高杯の脚部が面取りされるものであることなど、都風であって在地のものとは考えにくい。律令制下の古代にあって都風の土器が多量に出土する遺跡は公的な施設がそこに所在したと考えられる。当地にあっては、当然、文献に記載のある敏馬の泊がその候補にあがる。SB02は東西４間もある大きな建物であり、敏馬の泊に関連した施設である可能性も考えられる。

これまで文献を通じてしか知られなかった敏馬の泊が具体的な資料として初めて確認された意義は大きい。少なくとも今回の調査地の西に存在した入江の周囲から敏馬神社にかけては敏馬の泊に関連する施設の存在することが予想され、遺跡範囲も西方および北方に

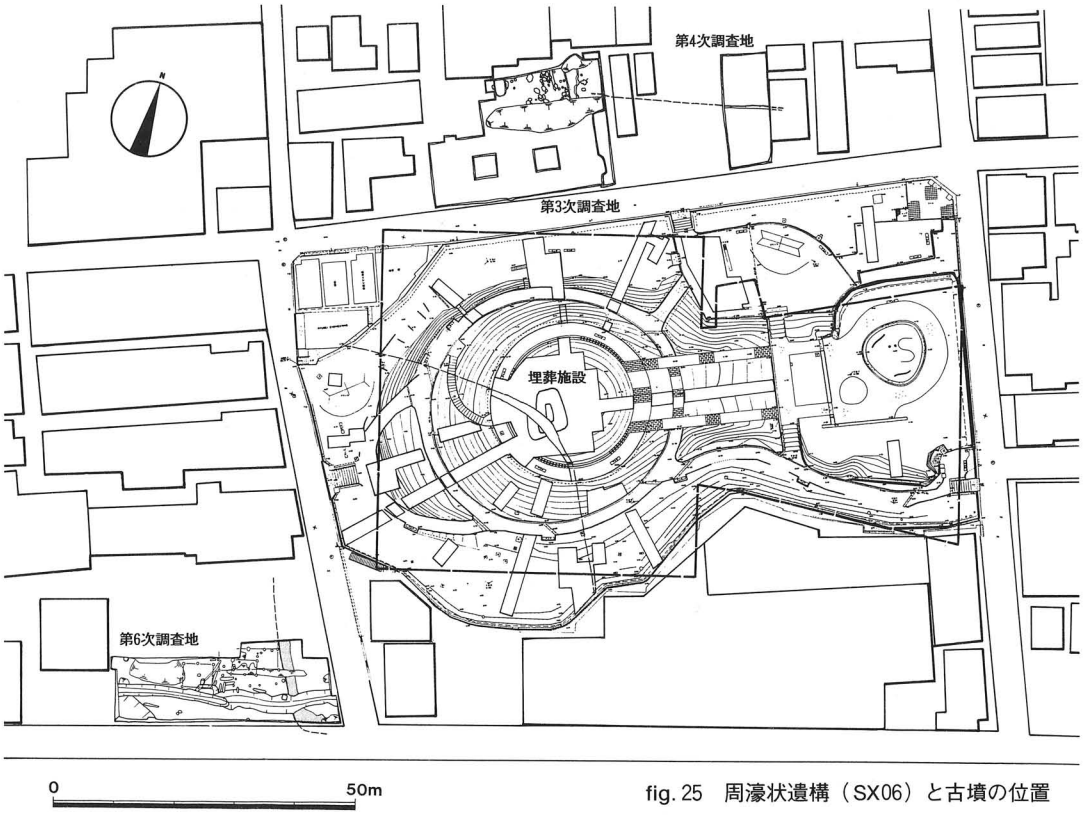


fig. 25　周濠状遺構（SX06）と古墳の位置

ひろがるものと考えられる。港都神戸の原点である敏馬の泊が初めてその姿を見せたことは意義深い。また、ここがそのような海上交通の要衝の地であることは、その前代に当地に西求女塚古墳の築造される意義ともかさなってくるだろう。

4層から出土した耳環は古墳時代後期の古墳の副葬品として通有のもので、その存在は、調査地周辺、おそらくは北の現在市街地となっている地域に古墳が存在した可能性を示している。さらに5層から出土した石器は縄文時代に人々の生活が営まれていたことの証しである。

今回の調査によってこれまで知られていなかった灘の歴史の数々が知られた。今後の調査の進展が期待される。

2．西求女塚古墳　第７次調査

（にしもとめづか）

1．はじめに

西求女塚古墳はこれまでに墳丘部分で３次、周辺部で３次の計６次にわたる調査が行われている。特に平成４～５年度に実施した第５次調査では、地震による地滑りによって大きく崩れた竪穴式石室から舶載の三角縁神獣鏡７面を含む12面分の鏡をはじめ、小札や剣・槍・刀・鉾・鏃・斧・鑿・ヤリガンナ・ヤス等の鉄製品と碧玉製紡錘車形石製品など多くの副葬品が出土した。

また、墳頂部からは、墓上の祭祀で使われたと考えられる、二重口縁壺・鼓形器台・低脚坏・小形丸底壺などいわゆる山陰系土器と呼ばれる土師器が多数出土している。

このように昨年度の調査結果から、西求女塚古墳は古墳時代前期の有力な豪族の墓であることがわかってきた。

しかし古墳全体の規模や形は地震による地滑りや後世の造作によってかなり改変されていることから、正確にはわかっていなかった。

今回はこれらのことを明らかにするために、墳丘の北側・西側・南側の墳丘裾付近及びくびれ部に調査区を設定して調査を実施した。

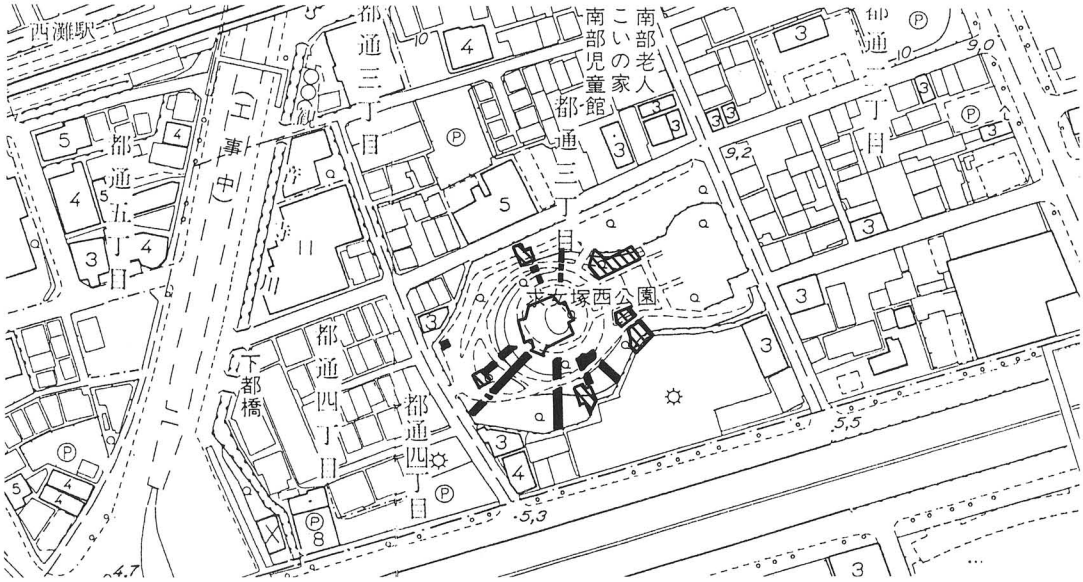


fig. 26
調査地点位置図
1：2,500

2．調査の概要

Ⅱ区

中世末期（16世紀後半）の水田耕作土層の上に地滑りを起こした墳丘盛土層が覆っている状況が確認された。このことから、墳丘の地滑りを引き起こす原因となった地震は1596年に起こった「慶長の大地震」であったことが判明した。

中世末期の水田は古墳の裾を若干削って造られているが、墳丘を削った際に出てきたと思われる葺石が集積しているところがあり、その付近が墳丘裾と考えられる。

中世後期の水田耕作土からは、土錘と土師器の小片が出土しているが、古墳に伴う遺物は出土していない。

Ⅲ区

地滑りを起こした墳丘盛土層が現地表から約2.5ｍあり、その下から２～３段分の、基底石を含む葺石列が、高さ40～60㎝のみ残して約５ｍにわたって確認された。この石列は標高6.2ｍ付近に基盤層を幅１ｍ弱、深さ約60㎝切り込んで、若干土を敷いた後に、ほぼ

直線的に並べて据えられている。石の積み方で特徴的なのは１段目は石の長辺を立てて使用したものが多く、２段目３段目は小口を前面に向けて積んでいる。また残っている３段目まではほぼ垂直に積まれている。残っている葺石より上部は墳丘の盛土が本来存在していたが、大地震によって地滑りを起こして南の方向に滑っている。地滑りは基盤層と盛土の境で起こっていることが確認された。

一部では、滑ってはいるが古墳の元の斜面が残っている部分があり、崩れた葺石が検出されたことから、斜面全面に葺石が置かれていたことが判明した。また葺石の間から大形の二重口縁壺の破片が出土している。この壺の外面には赤色顔料が塗布されている。

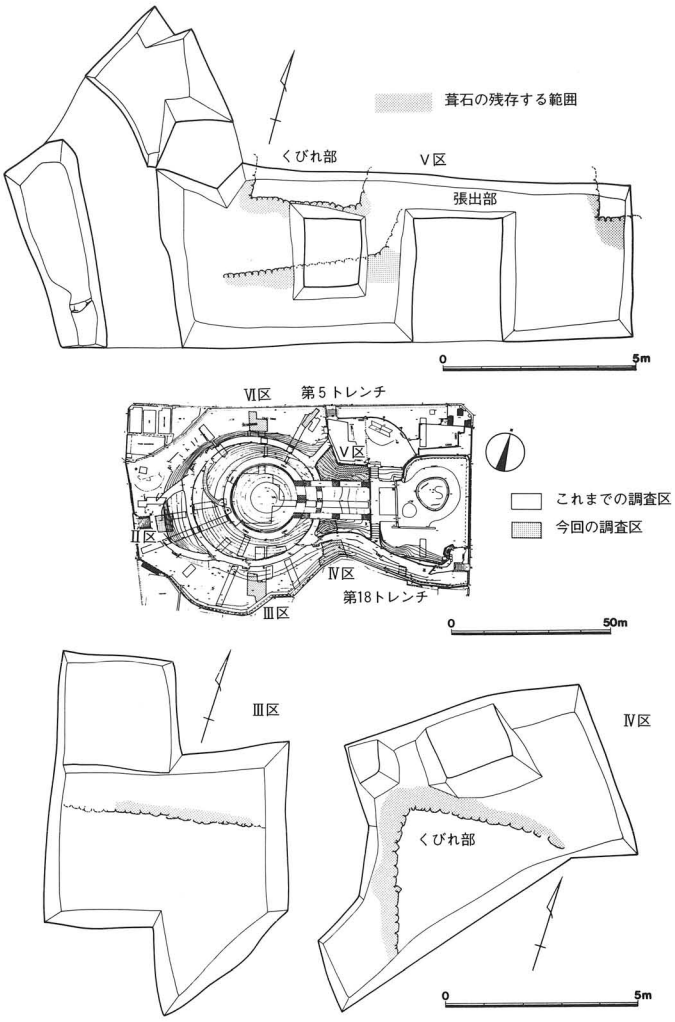


fig. 27　遺構平面図

Ⅳ区

くびれ部では地震による大きな地滑りは起こっておらず、くびれ部の基底石が元位置を保って標高7.0m付近にくびれ部コーナーを挟んで約4.5mずつ、計９m検出された。くびれ部コーナーから西側の石列はほぼ直線的に南に延びておりその延長方向と、Ⅲ区で検出された基底石列の延長方向は調査区外で直交することから、西求女塚古墳の墳形はこれまで前方後円墳と考えられていたが、前方後方墳であることが判明した。

葺石は基底部に大きな石を据え、その上に小さめの石を積んでいる。基底部から約50cmぐらいまでは急角度で積み上げられ、それより上の斜面角度は緩くなるようである。基底部の石の据え方は、前方部と後方部では違いがみられ、前方部では大きな石を横長に据えているのに対して、後方部では縦長に据えている。また後方部の基底石の据えられているレベルは南にいくほど下がっており原地形にあわせて古墳が造られていることがわかる。裾部には崩れ落ちた葺石と流土が堆積しており、その中からⅢ区と同様の大形二重口縁壺が出土している。また基底面直上から布留式甕の破片が少量ではあるが出土している。

Ⅴ区

Ⅴ区の西端で、淡褐色砂（流土）を外すと黒褐色砂（流土）上面で幅１m長さ3.2m以上の範囲で人頭大の石を並べた遺構が検出された。時期、性格は不明である。

東端では基底石列が標高8.1mと8.7m付近で２列検出された。このうち下段の基底石列が墳丘裾にあたると考えられ、Ⅳ区で検出した南側くびれ部コーナーに対応する北側のく

びれ部コーナーが検出されている。

この２列の石列はともに、くびれ部から前方部に向かって２～３ｍのところで外方向に屈曲する部分があり、張出状の施設が存在することが判明した。しかし石列は調査区外に延びるため、いまのところ形状・規模はあきらかではない。

くびれ部付近の流土中から二重口縁壺・胴部にスタンプ文のある大形二重口縁壺などが出土している。

Ⅵ区　昭和61年度の第２次調査で第３トレンチＣ区として調査した部分を、今回広げて墳丘裾部の確認に努めた。しかし裾部は公園外に出ているため裾部は検出されなかった。墳丘盛土を断ち割った結果、標高8.2ｍ付近で基盤層が検出され、それより上は盛土がなされている。また、地滑りはⅢ区と同様に基盤層と盛土の境で起こっていることが確認された。

流土中から頚部にスタンプ文のある大形二重口縁壺などが出土している。

第５トレンチ　昭和61年度の第２次調査で第５トレンチＣ区として調査した部分を、延長して墳丘裾部の確認に努めた。その結果、葺石の基底石が標高8.2ｍで倒れた状態で検出され、墳丘裾部が確認された。裾部より北側は中世後期の水田耕作土層が堆積しており、Ⅱ区と同様にその上に墳丘盛土が地滑りを起こして覆っている。

中世後期の水田耕作土層から備前焼のすり鉢片が、流土中から胴部にスタンプ文のある壺などが出土している。

第18トレンチ　前方部南側裾部の確認に努めたが、裾部は公園の敷地外に出るようで確認されなかった。墳丘斜面もほとんど崩れたり、流出したりして原形を保っていない。断ち割り調査の結果、標高6.2ｍで基盤層が確認された。

流土中から壺の破片が出土している。

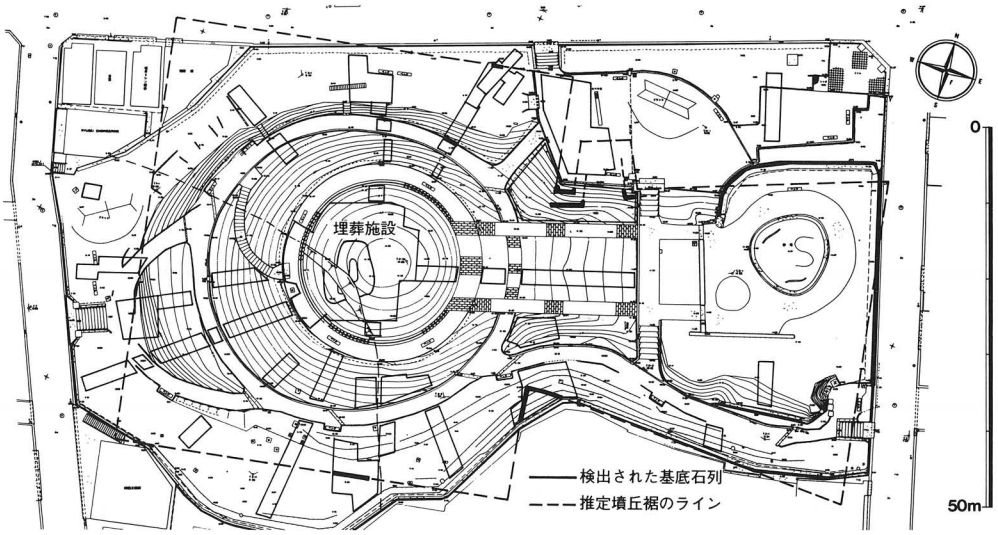
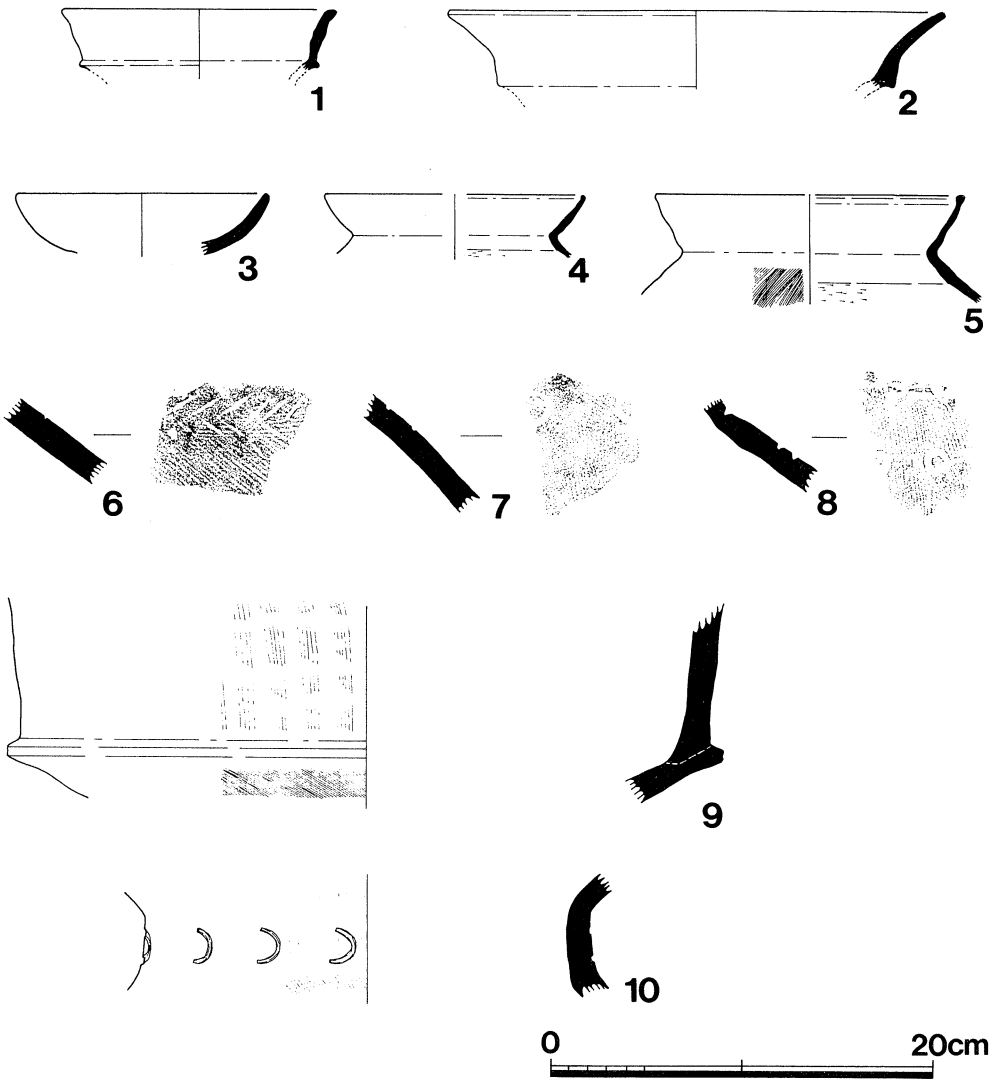


fig. 28
墳丘推定復元ライン

出土遺物　今回の調査では、各調査区から土師器片が出土している。そのほとんどは大型の二重口縁壺の破片である。この壺には、昨年度出土した土器と同様に、『Ｃ』字形や『Ｏ』字形のスタンプ文をつけたものが多数あり、また、これらの土器の外面には赤色顔料が塗られている。これらの土器も墳頂部で出土した土器と同じく山陰地方の特色を持ったものである。また、今回の調査ではⅣ区から布留式甕の破片も出土しており、古墳の築造時期を知る手掛かりとなる。

これらの土器は、調査区のすべてで流土中から出土したことから、本来、墳丘上または段の平坦面の各所に置かれていた土器が流れ落ちたものと思われる。



2・4・6　Ⅲ区　　10　Ⅵ区
5・9　　Ⅳ区　　8　第5トレンチ
1・7　　Ⅴ区

fig. 29
出土土器実測図

3．まとめ

以上のように当古墳は、これまで前方後円墳と考えられていたが今回の調査で、前方部を東に向けた前方後方墳であることが明らかになった。その規模は前方部が未調査のため正確にはわからないが、後方部の一辺50数m、くびれ部幅約26m、全長95m前後と考えられる。また前方部北側のくびれ部付近には張出部が存在することも明らかになったが、この施設が通路状のものか、造り出し状のものかは全掘していないため明らかではない。

また、地滑りを起こした墳丘盛土がかなりの距離を滑っていることが判り、その滑った盛土は中世後半の水田耕作土を覆っていることから、1596年の「慶長の大地震」によって引き起こされたものであることが、明らかになった。

今後は前方部の調査をおこない、これまでの調査成果とあわせて西求女塚古墳の全体像を明らかにしていく必要がある。

3．日暮（ひぐれ）遺跡　第6次調査

1．はじめに　日暮遺跡は、中央区日暮通を中心に広がり、これまでの調査で古墳時代の竪穴住居跡や平安時代の掘立柱建物などが確認されている。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事により文化財に影響がある範囲について調査を実施した。

2．調査の概要　調査地の基本土層は、1盛土、2暗黄褐色中砂、3暗褐色細砂、4黒褐色シルトである。このうち暗褐色細砂層に平安時代の遺物が含まれている。

調査は、盛土、表土を重機で除去した後、人力で掘削を行い、遺構検出に努めた。発掘調査の結果、遺構面は1面で、掘立柱建物2棟とピット、土坑などを検出した。

遺　構

SB01　一辺60～80cm、深さ約30cmの方形の掘形で、柱の太さは20～25cm程度の掘立柱建物で、規模は2×2間以上である。柱間寸法は梁側が240cm、桁側が210cmである。柱の底には20～30cm大の根石を据えている。

SB02　一辺60～80cm、深さ約30cmの方形の掘形で、柱の太さは20～25cm程度の掘立柱建物で、規模は3×3間のほぼ正方形に近い建物である。柱間寸法は梁側、桁側とも120cm程度である。柱の底には20～30cm大の根石を据えている。なお、SB01とは主軸の方向がやや異なっている。

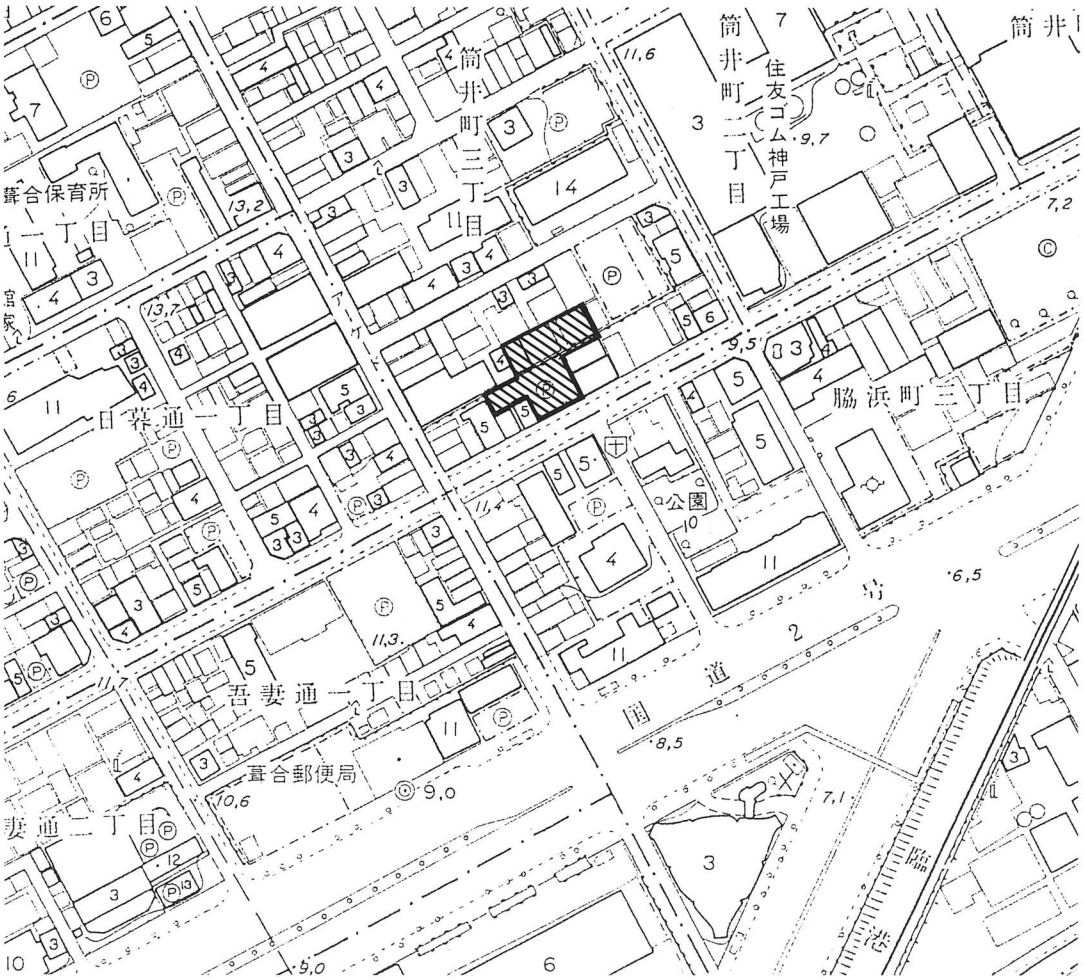


fig. 30
調査地点位置図
1：2,500

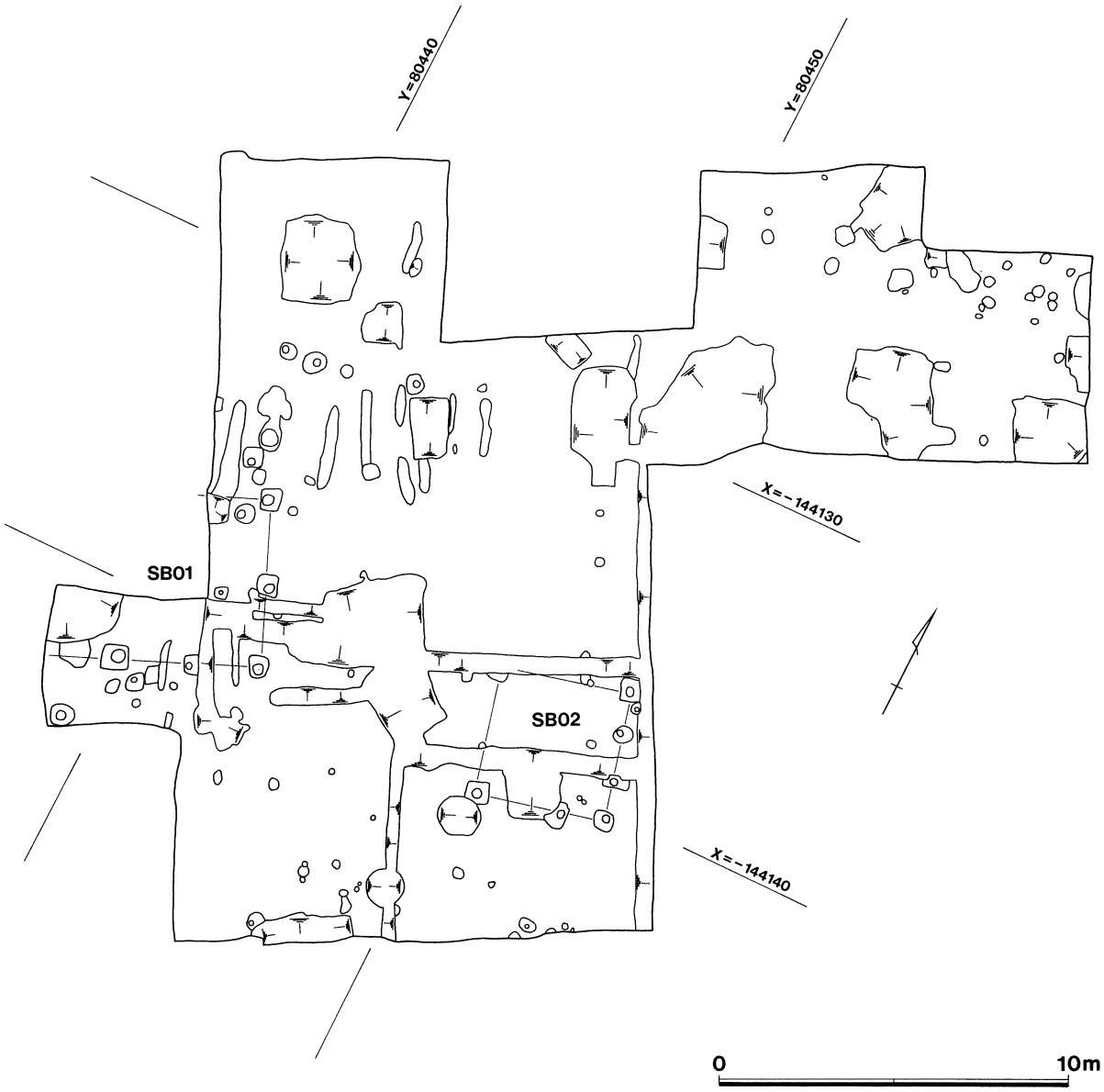


fig. 31　遺構平面図

ピット　　直径20～30㎝程度のものを約50基検出したが、建物としてはまとまらなかった。

出土遺物　　遺物は現在整理中であるが、28ℓコンテナで10箱出土している。ほとんどが遺物包含層中のもので、細片が多い。掘立柱建物の柱穴からも少量土器が出土しており、時期は9世紀代のものである。なお、緑釉陶器が比較的多く出土している。また、土錘も約10個体出土している。有孔土錘、有溝土錘、管状土錘の3種類がみられる。

3．まとめ

今回の調査地は撹乱が多く、遺構の残存状況は良くなかったが、平安時代の掘立柱建物を2棟確認した。2棟とも出土遺物からは明確な時期差は認められない。緑釉陶器が比較的多く出土していることから、富裕な階層の人々の居住地であったと思われる。

調査地は現在でも、海岸線より約500mほどのところに位置しており、かってはかなり海に近接していたものと考えられる。土錘の出土は、ここに住んでいた人が漁撈活動にも携わっていたことを示していると思われる。

4．楠（くすのき）・荒田町（あらたちょう）遺跡　第13次調査

1．はじめに

楠・荒田町遺跡は、神戸市営高速鉄道（地下鉄）建設に伴う試掘調査によって、昭和52年度にはじめて確認された遺跡である。その後の発掘調査により、弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴を中心とする遺跡であることが知られた。また、それ以後、度重なる付近の調査により、縄文時代後期の貯蔵穴、弥生時代中期後半の方形周溝墓、平安時代・鎌倉時代の柵に囲まれた掘立柱建物群などが知られるようになった。

今回の調査地は、当遺跡の西端付近にあたり、旧地形は北東から南西に傾斜する斜面地である。しかし、現在ではかつての宅地造成で平坦地となり、北東側は大きく削平されている。平成３年度の試掘調査でもこの点が明らかにされており、北東側で３か所の試掘坑を設定しているにもかかわらず、遺構・遺物の存在は確認されなかった。

2．調査の概要

遺　構

調査地は駐車場として利用されており、ほぼ水平に造成されていた。現表土下30～40cmで、鎌倉時代～近世の遺物を含む水田耕土層が存在する。しかしこの層位は、その後の宅地造成で部分的に残存するのみで、大部分は近現代の層位直下に遺構検出面が存在する。検出した遺構は方形周溝墓４基である。いずれも撹乱や調査地外に延びることから、全体を知り得るものはない。また、削平も著しく盛土の確認はできなかった。

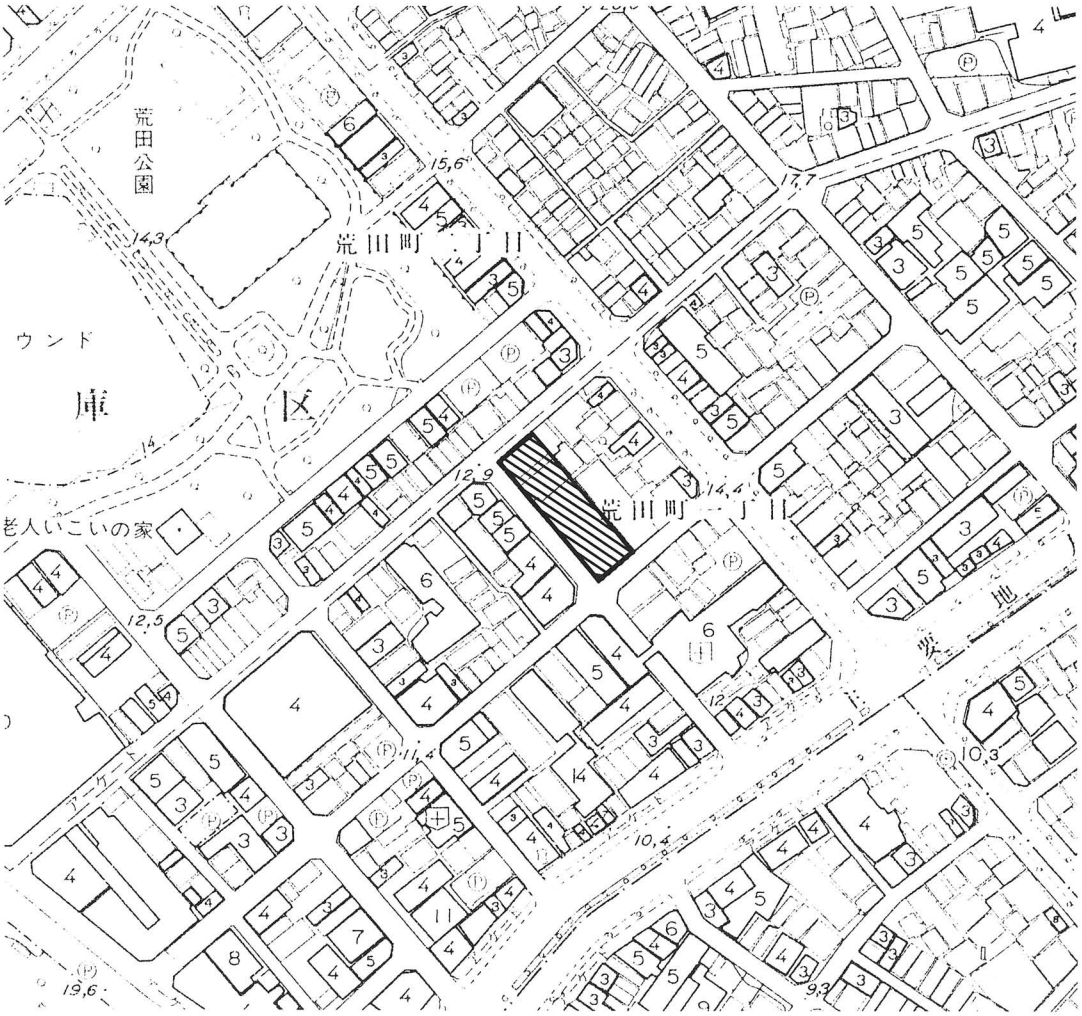


fig. 32
調査地点位置図
1：2,500

方形周溝墓１　SD09と、それに接して西方に延びると考えられる溝で構成される方形周溝墓である。撹乱の著しい北半部に存在することから、ごく一部を検出したにすぎない。SD09は、残存する最大幅2.0m、検出面から底面までの最も深い部分で0.2m、残存する長さ7.6mである。全体の規模及び埋葬施設は、全く不明である。

方形周溝墓２　SD03・05・06・08で構成される8.5×12.0mの長方形区画の方形周溝墓である。ほぼ中央、西よりに、大半を撹乱で失っている埋葬施設１基が存在する。幅1.2m、長さ2.3mの土壙に、幅0.5mの木棺を納めたものである。

SD03は、その西半を撹乱により失っているが、幅1.2m前後、長さ６m前後と推定され、検出面からの深さは、最も深い部分で0.5mで、両端に向かって狭く、かつ浅くなると考えられる。東半の残存する部分には、破砕された土器が多量に埋没していた。

SD05は、SD03の東端から直角に北へ延びる溝で、北半は調査地外にある。後出の方形周溝墓３と共有する溝でもある。検出した最大幅は1.9m、長さは9.0mで、推定される全長は12.0m前後である。検出面からの深さは最大で0.5m前後である。端に向かって幅は狭くなるが、深さはさほど変化しない。

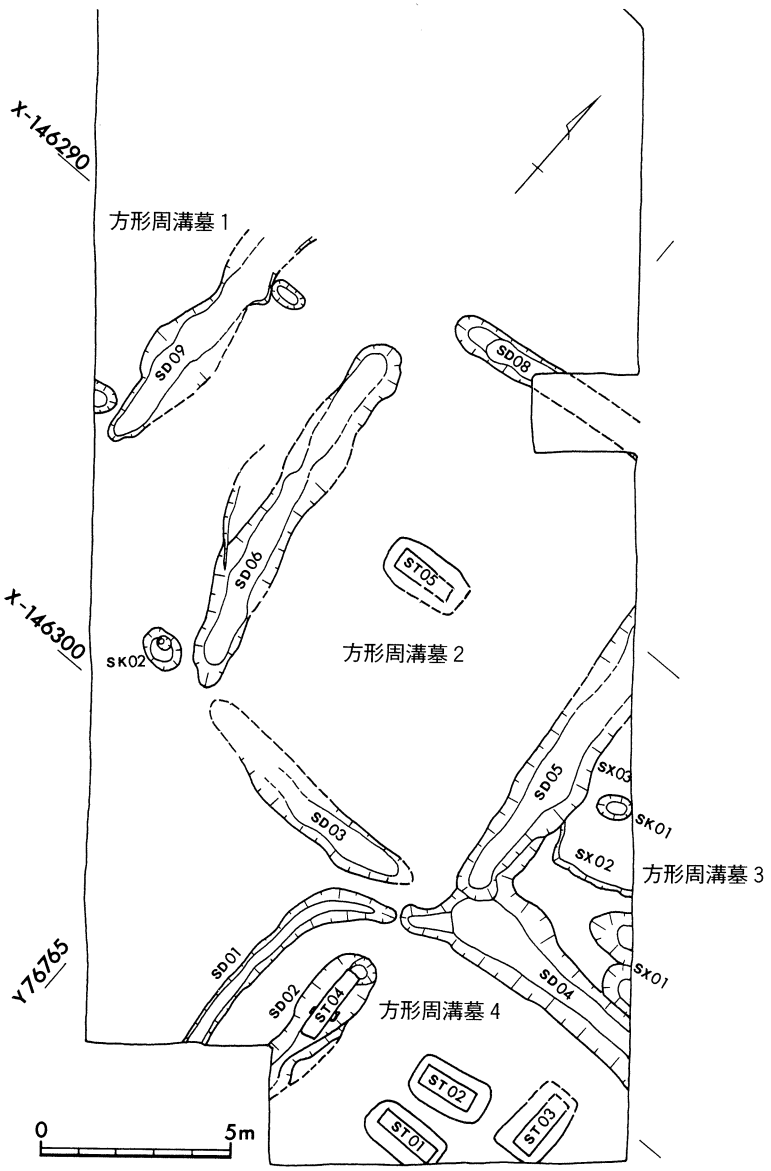


fig. 33
遺構平面図

SD06は、SD03の西端から直角に北へ延びる溝で、撹乱を受けながらも、この調査で唯一全形を知りうる溝である。全長10.2m、最大幅1.6m、検出面からの深さは最大で0.45mである。この溝の北端部は浅くなるが、削平から免れた土器5点が、ほぼ原位置を保って出土した。広口壺形土器2点、把手付直口壺形土器1点、高杯形土器2点である。いずれも、埋葬時に置かれたものであろう。

SD08は、SD06の北端から直角に東へ延びる溝で、SD05の北端と連接するものである。最大幅0.9m、検出長2.7m、検出面からの深さ0.2mである。

方形周溝墓3　SD04と、その西端から北方に延びるSD05で構成される方形周溝墓であるが、一隅を検出したにすぎない。

SD04は、方形周溝墓4と共有する溝で、残存する最大幅2.2m、検出面から底面までの最も深い部分で0.6m、検出長6.7mである。

SD05は、方形周溝墓2と共有する溝で、先述の通りである。

方形周溝墓4　SD04と、その西端から南方に延びるSD02で構成される方形周溝墓であるが、全体の1/4程度を検出したにすぎない。しかし、内部でST01・02・03の3基の埋葬施設を、また、SD02内で溝内埋葬施設を検出した。

SD02は、最大幅1.4m、検出長4.0m、検出面からの深さ0.4mである。

SD04は、方形周溝墓3と共有する溝で、先述の通りである。

ST01は、幅1.1m、長さ2.2m、検出面からの深さ0.3mの土壙に、東端の小口幅0.55m、西端の小口幅0.45m、長さ1.75mの木棺を納めたものである。木棺の底面は東から西へ3cmほど下がる。頭位は東であったと推測される。

ST02は、ST01の北側にほぼ平行に位置する。幅1.2m、長さ2.2m、検出面からの深さ0.3mの土壙に、東端の小口幅0.6m、西端の小口幅0.55m、長さ1.6mの木棺を納めたものである。木棺の底面は東から西へ5cmほど下がる。頭位は、ST01同様東であったと推測される。

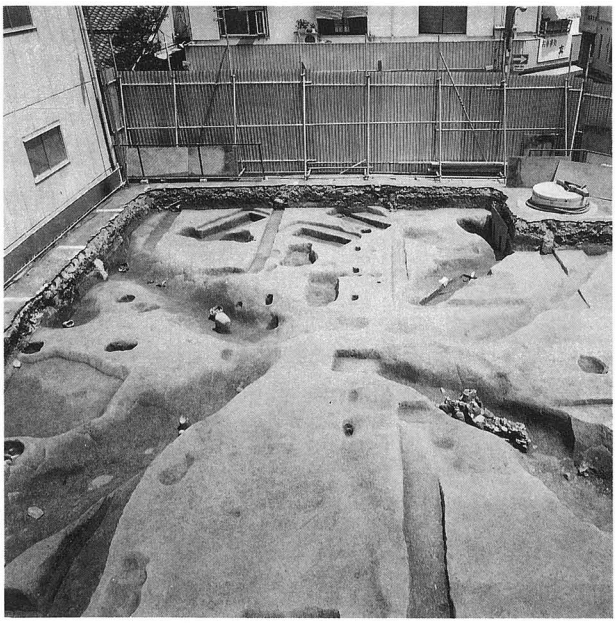


fig. 34　方形周溝墓2・3・4

fig. 35　SD06土器出土状況

ST03は、ST02の東側のほぼ直交する位置に存在する。北端は撹乱によって失われている。幅1.3m、推定長2.0m、検出面からの深さ0.3mの土壙に、南端の小口幅0.6m、推定長1.7mの木棺を納めたものである。木棺の底面はほぼ水平である。木棺中央部の西よりで、ヒトの歯が出土した。

ST04は、SD02の北端に位置する。当初、溝の一部として検出していたため、溝の埋没前か、埋没中か、埋没後かの判断ができない。平面形態は、溝の本来の形態を壊し、明らかに木棺を納めるための掘形と判断できる。その掘形は幅1.5m、長さ3.0m程度、検出面からの深さは0.6mである。木棺の両小口は0.45mで、長さは2.0mで、底面はほぼ水平である。木棺のほぼ中央で、偏平な石を立て、両側板を支えるようにしている。木棺内部の南端から人骨（頭蓋骨か）や歯が、中央部東側で大腿骨と思われる骨が出土した。その位置から、頭位は南と考えられる。

SD01　この溝は、SD04の西端に発して、湾曲しながらSD04と並行して走る。平面的見かけは方形周溝墓４の西辺を画す溝のようであるが、他の溝とはその形態が異なり、幅は狭く0.6m前後で、底面は平坦である。あるいは、SD02に埋葬した後に、方形周溝墓４を拡張したのではないかとも考えられるが、確証はない。なお、溝内から土器の小片がかなり出土している。

遺　物　出土した遺物の大半は、方形周溝墓の溝内から出土したものである。最も数多く出土したのは、SD03であるが、ほとんどが細片になったもので、溝が半分程度埋没したのちに、置かれたか、廃棄されたものである。当初の埋葬に伴うと考えられる土器は、SD04で間隔をおいて甕形土器、高杯形土器、甕形土器がそれぞれ１点、SD06の北端で広口壺形土器２点、把手付直口壺形土器１点、高杯形土器２点、そしてやや離れて広口壺形土器が１点出土している。これらは、いずれも弥生時代中期後半第Ⅳ様式に属するものである。

方形周溝墓が埋没した後に掘削されたSX01からは、弥生時代終末期の土器が出土している。

３．まとめ

今回検出した方形周溝墓は、大きく撹乱や削平を被っていたが、その特徴の大きな部分は把握できた。まず、周溝はお互いに連続せず、各溝の両端で浅く、狭くなっていることが挙げられる。第３次調査で検出した同時期の方形周溝墓でも、同様の傾向が認められた。次に、周溝内に置かれる土器は、その位置に規則性が認められないことである。第３次調査で検出した方形周溝墓では、溝の両端に壺形土器などを１点ずつ置いていた。今回のSD04では間隔を置き点々と、SD06では一端にかためて置いている。最後に、埋葬主体は木棺墓であるが、方形周溝墓内の中央部に１基のものと、複数埋葬するものが混在する。また、溝内埋葬が確認された。以上は、当遺跡の方形周溝墓にのみ認められる特徴ではないが、今後検出例の増加によって、意味付けられるものがでてくるであろう。今日までに実施されてきた調査では、楠・荒田町遺跡は弥生時代第Ⅰ様式末から第Ⅱ様式初頭の貯蔵穴を主体とするという印象が強く、当遺跡の特徴と考えられてきたが、最近の調査では弥生時代中期中頃（第Ⅲ様式古）の方形周溝墓も知られるようになり、時期変遷とともに遺跡内での遺構の性格も変化することが判明してきた。今回検出した方形周溝墓もその一環である。今後、調査次数の増加により、詳細な遺跡の変遷が解明されるであろう。

5．祇園（ぎおん）遺跡　第2次調査

1．はじめに

祇園遺跡は神戸市兵庫区上祇園町周辺にひろがる遺跡で、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。天王川は有馬道沿いに流下し平野部に抜け、石井川と合流して湊川となる。この湊川の河口付近にかつて大輪田泊があった。

この遺跡の存在する地域は平野とよばれ、この地名が治承4年の「福原遷都」に際し安徳天皇内裏となった平清盛の別業のあったという「平野」の地名と合致し、当地に福原旧都の中枢があったものと推測される。しかし、考古学的な調査によって福原京に関連する遺構が確認された例は、平野から600mほど南の荒田の地で検出された堀をめぐらす邸宅跡（楠・荒田町遺跡〔神戸大学病院地点〕）が唯一といってよいほどで、福原旧都の具体的な解明を行えるまでには至っていない。

昨年度行われた祇園遺跡の第1次調査では、縄文時代・弥生時代・室町時代などの遺構のほか、顕著な遺構はなかったものの、平安時代末、福原旧都当時の遺物がかなり出土している。

2．調査の概要

今年度の第2次調査では、昨年に引き続いて神戸三田線の拡幅計画部分、第1次調査地点の南についてこれを行った。調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・室町時代・江戸時代およびそれ以降の遺構ならびに遺物が確認された。調査地は北から南への傾斜地であるが、平安時代末に斜面地を造成し、その後近年にいたるまで土地区画はほぼそのままのかたちで踏襲されていることが確認された。

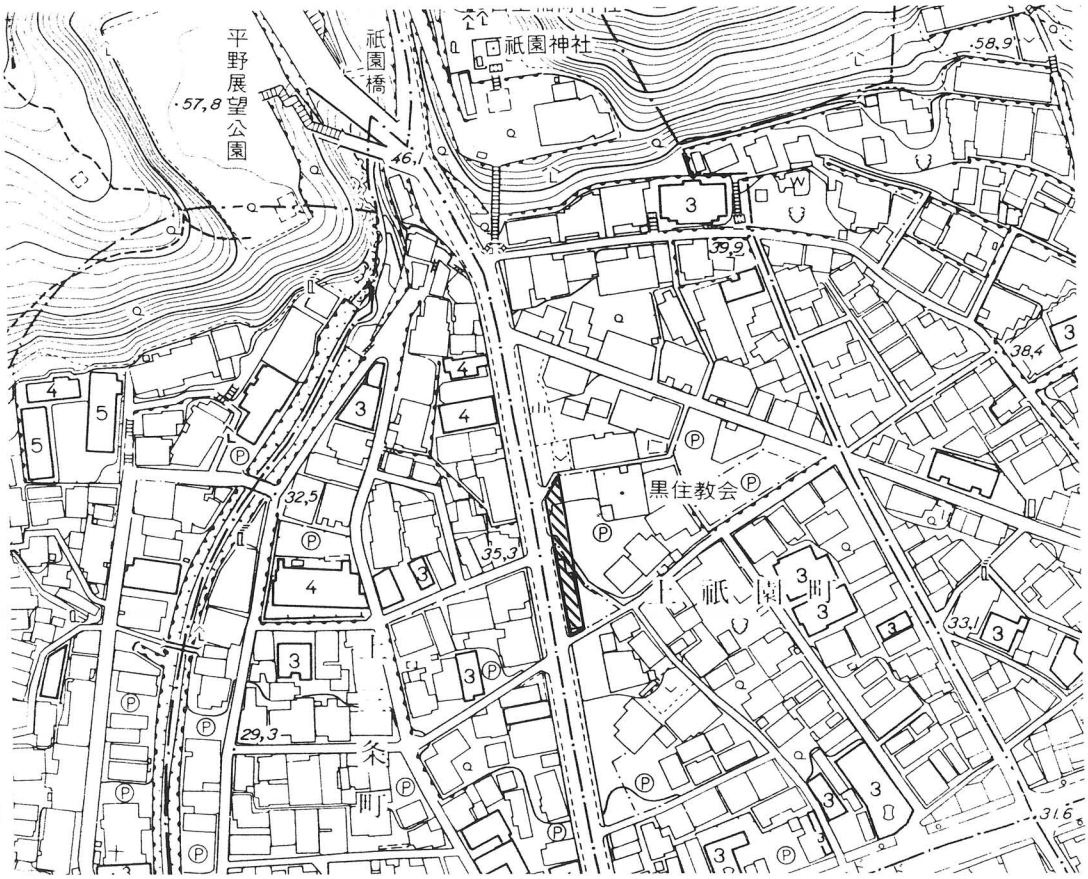


fig. 36
調査地点位置図
1：2,500

第２次調査地点においては南北に段造成３段分が確認されている。北部が第１次調査地の南部から続く高い面、中部がその次、最下が南部の園池となる。

北部・中部では上層の弥生時代～江戸時代の遺構面の下層が縄文時代の流路の埋没土となっている。

江戸時代　調査区南部で井戸（SE03）が検出された。

SE03　平安時代園池の埋土を掘り込む平面円形の井戸。径約1.4m、深さ約80cmをはかり、園池底の敷石上面よりも20cmほど深く掘削されている。

覆土からは平安時代の遺物のほか江戸時代の染付けの磁器破片が出土しており、この遺構が埋められたのが江戸時代以降であることを確認できた。

室町時代　調査区の北部で石組の溝（SD01）が検出された。

SD01　第１次調査で検出された石組の溝の続き。第１次調査でも確認されているように、この溝の廃絶後、切り石を積んだ石組溝がこの石組に重なる位置で構築され、ごく最近まで機能していた。両側に自然石を積んだ石組はその基底におかれたものが残っているにすぎない。石組の裏込めからは縄文時代・平安時代・室町時代の遺物が出土しており、江戸時代まで機能していたものと考えられる。

平安時代　福原京当時の屋敷地の一部が検出された。

調査区の北部で柱穴（SP63～70・72～82・84・86・93・94）、

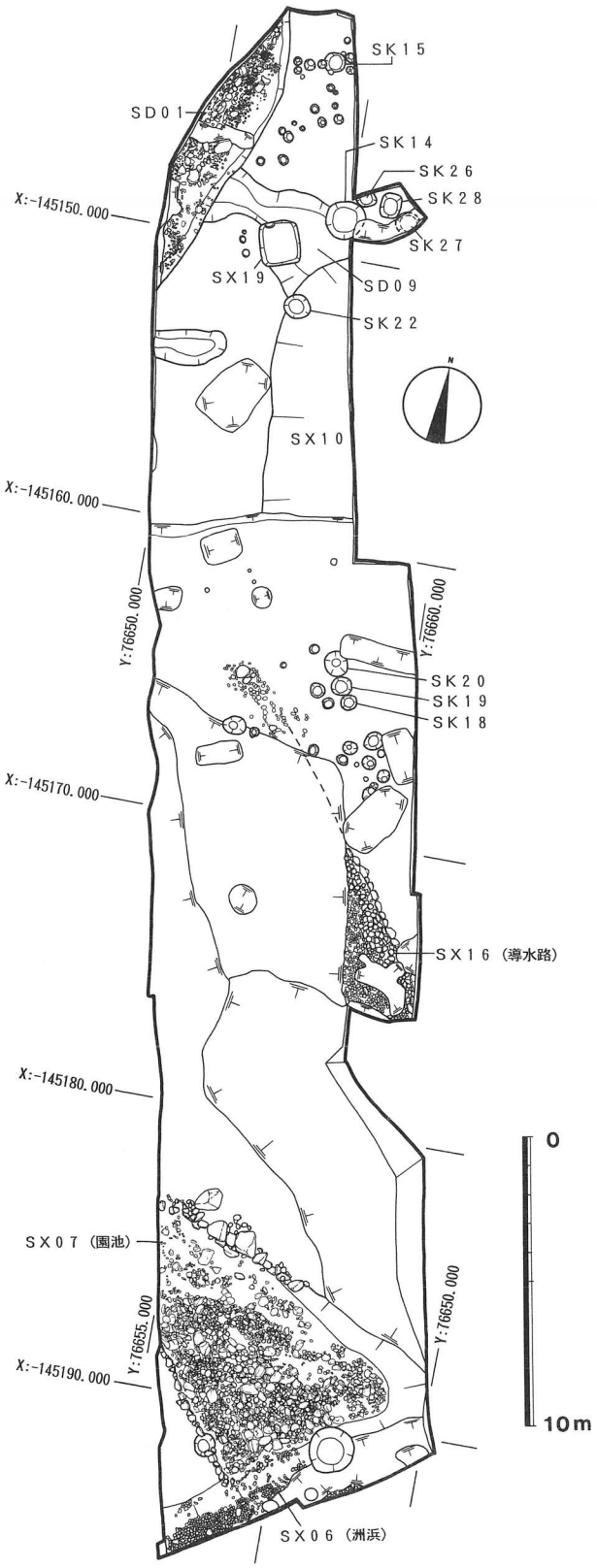


fig. 37　遺構平面図

平面円形の土坑（SK14・15・22）、土坑（SK26～28）、平面方形の土坑（SX19）、広く浅い落ち込み（SX10）などの遺構が検出されている。

調査区の中部で柱穴（SP106・107・109・110・112・116～119・125）、平面円形の土坑（SK17～20・23）、園池への石敷きの導水路（SX16）などの遺構が検出されている。

調査区の南部では石敷きをもつ園池（SX07）が検出された。

柱　穴　今回調査区の北部と中部の２地点に比較的集中している。しかし、建物などとしてまとまりがつかめるものはなかった。また、検出時に柱穴と思われたもののなかに、樹木の根跡であることが土層断面の観察から判明したものが多々あった。

SP77・81などからは土師器皿が出土している。

土　坑　調査区北部にある径１ｍ程度のSK14・15・22・26・27・28などの土坑からは礫・瓦・土器・陶器などが多く出土している。また南北141cm・東西107cm、遺構確認面からの深さ約50cmをはかる平面隅円方形の土坑であるSX19からは鉄釘・かわらけ・渥美焼甕・瓦・滑石製大型容器破片・礫などが出土している。鉄釘の出土状況などからこの遺構は墓であ

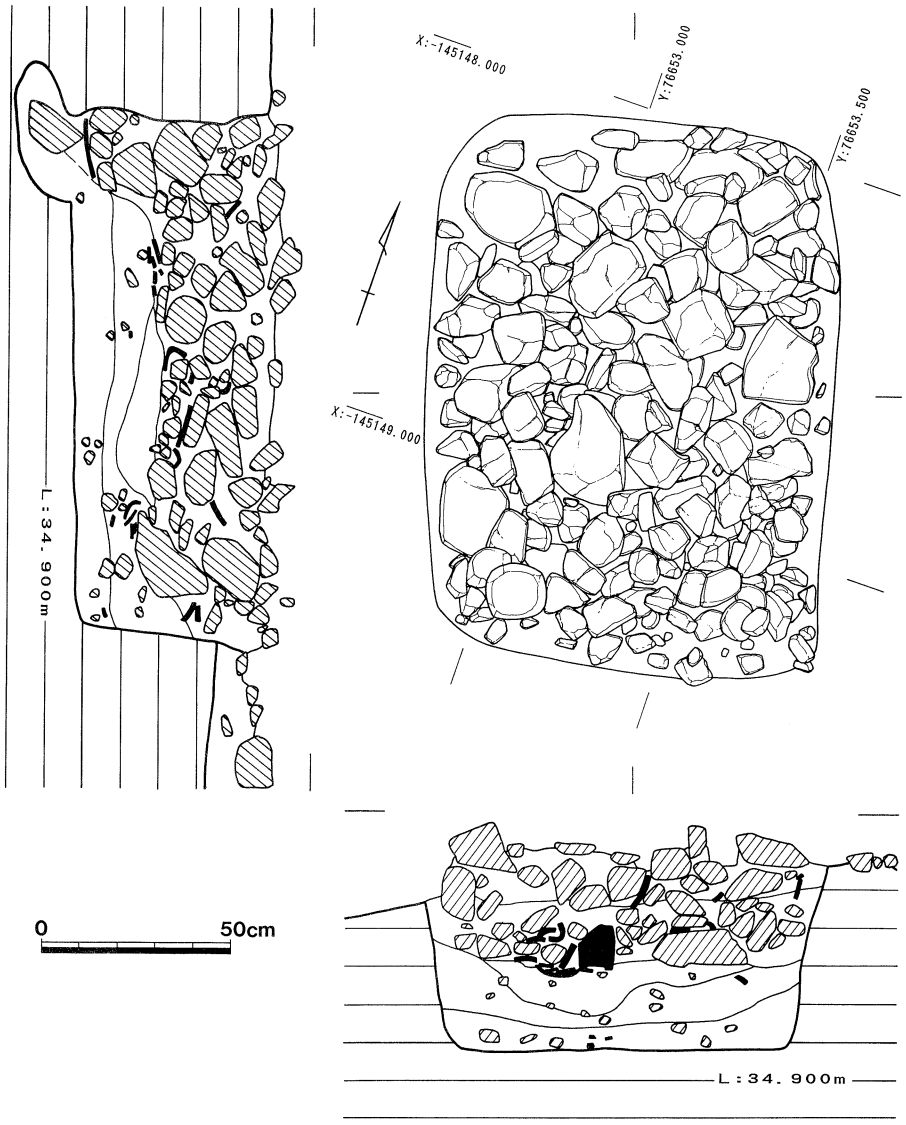


fig. 38　SX19平・断面図

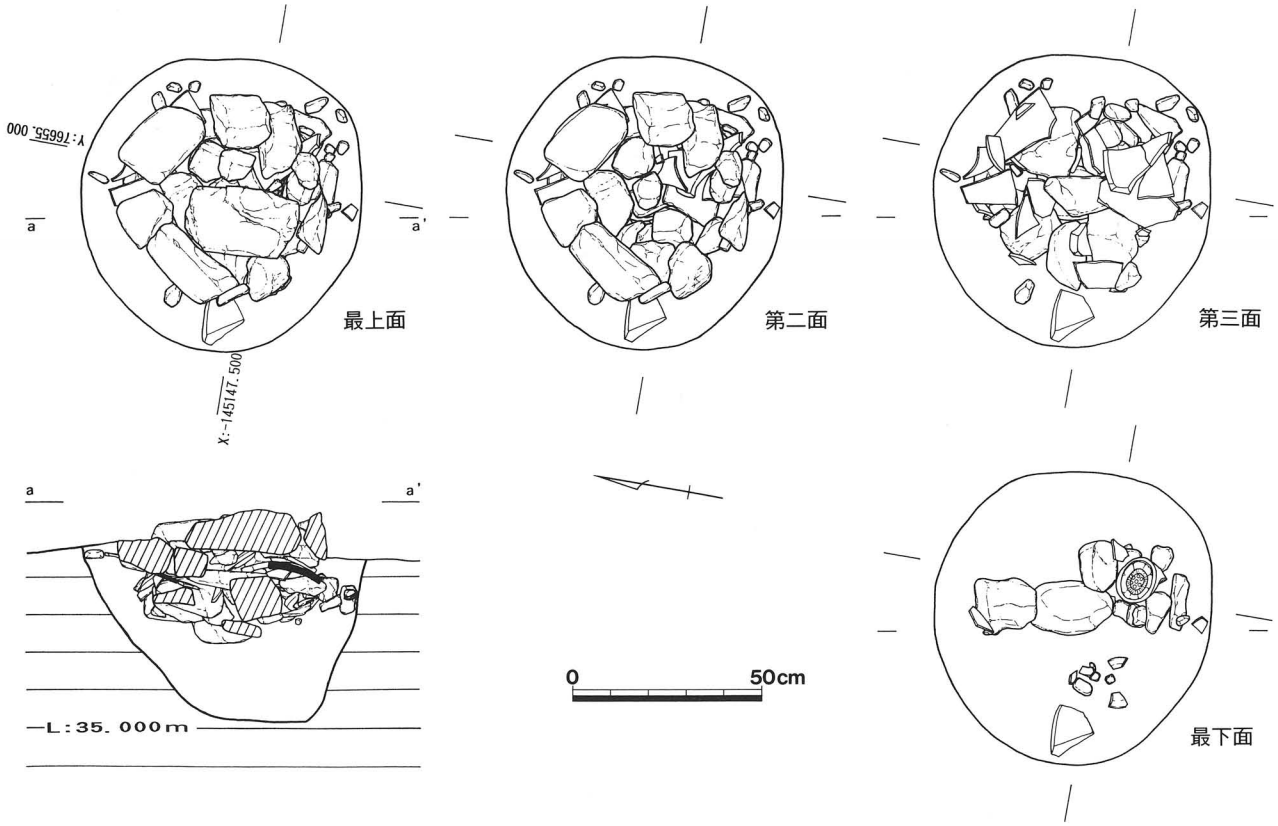


fig. 39　SK14平・断面図

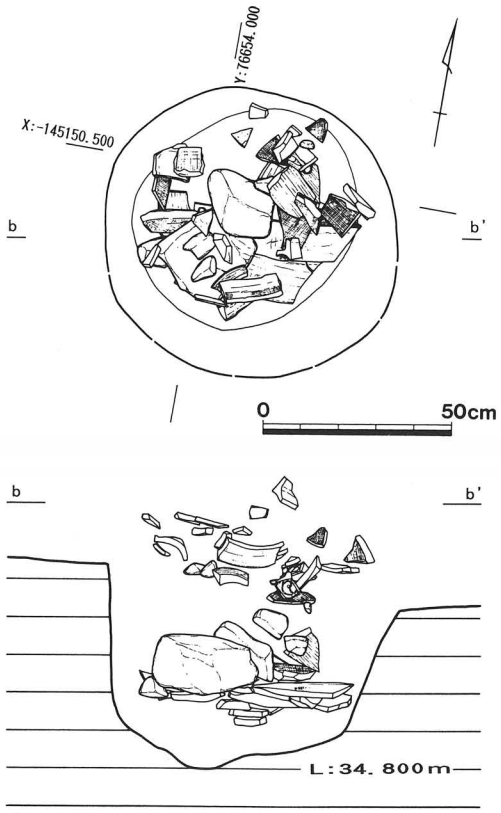


fig. 40　SK22平・立面図

fig. 41　調査区南半全景（SX07・SX16）

る可能性が高い。

調査区の中部で検出されたSK17～20は径約40～80cmをはかる。SK17・18・20からは完形の土師器坏がそれぞれ１点出土した。

導水路（SX16）　調査区の中部で検出された縁石をもつ石敷きの導水路である。南の園池（SX07）へ水をひくための施設と考えられる。

園　池（SX07）　拳大からひとかかえ以上あるような石を敷きつめた遺構である。この遺構は調査区外にひろがり、調査ではその一部分を検出したにすぎない。

その山側にあたる北部に北西から南東方向、元来の等高線に沿う方向で大ぶりな石材を組んだ石垣が築かれる。調査区の南端でもチャート系の玉石を用いた洲浜が検出されている。この洲浜は池底の石敷きや調査区西部の石垣を埋めこんで築かれ、この遺構が一時期の所産でなく、数度のつくりかえが行われていることを示している。埋土の状況からこの遺構は水をたたえていたと推定され、この遺構は園池であると考えられる。

fig. 42
SX07平面図

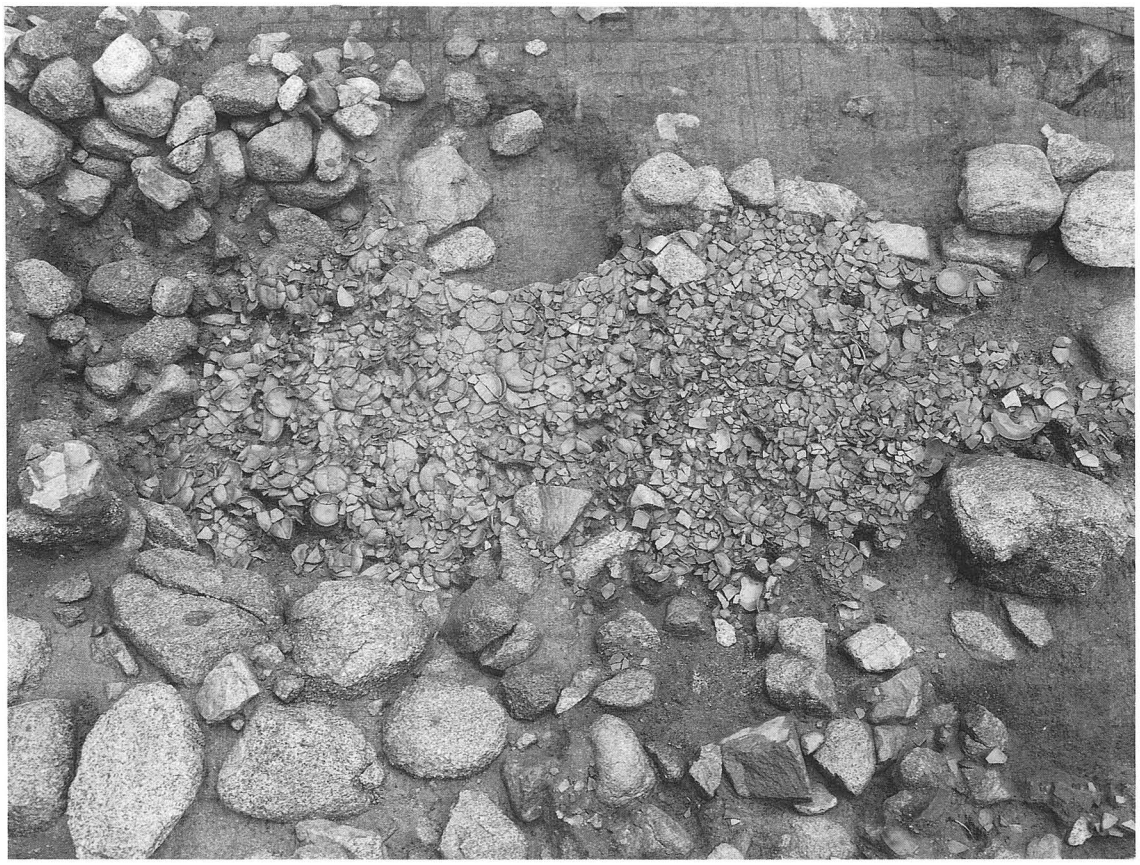


fig. 43　SX07土器出土状況

この遺構には多量の土器・瓦・礫等が投棄されている。なかでも西側の石垣のきわでは、千に達するような数のかわらけ類が集中して出土しており、注意される。これらの土器の年代は、池底の石敷きの下層から出土したものも、洲浜を埋める池の埋没土から出土したものも十二世紀後半のもので、この遺跡が庭園として機能していた時間幅は半世紀以内であったと推断される。この時間内に数度の園池のつくりかえが行われている。

玉石を使った洲浜や大ぶりの石を使った石垣は平安時代末の園池の様相として通有のものであるが、池の底に石を敷くことや小ぶりの石を石垣に用いることなどこの時期に見られない様相もあり、注意される。

底面の敷石の下に完形土器が多くあることや土層の状況から、この園池の下層にはより古い園池の存在が予想される。下層遺構の調査は次年度に行うこととし、今回の調査はこの敷石面で調査を止めた。

古墳時代　調査区中部で土坑（SK25）が検出された。埋土から小型丸底土器が出土しており、古墳時代前期の遺構と推定される。

弥生時代　調査区北部で溝（SD09）・集石遺構（SX17～20）が検出された。ともに弥生時代末のものである。

縄文時代　調査区北部・中部で流路跡が検出された。縄文時代早期・前期の土器、サヌカイト製の石器などが出土した。

3．まとめ

今回、福原京の中枢部と推定されている平野の地において、福原京当時の屋敷地が確認されたことは、幻の都とよばれた福原京がようやくその姿を現したという点で注目される。

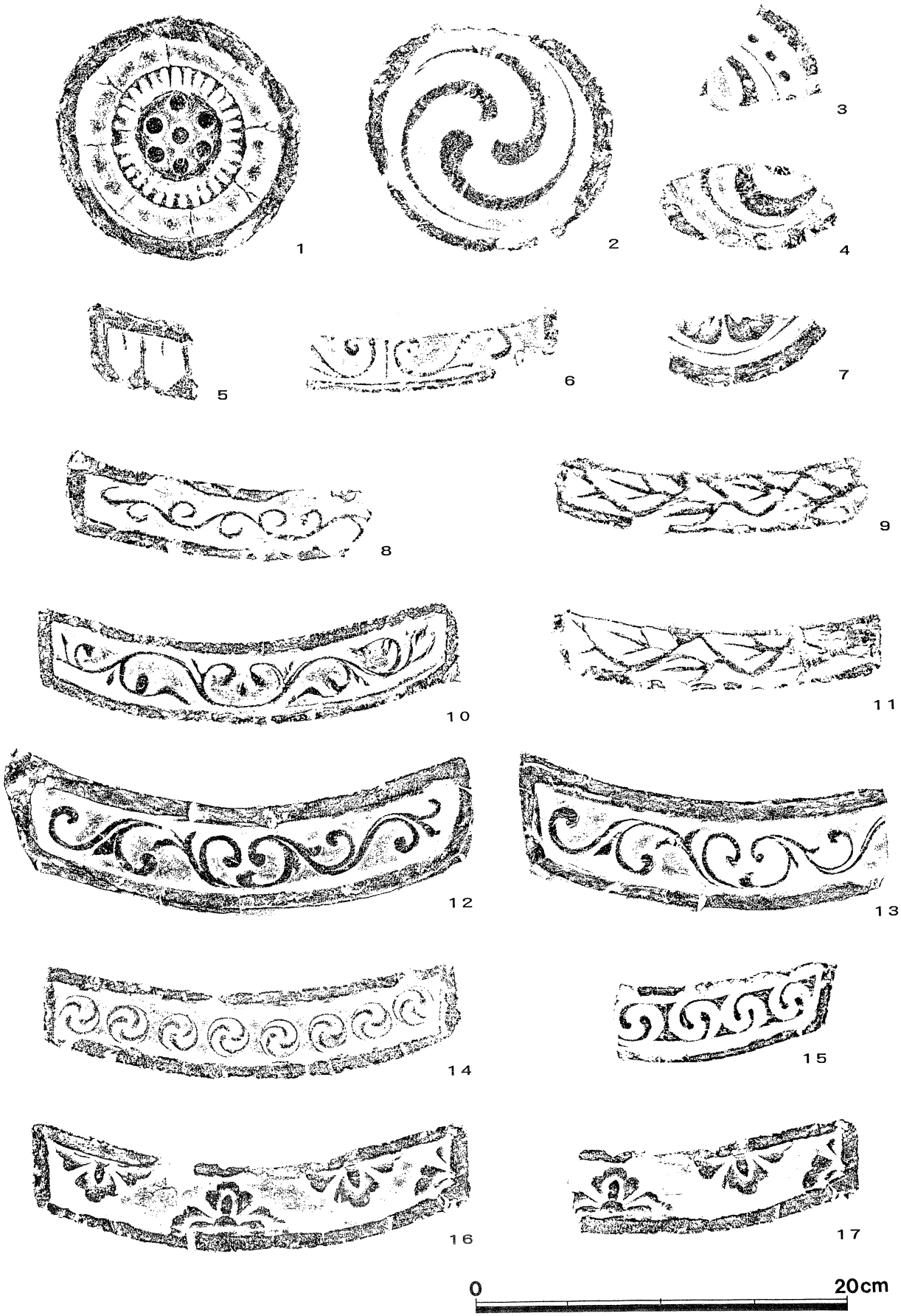


fig. 44　出土瓦拓本（1・8・15：SK14　2・14：SX19　3・4・6・9・11：SX06
5・12・16：SX10　10：SK22　13：SK15）

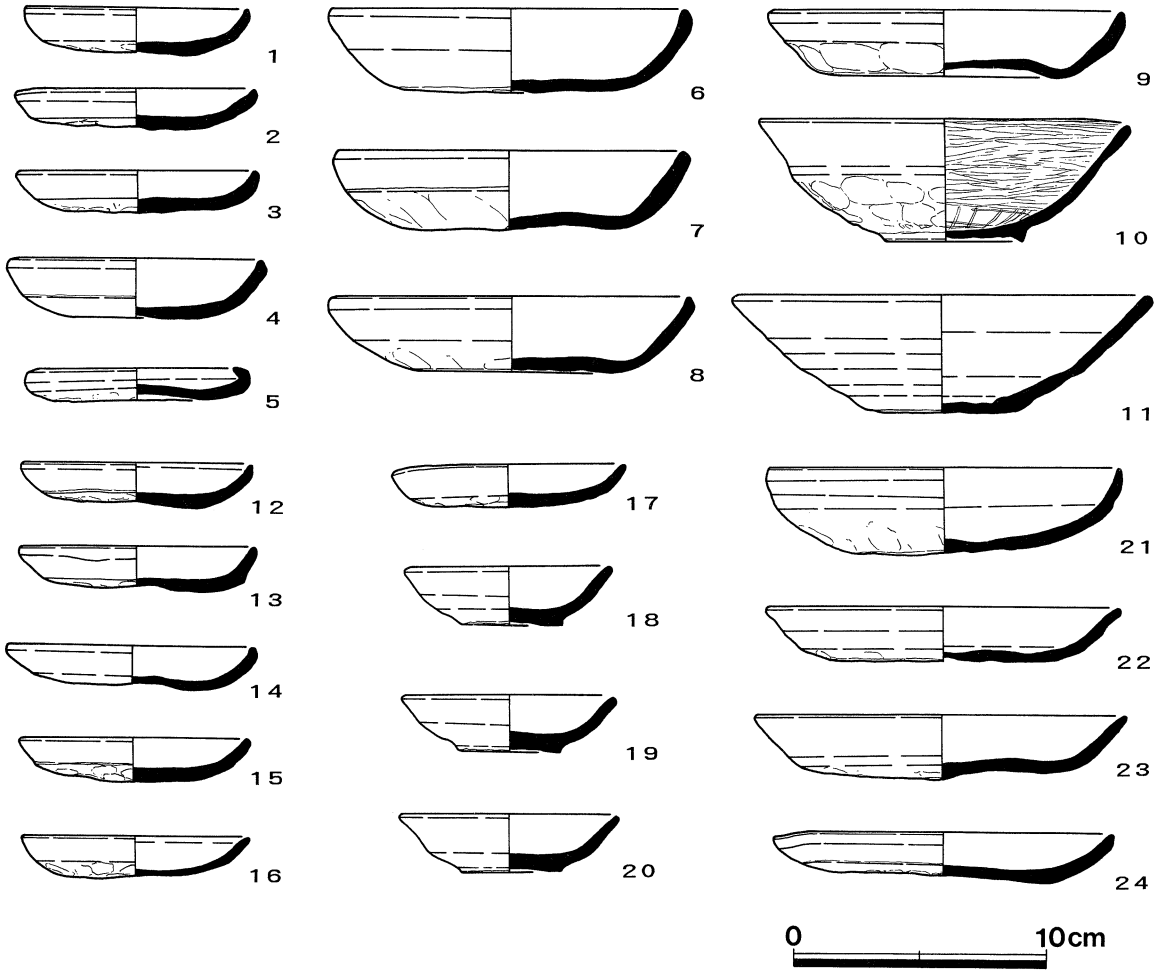


fig. 45　SX07（園池）出土土器実測図　1～11：上位　12～24：下位
（10：瓦器　11・18～20：須恵器　その他：土師器）

今回の調査は屋敷のごく一部を確認したにすぎないが、多くの成果をあげることができた。

出土遺物については、たとえばかなりの量の瓦があるが、そのなかに京都産の瓦がかなりの割合で存在している。これまで京都産の瓦が京都以外の地で出土したのは、大阪の四天王寺で確認された例が唯一である。平安時代後期においても、京都は瓦の大消費地であり、地元だけでの瓦生産ではその需要に追いつかず、畿内およびその周辺の各地で焼かれた瓦が京都に持ち込まれていることが判明しており、逆の流れはこの１例を除いて知られていなかった。このことはこの屋敷の主と京都との密接なかかわりを示すのかもしれない。あるいはもっと直接的に京都から移築した建物に葺かれていた瓦であったと考えた方がよいかもしれない。『方丈記』には福原遷都に際して京都の権門「家はこぼたれて淀川に浮かび、」福原に移されたという記事がみられる。

今回の調査では、この屋敷の主を特定できるような遺物は出土していない。しかし、この屋敷が平野の地に所在する点、出土土器の様相から十二世紀の後半のなかにこの屋敷の存続期間が限定できる点、しかも園池のつくりかえの状況から半年や一年という単位ではなくある程度の時間幅をもってこの地に居住している点などからすると、この屋敷の主を平家一門、あるいは平家にごく親しい人物に比定してあやまりないだろう。今後の調査の進展が期待される。

6．祇園遺跡　第3次調査

1．はじめに　神戸・三田線（国道428号）の拡幅工事により、周辺の立ち退きや官民境界の変更が生じた。これにより道路東側で個人住宅建設が計画された。試掘調査により中世遺物包含層が検出された。住宅基礎の掘削により遺跡が破壊される深さまでを調査することとなった。

現代盛土層等、中世遺物包含層上面まで重機による掘削を行い、これより下層を人力掘削によって調査を行った。

2．調査の概要　当調査地は、六甲山系南麓の傾斜変換地にあたり、天王谷川の右岸に位置し、川によって形成された扇状地上標高約30ｍに位置する。

当調査地（第３次調査）の北約100ｍに祇園遺跡第１・２次調査地点がある。前項で述べた道路拡幅工事に伴う発掘調査で、前年度から今年度にかけて調査を実施し、縄文時代～室町時代にかけての複合遺跡であることが判明している。南約３㎞には兵庫津遺跡がある。また南約１㎞には縄文時代～鎌倉時代の複合遺跡の楠・荒田町遺跡がある。ここでは平安時代後半の掘立柱建物や堀が検出されている。当調査地南西約400ｍには雪御所遺跡（湊山小学校）がある。ここでは平安時代後半の土器が多量に出土している。また、戦前にこの付近出土とされる同時期の軒平瓦が知られている。

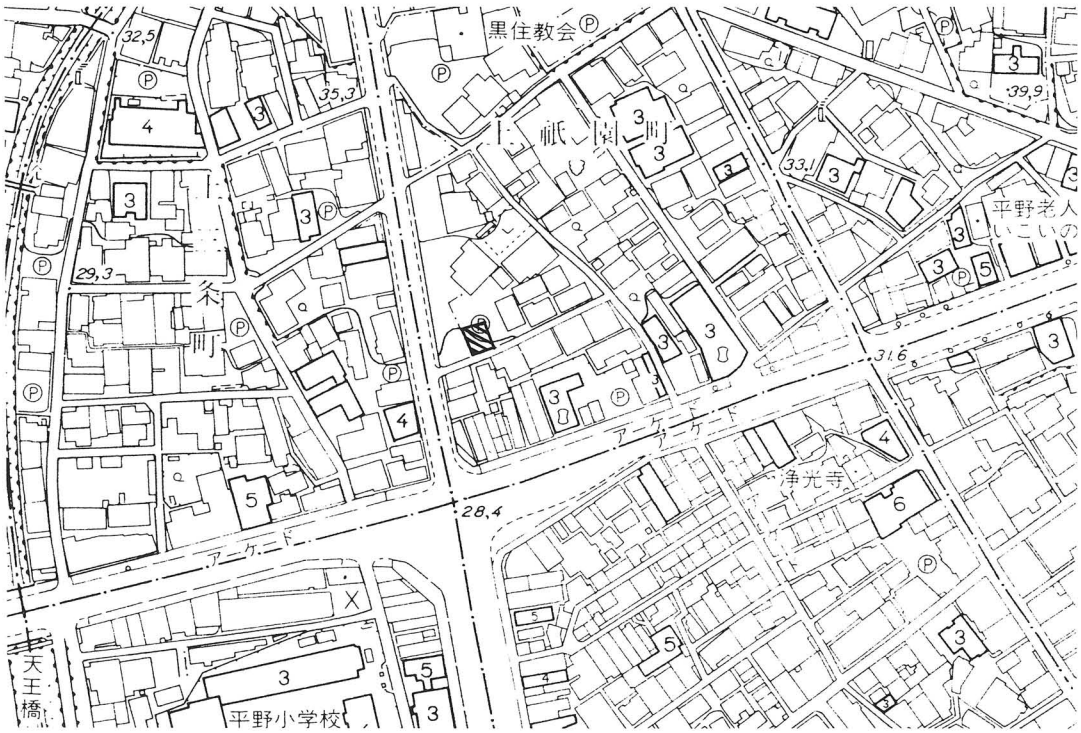


fig. 46
調査地点位置図
1：2,500

基本層序　調査地の層序は、断面図のとおりである。４～６層は、洪水による堆積層で弥生土器・中近世土師器・須恵器を含む。７層は一定の期間、面として存在したと考えられるが、遺構は存在しなかった。８・９層は、ほぼ同様の堆積であるが、土色によって分けたものである。図に示したように拳大から一抱えもあるような花崗岩の礫を含む土石流で、北東から南西に向かって流れたものと考えられる。平面的には調査地の西半部では、東半部に比べ礫が少なかった。遺物は主にこの８・９層から出土し、礫と混在する状態であった。

8・9層の厚さ及び下層の状況を把握するために、部分的に断ち割り調査を行った。その結果約0.1mで10層となる。やや粗い砂層であまり締まりのない層であるが、第1・2次調査の結果から遺構の存在する可能性はある。

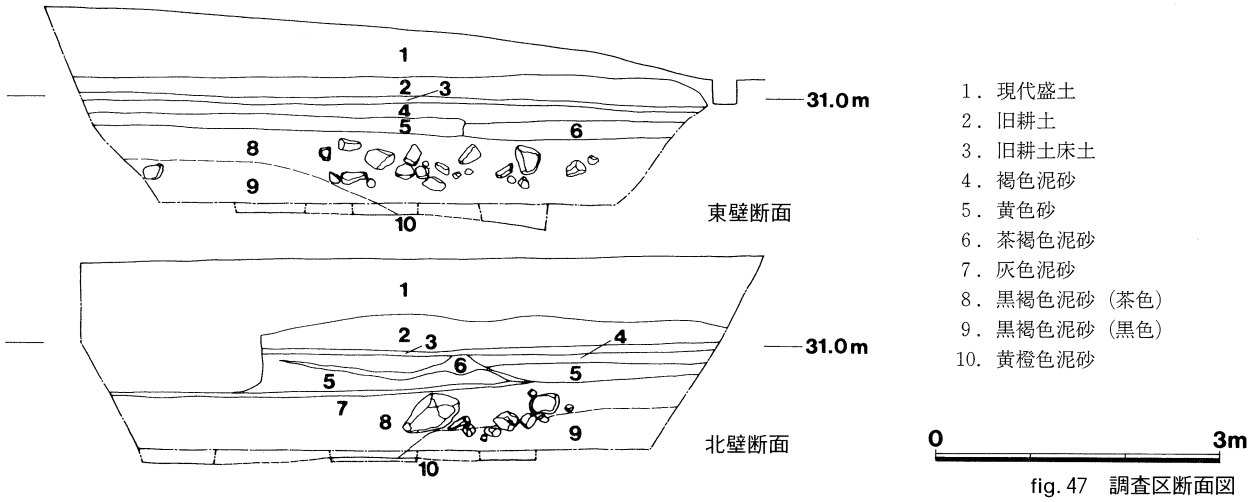


fig. 47　調査区断面図

出土遺物　出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・青磁・白磁・瓦・石鍋・銭・釘などである。

弥生土器は少量であるが、後期に属するものである。第1・2次調査でも弥生時代の遺構が確認されている。付近に弥生時代の遺構が存在するものと考えられる。

土師器は、皿・甕・鍋・三足鍋などである。皿は大小の2種（径9㎝・15㎝）に大別でき、これらが土師器の9割をしめる。須恵器は、椀・皿・甕・壺などである。椀に墨書のあるものが1点あるが、判読はできていない。瓦器には椀のほか皿・甕がある。12世紀後半頃に属するものであろう。

陶器は、現在確認できるものとして常滑焼・渥美焼の甕がある。

白磁には、四耳壺・水注・碗などがある。他に輸入陶磁器が1点ある。器形は筒形の小椀で黒褐色と白濁の釉がかかる。口縁部の釉が掻き取られ、高台は露胎で僅かに三角形を呈し、胎土は2種の土を用いた練り込み手である。これらのことから河南天目の類で、さらにいえば吉州窯系のものであり、現状では稀少な例で時期的にも問題のないものと判断できる。

青磁は白磁に比べその出土量は少ない。器種として判明するものは碗である。

瓦は、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦がある。瓦當文様から播磨系瓦で六勝寺および鳥羽離宮関連の調査で出土する同笵もしくはその系譜を引くものである。時期としても12世紀後半頃と考えられる。

ほぼ完全に復元出来る軒瓦が5点、丸瓦・平瓦にも1点ずつあることから、瓦が葺かれていた建物が至近距離にあるものと判断される。

石製品として石鍋がある。4片の破片と細片があり、調査面積に比べ多く出土している。他に砥石が2点出土している。その他に、銭が1枚出土しており、「大観通寶」（初鋳1107年）と判読された。5層でもう1枚出土しているが、判読不明である。他に青銅製の薄い板状の小片がある。現状では用途不明である。

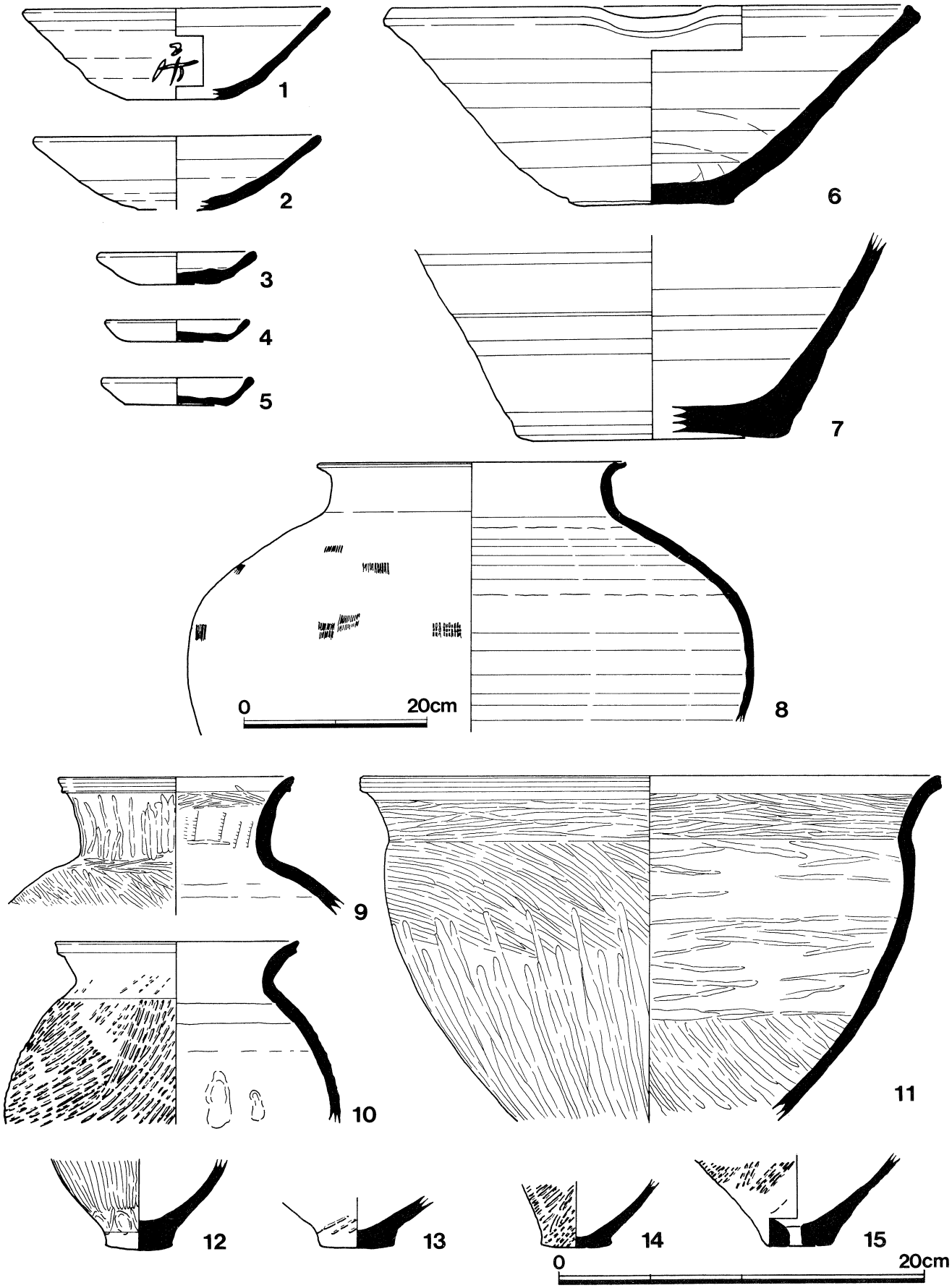


fig. 48　出土土器実測図（1～7：須恵器　8：土師器　9～15：弥生土器）

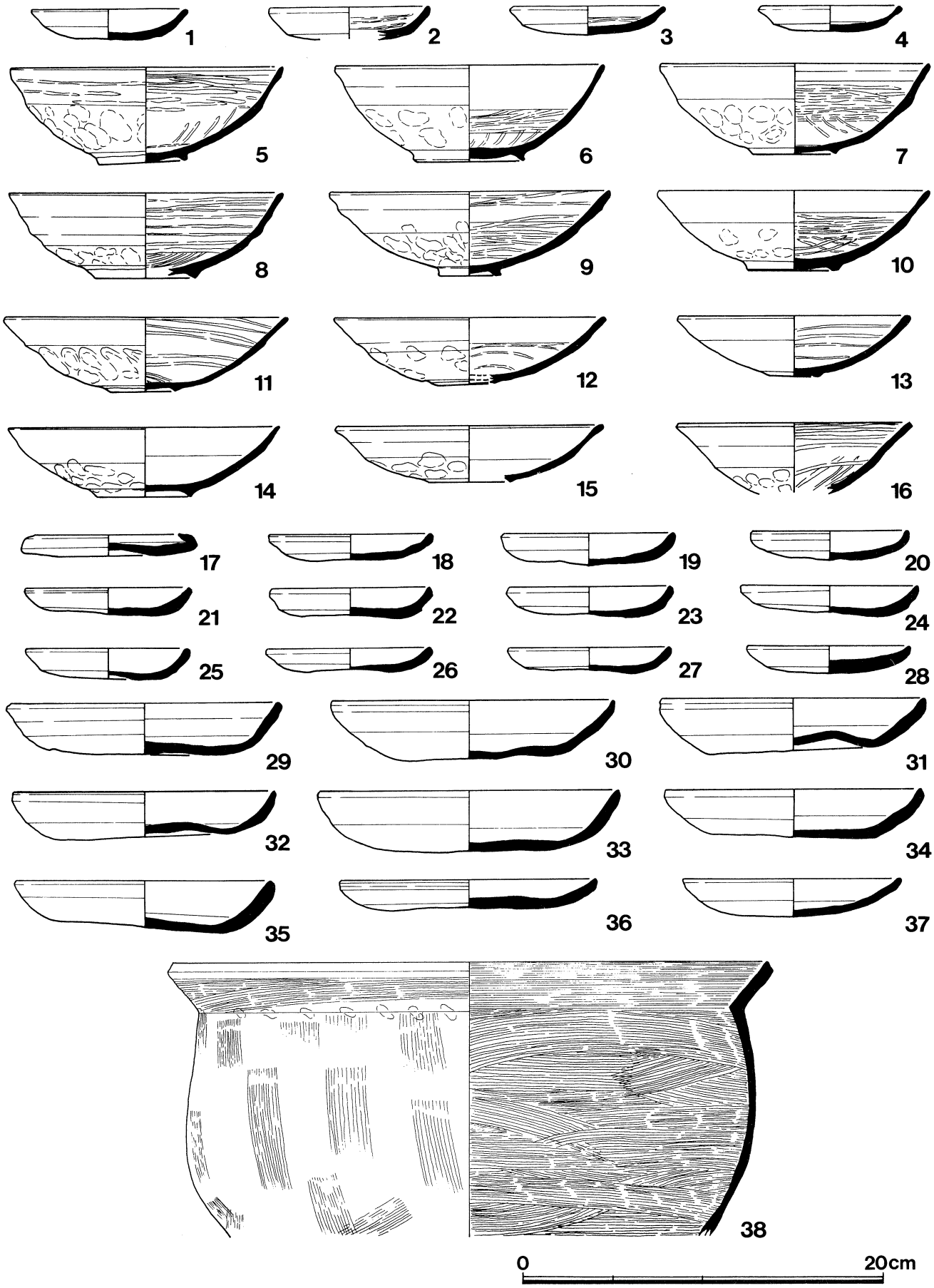


fig. 49　出土土器実測図（1～6：瓦器　17～38：土師器）

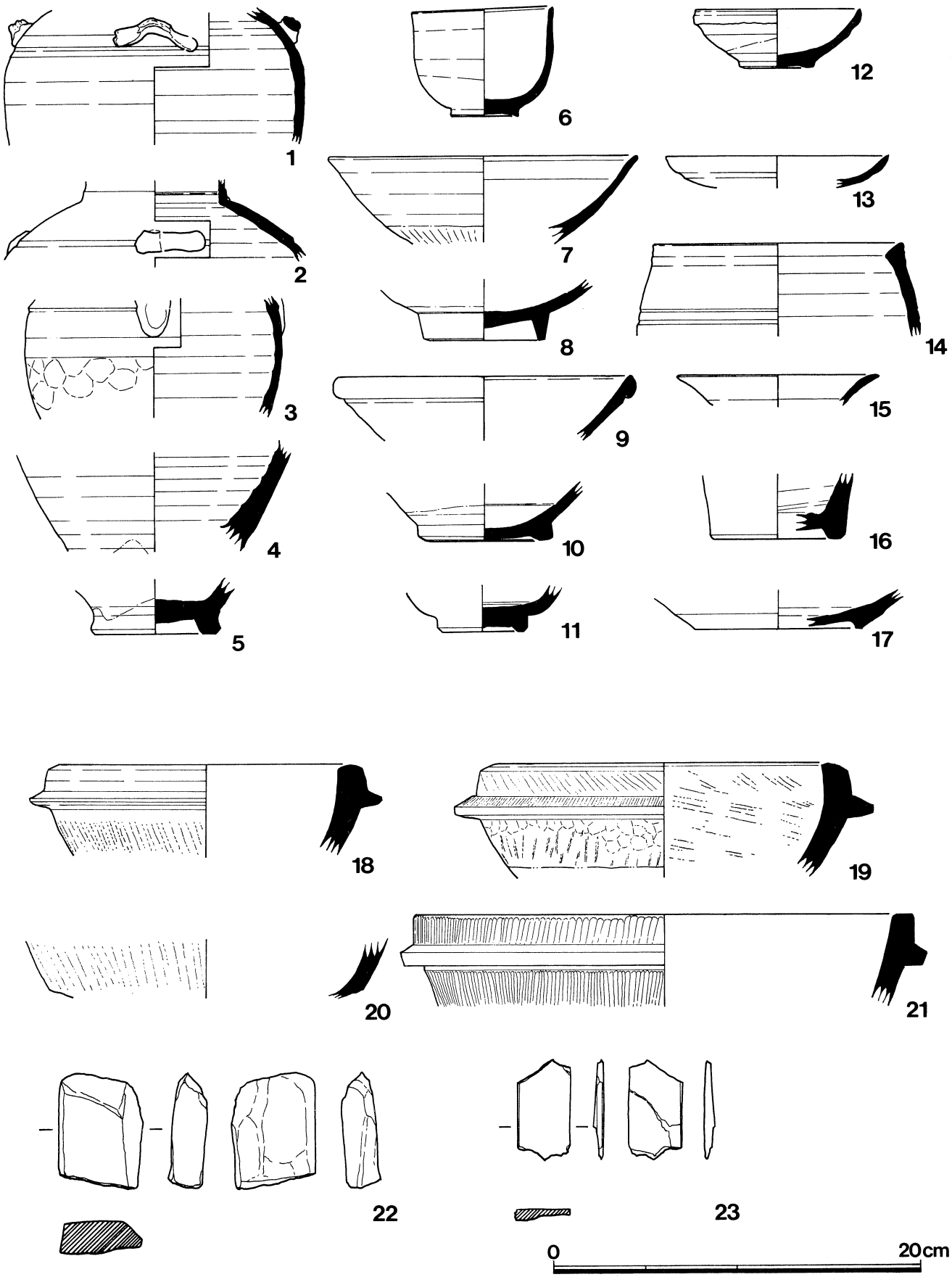


fig. 50　出土遺物実測図（1～17：輸入陶磁器　18～21：滑石製鍋　22：砥石　23：砥石？）

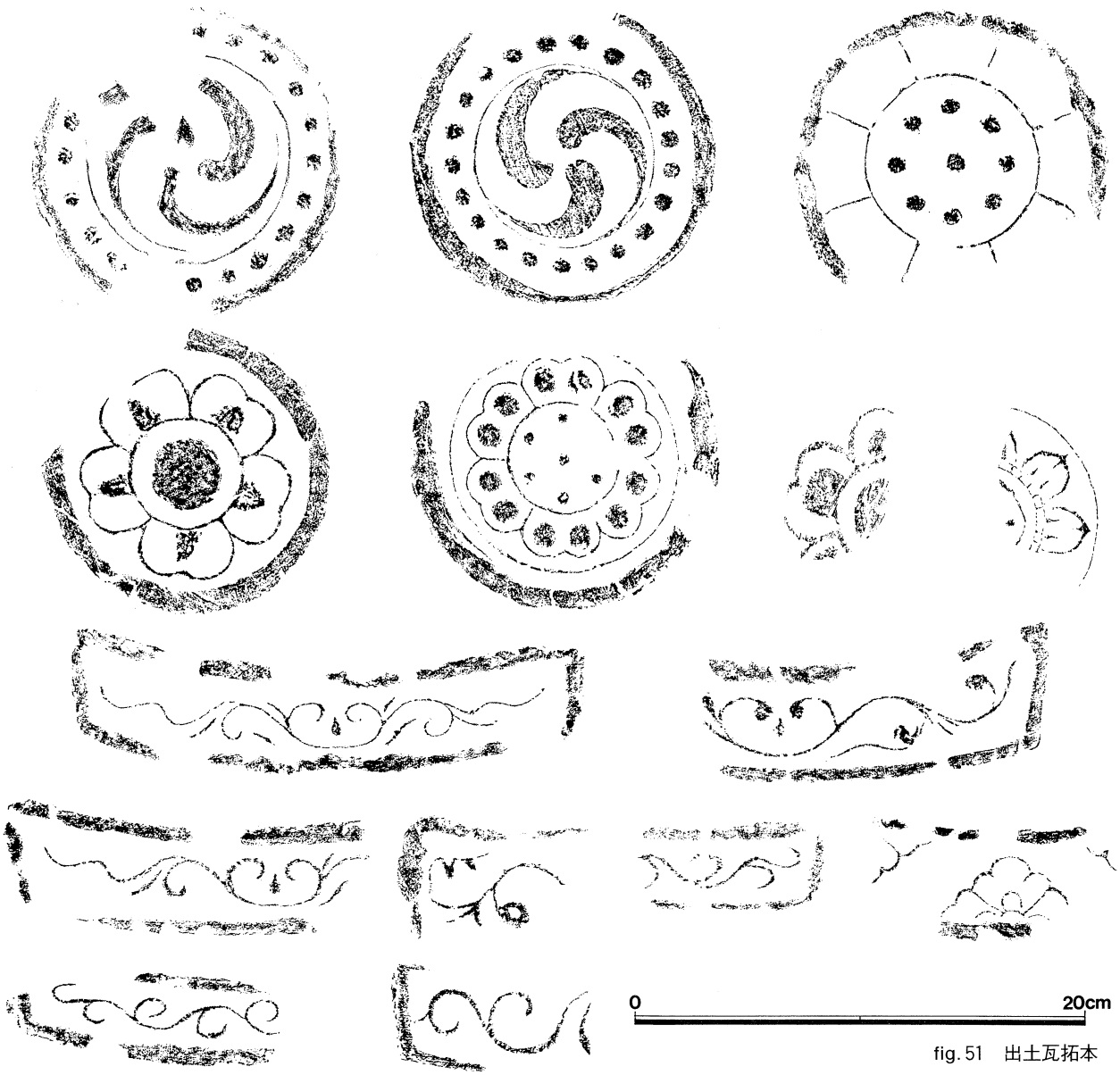


fig. 51　出土瓦拓本

3．まとめ

今回の調査では、明確な遺構は検出されなかった。しかしながら60㎡にも満たない調査面積で、おおよそ30箱（28ℓ入コンテナ）分もの遺物が出土した。このうち土師器皿と瓦がそれぞれ約８箱ずつとなり、全体の過半を占めることが特徴として捉えられる。

多量の瓦の出土は、当調査地の東北側に瓦を使用した堂宇が存在したことが考えられ、多量の土師器皿の使用は、官人層の「宴」が想起される。

また日常雑器とともに、一般の集落では見られない白磁四耳壺・水注等が出土している。この他に第１次調査では石帯の丸鞆が出土している。これらから当時の高級品を使用することが出来る官人層の存在が想定される。

あくまで状況からの判断であるが、平清盛が営んだといわれる別業「雪の御所」が浮かび上がってくる。ただし当調査地の北約300ｍにある祇園神社の関連施設の可能性なども充分考慮しなければならない。

早急に結論を出すべきものではなく、文献資料の検討や出土遺物の詳細な検討などが今後に残された課題である。

7．塚本（つかもと）遺跡　第2次調査

1．はじめに

塚本遺跡はマンション建設に伴い、新たに確認された遺跡である。建設される建物の基礎と梁部分について、調査を実施した。

この遺跡は、旧湊川により形成された沖積平野に立地する。弥生時代の拠点集落として知られる楠・荒田町遺跡から南西約1,500ｍに位置し、兵庫大開小学校で検出された弥生時代前期の環濠集落から250ｍに位置する。

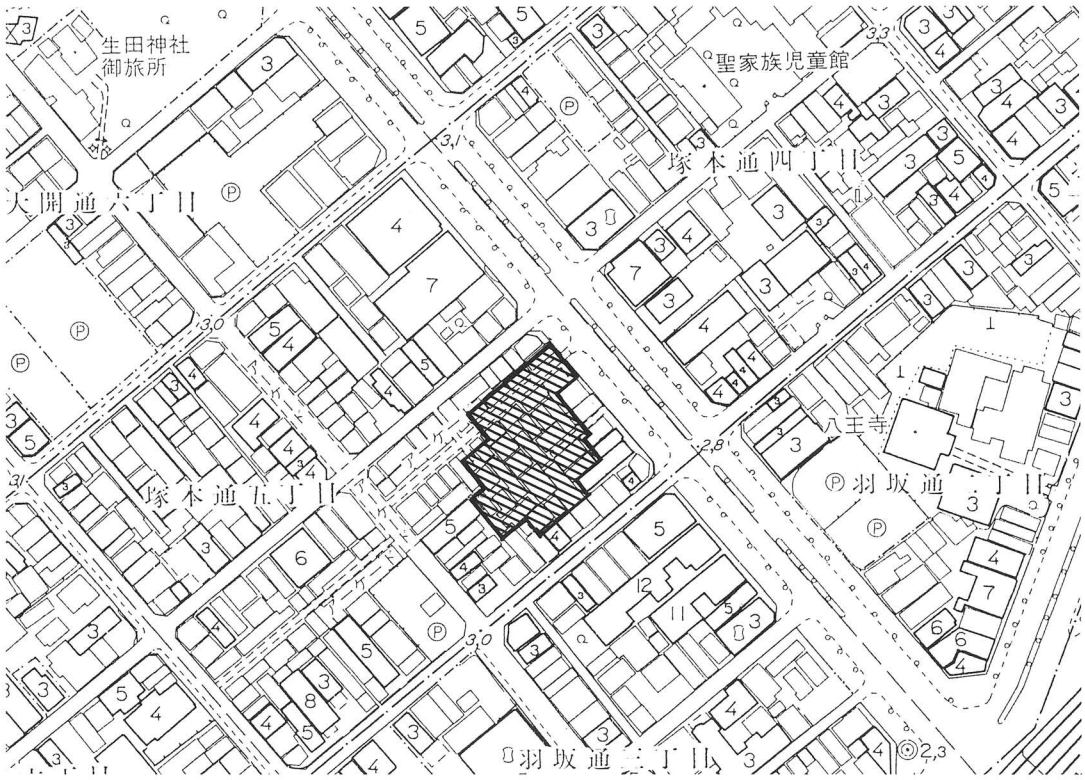


fig. 52
調査地点位置図
1：2,500

2．調査の概要

遺構面は基本的に近世（一部は中世後期の可能性がある）と弥生時代前期・中期の２面である。調査の結果、近世の土坑や溝、弥生時代中期前半の土坑・溝や弥生時代前期の土坑や溝も検出した。

調査区の一部で断ち割りを実施したが、遺構面の下層は厚さ約120㎝の細砂～中砂が堆積している。その下層はシルト層で、さらに下層は、礫層となっている。なお、遺構検出面は、標高約1.8ｍ前後である。

第１遺構面

遺構面は、近世～近代にかけての旧耕土の下面、黄褐色中砂～粗砂と灰色中砂～粗砂である。遺構面からは、２時期にわけられるピットや土坑、溝が確認されている。

ピットの一部は中世後期にさかのぼる可能性があるが、遺物の出土量はわずかであり、判断は難しい。

SK11

調査区北端に位置する大きな土坑である。直径７ｍ、深さ1.2ｍを測る。中央部の底からやや浮いた状態で、馬の頭部を検出した。頭部以外にも、馬の大腿部と思われる骨も検出している。しかし、１頭分完全な状態の出土とは考えられない。何らかの形で埋葬されたものと考えられ、祭祀的な側面も考慮される。出土遺物から12世紀頃と考えられる。

SK12　調査区北部に位置する直径４ｍ、深さ0.3ｍを測る円形の土坑である。時期は、12世紀頃と考えられる。

SK13　調査区北部に位置する直径12ｍ、深さ1.5ｍを測る円形の土坑である。時期は、12世紀頃と考えられる。

第２遺構面　弥生時代前期から中期にかけての遺構を検出した。

弥生時代中期の遺構として、溝と土坑がある。

SK03　直径約30㎝の浅い土坑である。土坑の中心に、土器を立てて、据えていた。

SK04　長径1.5ｍ、短径50㎝を測る浅い土坑である。土坑の中の中心に、土器を立てて、据えていた。

SK06　一辺1.5ｍを測る土坑である。土坑の中に、土器を立てて、埋置していた。

SK07　直径30㎝、深さ20㎝の土坑である。窪みの中心に、土器を立てて、据えていたようである。土坑は土器を埋置するために掘られた可能性がある。

SK08　直径30㎝、深さ15㎝の土坑である。土坑の中心に、土器を立てて、据えていた。

SK09　一辺1.5ｍを測る方形の土坑である。土坑の中心に、土器を立てて、据えていた。

SD04　幅1.5ｍを測る溝である。

SD08・09　幅最大3.0ｍ、深さ50㎝を測る溝である。出土遺物として縄文時代晩期の土器や弥生時代前期の土器が出土している。

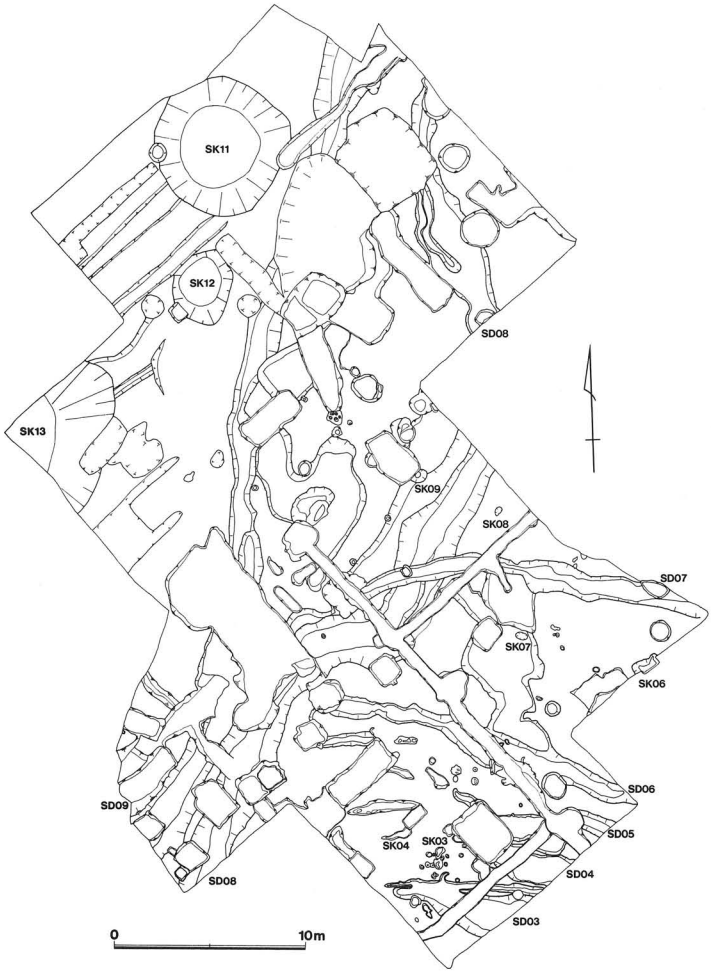


fig. 53　第２遺構面平面図

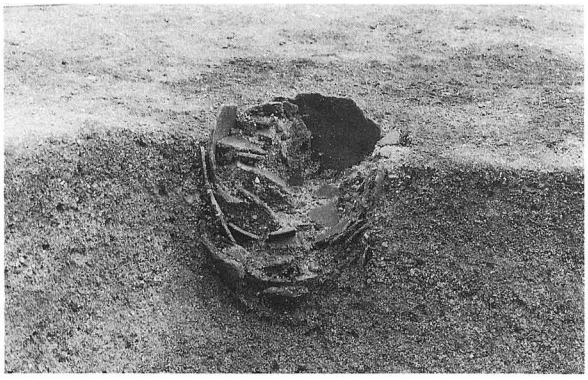


fig. 54　SK09土器出土状況

３．まとめ

今回の調査においては、弥生時代前期から中期にかけての遺構と中世の遺構を確認した。弥生時代前期から中期の遺構としては、墳墓的な色彩がみられ、大開遺跡の集落との対置において興味深い例となろう。また、中世の遺構では、馬が出土していることから、祭祀的な意味合いが看守され、後に、この地がお旅所となることからも興味深い事例である。

8．日下部（くさかべ）遺跡　第１次調査

1．はじめに

この遺跡は、八多川が蛇行し有野川と合流する地点の南側、有野川左岸の平地から丘陵裾部に位置し、現標高は約170ｍである。

今回の調査は、事前の試掘により遺物包含層および遺構が確認されたため、住宅建設およびそれに伴う擁壁にかかる部分を対象に発掘調査を実施した。

調査は、表土および盛土部分を機械で、遺物包含層以下を人力による掘削で行い、掘削残土については他地に運搬仮置きし、調査終了後再び機械により、埋め戻しを行った。

全面に盛土がなされており、その下層に旧水田耕土および床土が見られ、さらに数層の旧水田土壌が堆積し、調査地南側で現地表下約40㎝、北側では約60㎝で遺物を包含する淡灰色シルト層となる。この遺物包含層は10㎝前後と堆積は薄い。その下層の遺構面は概ね暗黄灰色砂質土であるが、部分によってはその下層の暗灰色砂礫層があらわれている所もある。

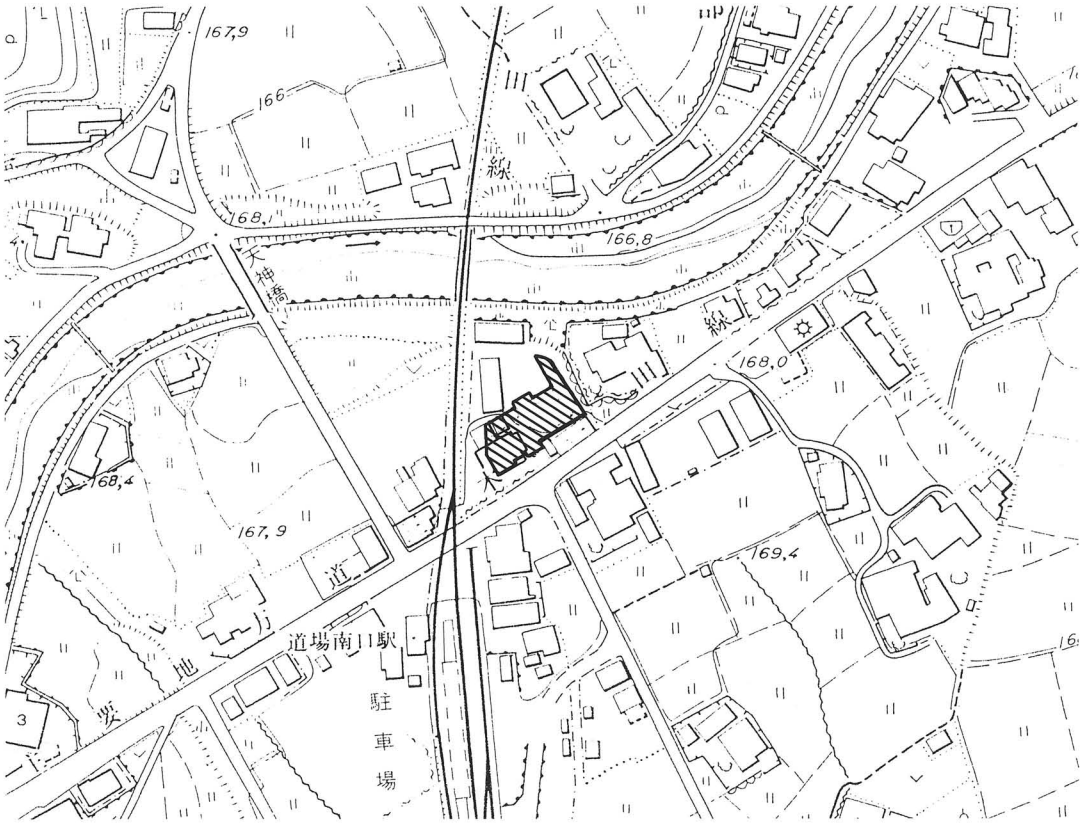


fig. 55
調査地点位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居１棟・土坑１基、平安時代後期の掘立柱建物６棟以上・土坑１基・ピットなどである。

弥生時代後期の遺構

SB01

SB01は調査地の北東部において検出された竪穴住居で、この住居の約１/２は調査地外にあるため、未調査である。直径約８ｍの円形竪穴住居で、深さは約40㎝、周壁溝を設けた４本柱の構造で、中央に径1.4ｍ・深さ60㎝の土坑（炉）を設けている。この住居の西に幅80㎝・深さ20㎝で西側先端に向かって細く、浅くなる溝があるが、住居との切り合いが認められなかったことから、この溝は住居に付帯する何らかの施設と考えられる。

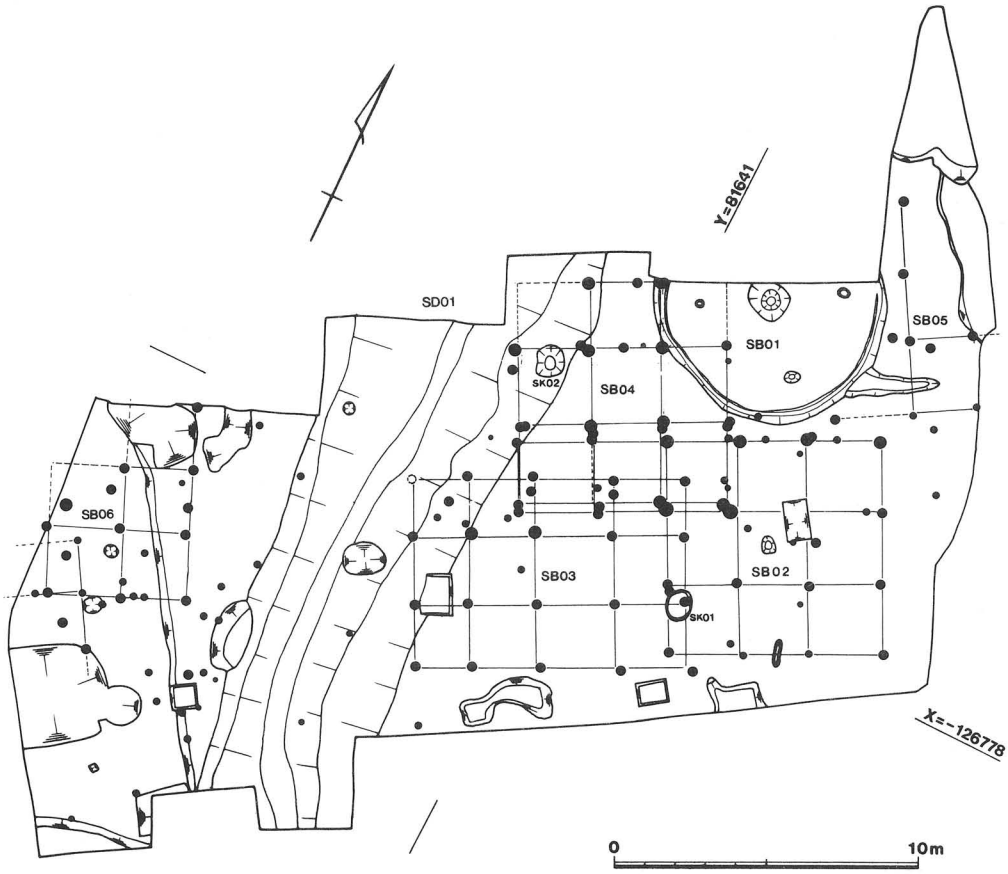


fig. 56
遺構平面図

住居内からは、現位置を保った状態で出土した土器は僅少であったが、埋土中より多くの弥生土器が出土した。これらの土器から、この住居は弥生時代後期前半のものと考えられる。

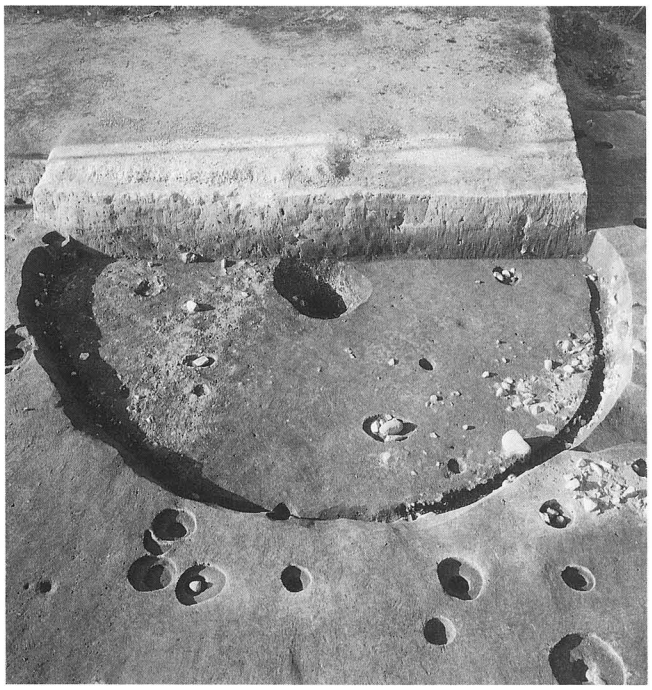


fig. 57　SB01

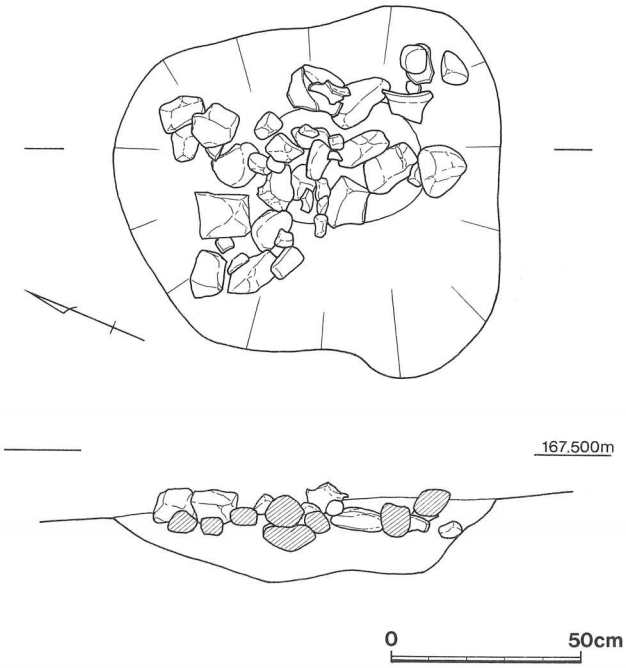


fig. 58　SK02平・立面図

SK02　SK02は長径1.0m・短径0.8mの不整楕円形で、深さ25cmの土坑である。土坑内には多くの拳大の礫とともに、弥生土器片が廃棄されたような状態で出土した。この出土土器から、上記の住居と同じ時期であると考えられる。

SD01　SD01は調査地の中央にほぼ南北にはしる溝で、幅4～6m、深さ0.3～0.7mで北側へ緩やかに下る。この溝の埋土は、黒褐色～暗灰褐色の極細砂質で、中位には遺物は見られないが、最下層でサヌカイト剝片が出土した。また、最上層には平安時代後期の須恵器・土師器片を包含する層が厚さ20cmで堆積しており、この時期には浅い窪み状の溝であったと考えられる。この溝の時期については決め難いが、弥生時代には存在していたと考える。

また、溝底の下層を断割りし、断面土層を観察した結果、遺構面を形成する土層およびその下層自体が湾曲して窪んでおり、自然の谷状地形を形成していたものと考えられる。

平安時代後期の遺構

掘立柱建物

掘立柱建物は、6棟確認された。各建物は、軸を南北よりおよそ45度振った方向で建てられている。各建物の切合いおよび出土遺物から少なくとも3時期が考えられ、同時期に存在したのは1～3棟である。

各建物の規模については、検出された柱穴の組み合わせなど今後さらに検討する必要があるが、現整理時点では下記のように考えられる。

SB02は3間×3間で、北西部の1間×2間の連続する柱穴もこの建物に附帯するのもと考えられる。

SB03は4間×3間、SB04は3間×3間以上の掘立柱建物である。

この3棟は、SB04→SB02→SB03の順に建てられたと考えられる。

SB05は2間×3間以上、SB06は2間×3間以上で調査地外に拡がっている。SB06付近には、他に柱穴が検出されており3棟以上が存在すると推定される。

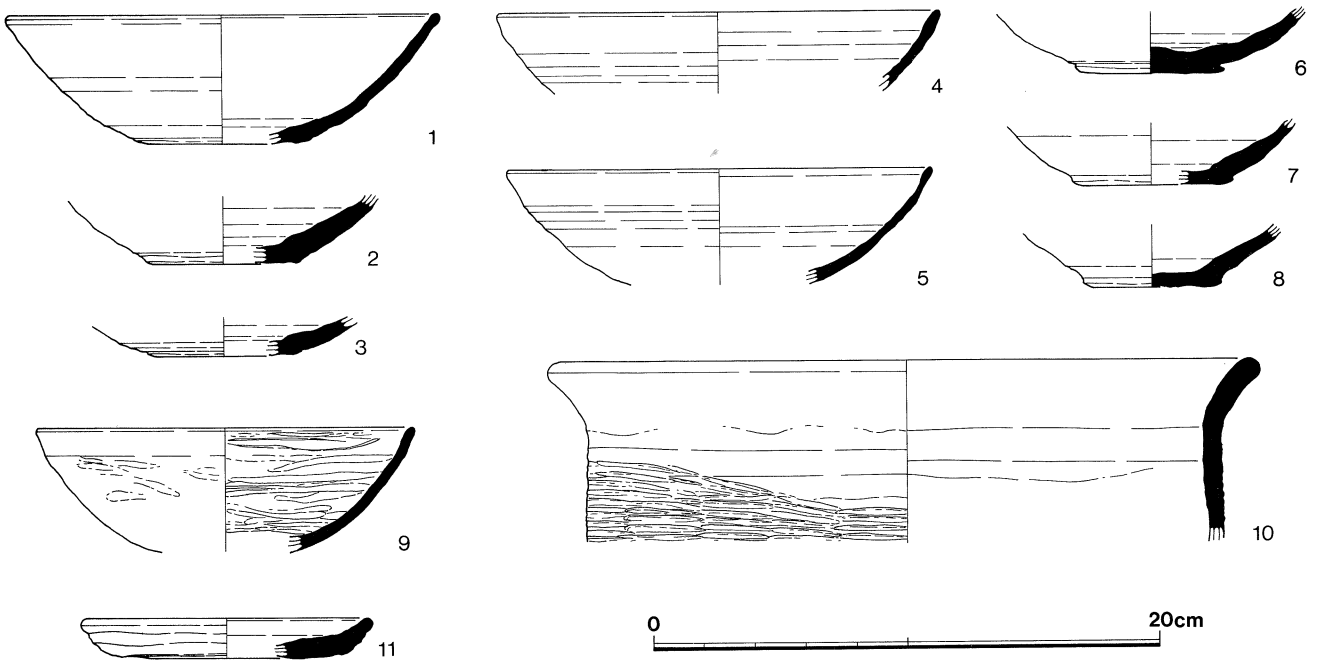
SK01　SK01は、長径1.1m、短径0.9m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。この土坑と切合うSB03の柱穴は、この土坑の埋没後、穴を掘り込まずに偏平な石を礎石状に置いて設置している。これらの遺構の時期は、11世紀後半から12世紀前半と考えられる。

この集落は、南西から延びる丘陵先端の微高地状の所に位置しており、当調査地はその北東端にあたると考えられる。このため、この時期の集落遺跡がこの調査地より南ないし南西に拡がっている可能性は高い。

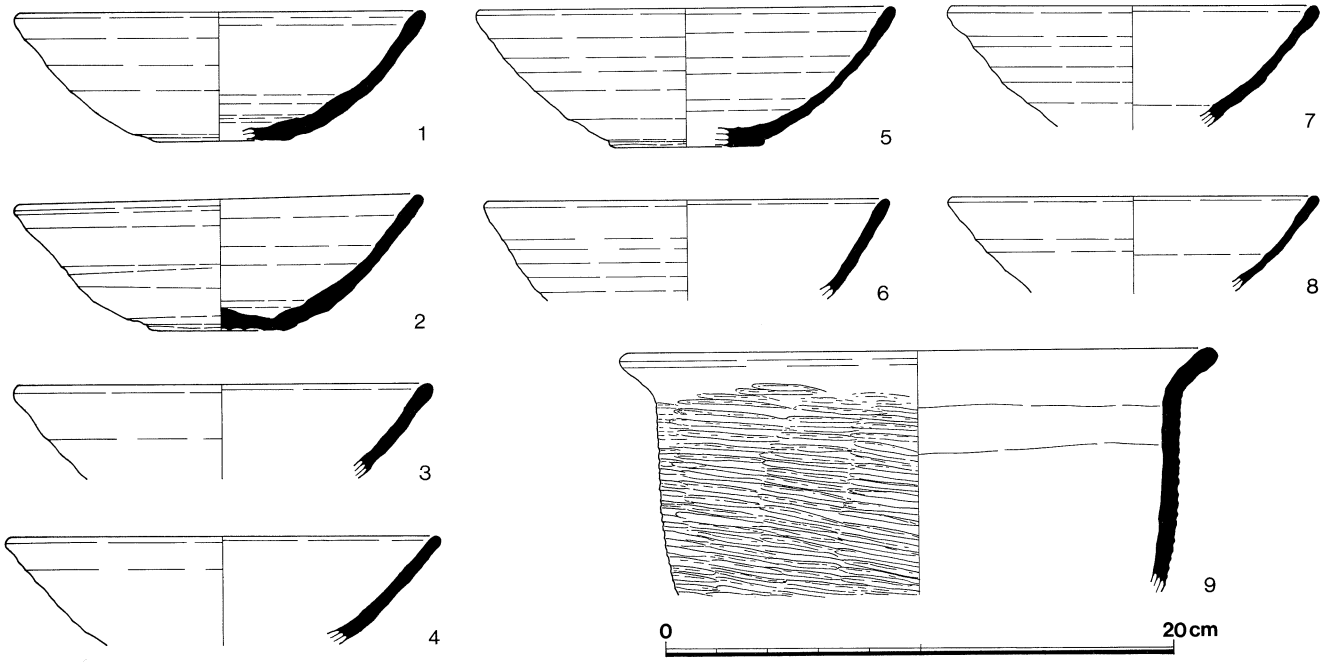
3．まとめ

今回の調査により、弥生時代後期の竪穴住居や平安時代後期の掘立柱建物が見つかったことによって、日下部遺跡に広範な時期の集落が存在することが明らかになった。特に弥生時代の集落遺跡については、周辺では北神ニュータウン内と塩田遺跡（道場町）で知られているが、八多川・有野川流域では今回初めて確認された。また、包含層からは縄文土器も出土しており、付近にこの時期の遺構がある可能性を示している。

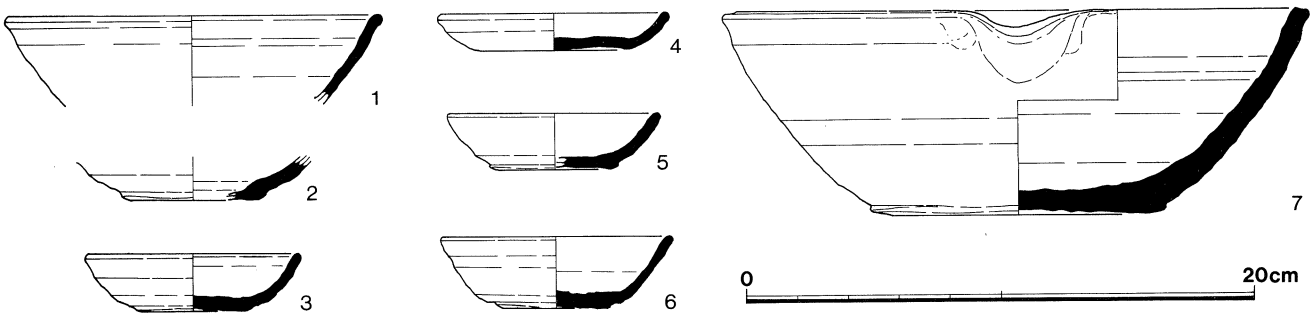
これまで、有馬川西岸から有野川、八多川東岸およびこの三河川が合流する地点に挟まれた日下部を中心とする地域では、発掘調査例が少ないこともあり遺跡の存在やその範囲についても必ずしも明らかでなかった。しかし、今回の調査結果から見て、広範な時期の遺構が、今後検出されるものと予想される。



（掘立柱建物柱穴内出土土器
（1：SB01　2・3：SB02　4～10：SB04　11：SB05　9：黒色土器　10：土師器　他は須恵器　10のみS＝1/4））



（掘立柱建物（SB06）・柱穴内出土土器（9：土師器　他は須恵器　9のみS＝1/4））



（土坑（SK01）・包含層出土須恵器（1～3：SK01　4～7：包含層））

fig. 59　出土土器実測図

9．淡河（おうご）・萩原（はぎわら）城（じょう）遺跡　第３次調査

1．はじめに　淡河・萩原城は、近江の住人中嶋氏が淡河荘の地頭職に任じられたことにより、建治２（1276）年２月に築造したものといわれている。

天文23（1554）年、有馬重則が別所氏の三木城を囲んだとき、この萩原城も西方の淡河城とともに落城したと伝えられている。その後有馬則頼が萩原城に移住したと考えられているが、その年代は明確ではない。

天正６（1578）年、別所長治・淡河定範は織田信長に対抗したが敗戦し、淡河城はこの時功があった有馬則頼が城主となり、萩原城は廃城になった（天正７・1579年）。

萩原城は、13世紀の末から16世紀の末までの約300年間の長期にわたって機能した中世城郭である。

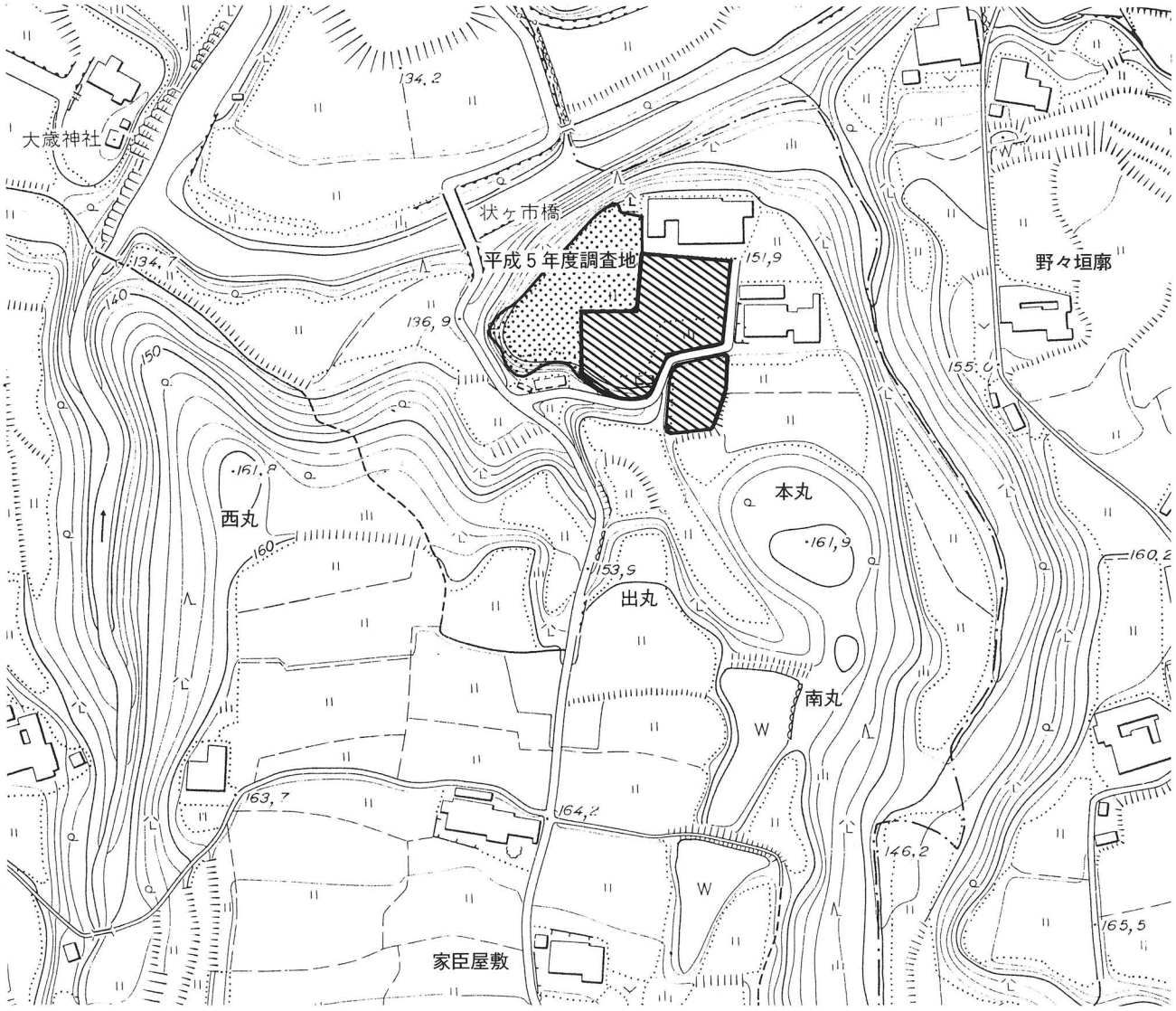


fig. 60　調査地点位置図　1：5,000

2．調査の概要　今回の調査地は主郭の北に位置するいわゆる弐の丸地区の中央部にある。掘立柱建物・柵列・溝・集石遺構・土坑・石室・石垣・石橋・堀・横矢などが検出された。

掘立柱建物　掘立柱建物は前年度検出したものを再検討した結果を加え、計21棟となる。

遺構番号	長　さ	幅	面　　積	備　　考
SB11	7.3m	7.0m	51.1m²	前年度調査　再検討
SB14	7.1m	5.4m	38.3m²	前年度調査　再検討
SB15	10.2m	9.0m	91.8m²	前年度調査　再検討
SB16	12.7m	7.9m	100.3m²	以下、今年度検出分
SB17	4.3m	4.2m	18.1m²	
SB18	3 m以上	4.2m	12.6m²以上	
SB19	7.2m	6.1m	43.9m²	
SB20	9.9m	7.0m	69.3m²	
SB21	11.4m	5.7m	65.0m²	
SB22	11.1m	6.7m	74.4m²	

掘立柱建物の所属時期については、柱穴からの出土遺物が、少量かつ細片で確定しがたいが、SB17・20・21・22は、14～15世紀代の可能性がある。

集石遺構　集石遺構にはSX01・02・03・04とSX10の計５基がある。

遺構番号	長　さ	幅	深　さ	出　土　遺　物
SX01	2.5m	2.0m	0.15m	丹波スリ鉢、唐津小皿、平瓦
SX02	3.5m	1.4m	0.15m	須恵器甕・鉢・鍋、土師器鍋、滑石
SX03	2.5m	2.41m	0.25m	須恵器甕・鉢・椀、土師器鍋
SX04	1.4m	1.4m	0.23m	丹波壺、土師器スリ鉢
SX10	2.2m	1.7m	1.45m	丹波スリ鉢、須恵器甕・鉢・椀、土師器鍋・スリ鉢、陶器椀、平瓦

この内、16世紀末～17世紀初と考えられるSX01を除く他の４基は14～15世紀にかけてのものと思われる。

土　坑　土坑からの出土遺物も極めて少なく、時期決定が困難なものが多いがSK03・08・07・11・13・14は14～15世紀代、SK23は16世紀代、SK21は17世紀代以降と思われる。

石　室　石室（SX05）は長さ4.2m、幅3.0m、深さ0.5mの長方形土坑内の東に偏して構築された長さ2.5m、幅2.0m、深さ0.6mのものである。石組みは現在３段残るが、上部は削平されている。底面から棒状の鉄器、一石五輪塔が出土し、埋土から丹波スリ鉢、須恵器椀、土師器鍋・スリ鉢が検出された。

15世紀代のものと思われるが、さらに検討が必要である。

石　垣　石垣には東西方向の石垣１と南北方向の石垣２がある。

石垣２は石橋SX07の西に作られた小平坦面SX06の西斜面に構築されたもので、東西２列ある。

小平坦面SX06の造成土から近世伊万里と考えられる磁器が出土しており、石垣２も近世に下るものと思われる。

石垣１は今回調査を行っていない。

石　橋　　石橋も東西方向のSX08と南北方向のSX07がある。

これらはいずれも逆Ｌ字形を呈する堀SX09にかけられたものであるが、東西方向のSX08については、その裏ごめ土から近世磁器が出土しており、当城郭の時期とは異なる。

石橋SX07については、断ち割りを行っておらず、構築時期に関しては断定できない。

堀　　堀SX09は、幅約８ｍ、深さ約1.5ｍの逆Ｌ字形のもので、北端で東に折れて更にのびて

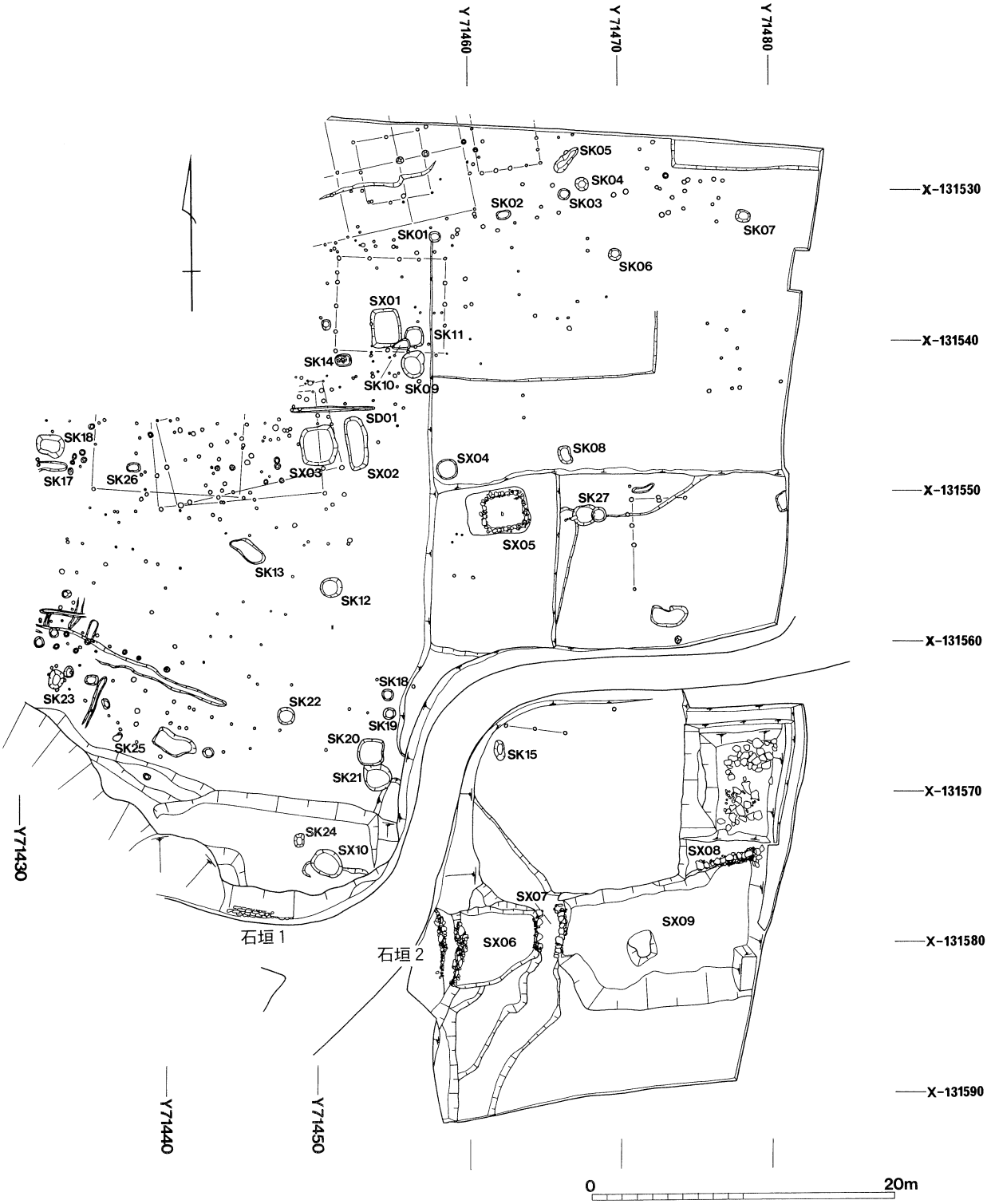


fig. 61　平成６年度検出遺構平面図

いることが試掘調査によって知られている。

石橋SX07の西側については、本来更に堀が続いていたものと現在考えている。

横　矢　集石遺構SX10、土坑SK24が作られている小平坦面をいま横矢と呼ぶ。集石遺構SX10の時期が14～15世紀と考えられることから、この平坦面も同時期には形成されていたと考えるのが妥当と思われる。

遺　物　遺物としてはfig. 63・64に提示したもの以外では、縄文時代と思われる石斧、サヌカイト製石鏃・フレイク・チップ、チャート製石鏃、タタキ石のほか北宋銭、銅器片、鉄砲玉等が出土している。

3．まとめ

今年度はfig. 61に示した範囲について、全面調査を行った。ただし、石垣１を含む横矢部分は調査を完了していない。来年度にその南に東西に走る城本来の小道と共に調査されるのが望ましい。

fig. 62　平成５・６年度検出遺構平面図

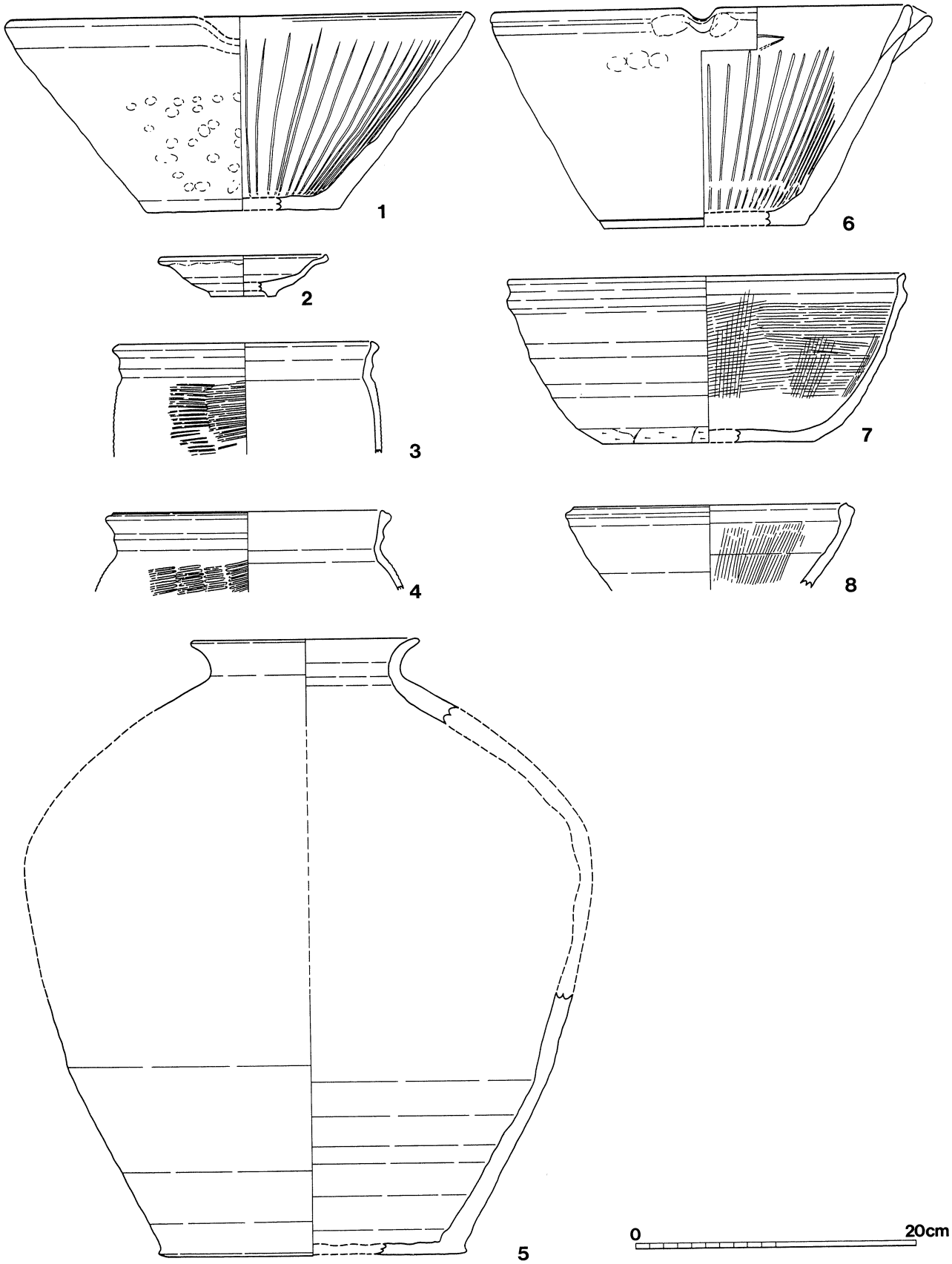


fig. 63　出土土器実測図（SX01：1－丹波スリ鉢、2－唐津小皿　SX02：3－須恵器鍋、4－土師器鍋
SX04：5－丹波壺　SX05：6－丹波スリ鉢　7：土師器スリ鉢　SX09：8－須恵器スリ鉢）

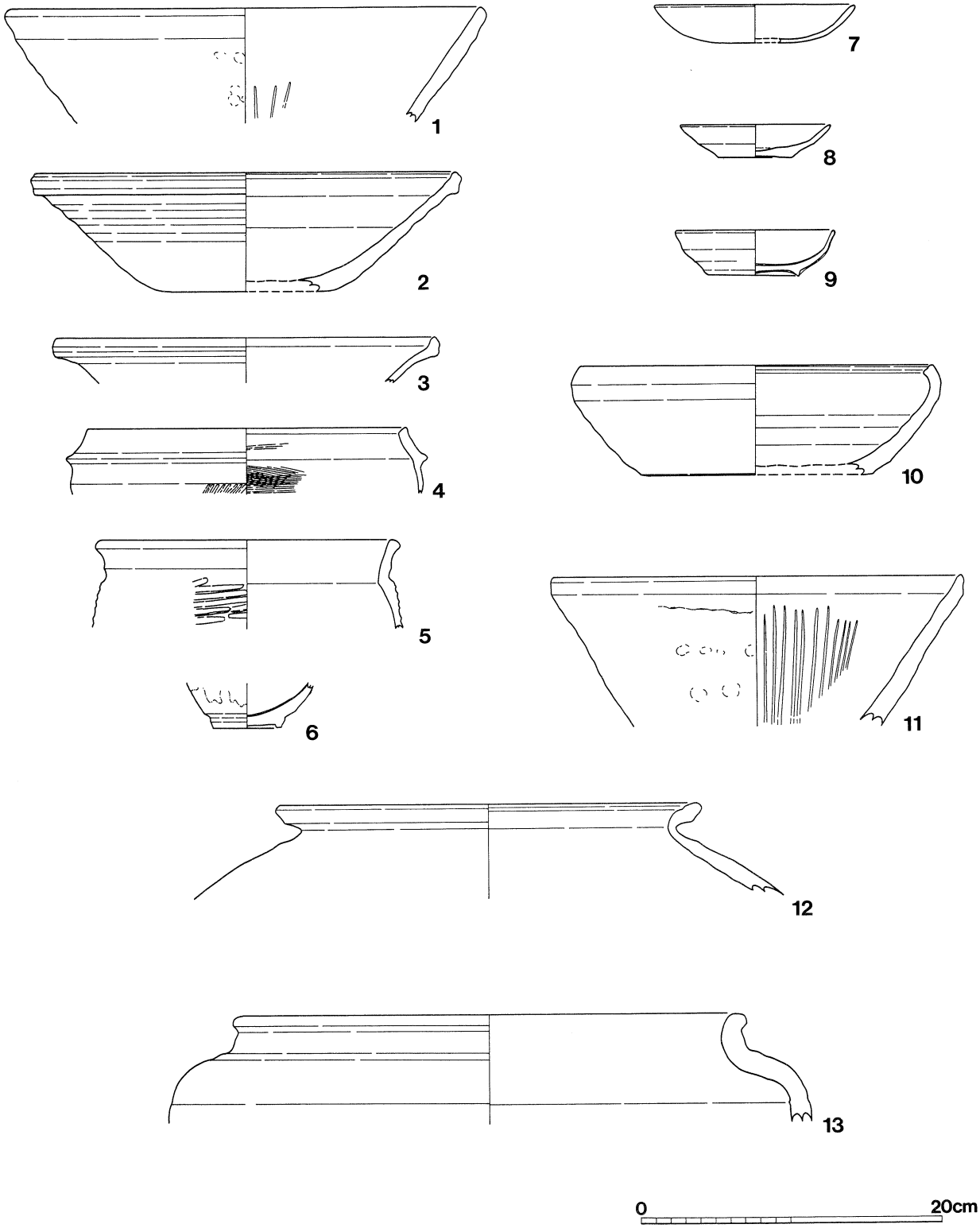


fig. 64　出土土器実測図

（SX10：１一丹波スリ鉢、２・３一須恵器鉢　４・５一土師器鉢　６一陶器椀　SX17：７・８一土師器皿
９一瀬戸美濃小皿　SK23：10一備前鉢　ピット17：11一丹波スリ鉢　SK08：12一丹波甕　包含層：13一備前焼）

10. 五番町（ごばんちょう）遺跡　第５次調査

１．はじめに

五番町遺跡は市営地下鉄建設にさきだつ路面電車軌道撤去および埋設管試掘調査に並行して実施した埋蔵文化財立会・試掘調査によってあきらかになった遺跡である。その際には縄文時代晩期後半の遺物が出土した。出土した位置は今回の調査地のほぼ北側にあたる（市営地下鉄長田駅）。その後、五番町およびその周辺の住宅改良事業（市営住宅建設）に伴う発掘調査がおこなわれ、遺跡の範囲はひろがっていった。これまでに４次にわたって調査がおこなわれ、縄文時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。とりわけ第２次調査では、奈良時代から平安時代の掘立柱建物が検出されている。

今回の調査も住宅改良事業に伴うものである。試掘調査では中世と縄文時代晩期の遺物が出土し、遺構も確認された。本調査の段階で縄文時代後期の遺構・遺物が確認されたため、さらに調査をすすめることになった。調査は残土搬出のための車両進入路確保のため２地区にわけて実施した。ただし以下の概要報告では一括して記述している。なお、進入路部分（Ⅱ区）は影響深度の関係から縄文時代晩期面までの調査となっている。また、第５遺構面についても同様に地中梁が深くはいる部分についてのみ調査をおこなった。

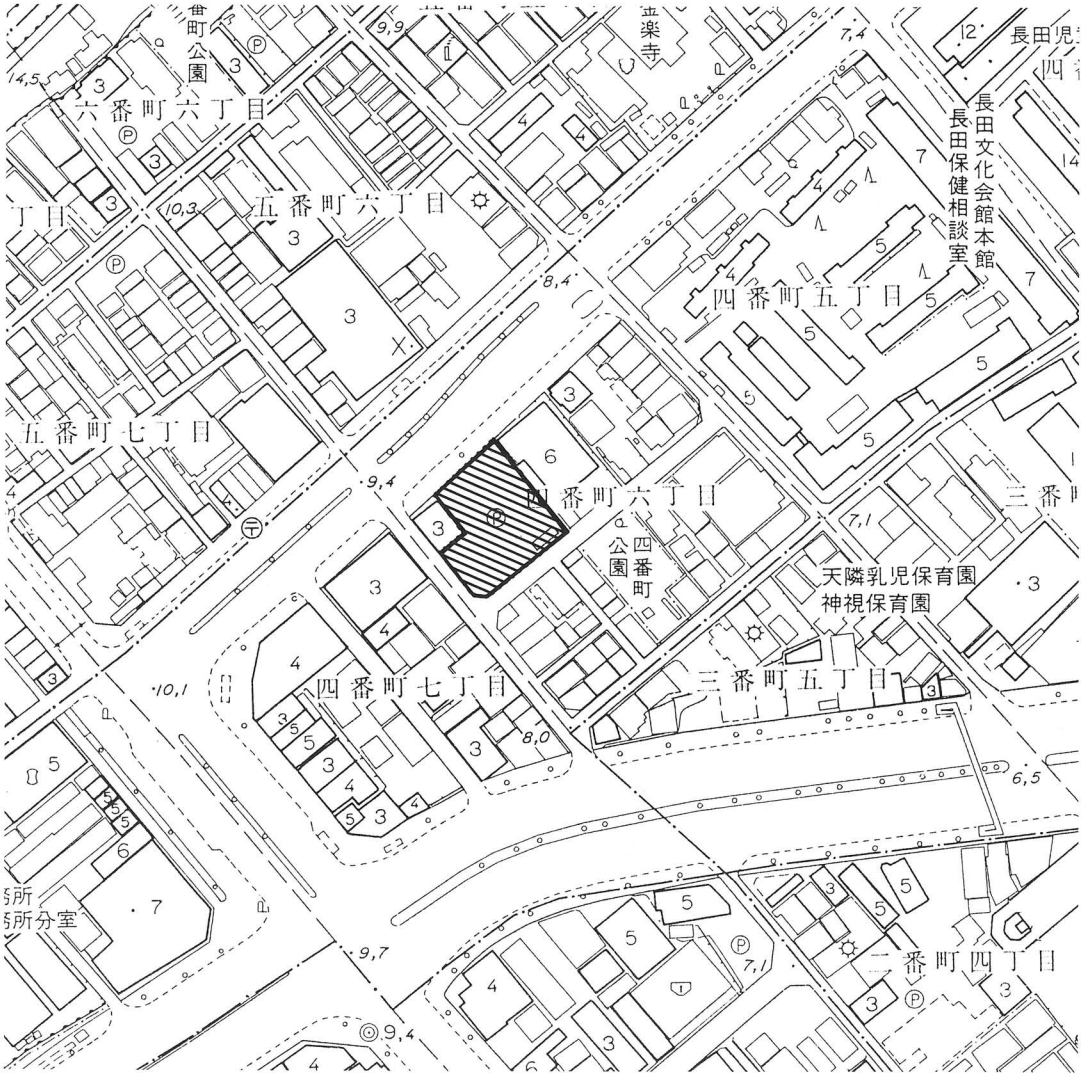


fig. 65
調査地点位置図
１：2,500

2．調査の概要　基本層序は盛土、灰褐色粘質砂（中世遺物包含層）、暗褐色粘質砂（縄文時代晩期包含層）、暗褐色粘質砂（バイラン土ふくむ）（縄文時代晩期包含層）、淡褐灰色シルト、暗褐色シルトまじり砂、灰黄色シルト（縄文時代後期包含層）、青灰色シルト（縄文時代後期包含層）、暗青灰色シルトとなっている。

第１遺構面　盛土を除去するとすぐに近世の遺構面となる。全体に耕作痕がのこるほか土坑２基、ピット十数個、井戸１基が検出されている。出土した遺物は少ない。

第２遺構面　灰褐色粘質砂を除去すると中世の遺構面である。土坑８基、ピット数十個、溝３条を検出している。ピットはいずれも小振りで、建物を構成するものは見つかっていない。鎌倉時代頃に比定されよう。

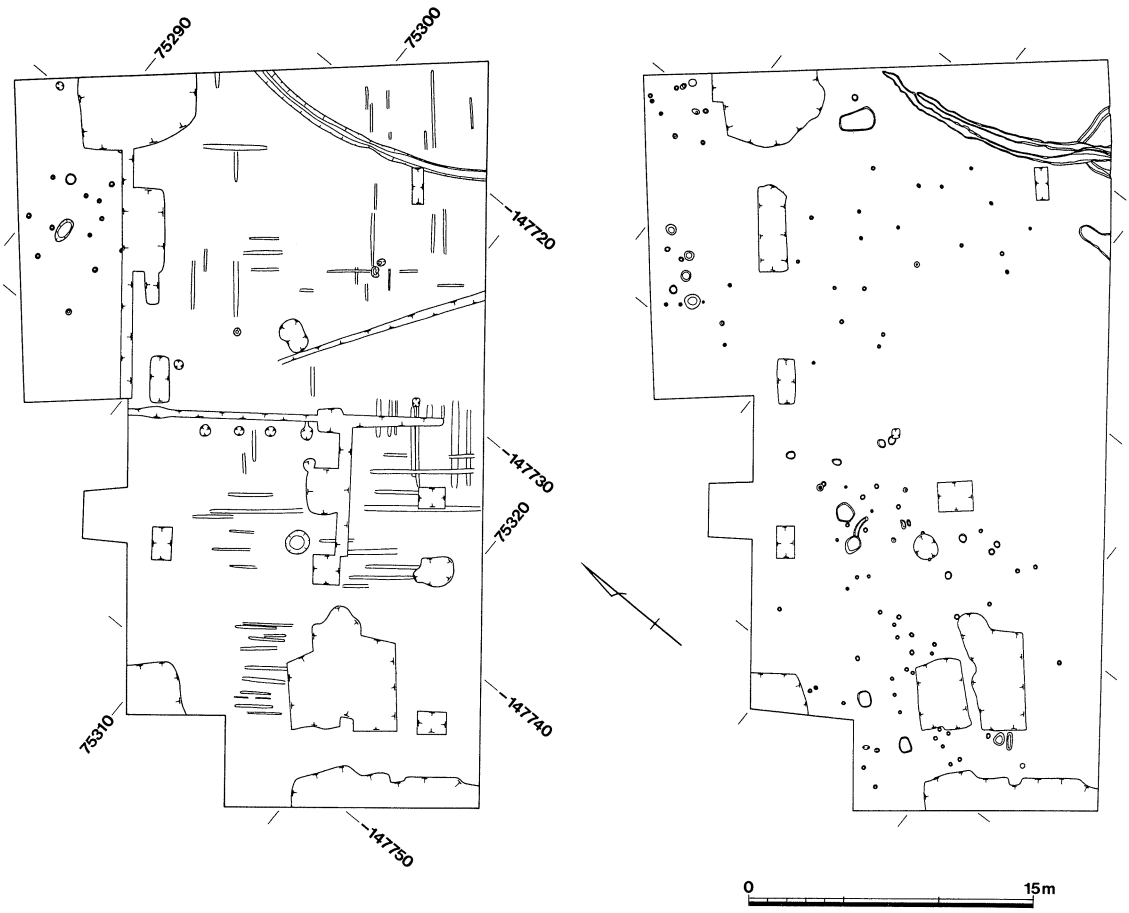


fig. 66　遺構平面図（左：第１遺構面　右：第２遺構面）

第３遺構面　縄文時代晩期後半の遺構面である。土坑２基のほか自然流路、不整形な落ち込みなどが検出されている。

SK301　径70㎝、深さ30㎝の円形の土坑である。壁はほぼ垂直におち、底付近で緩くくぼんでいる。土坑中から遺物はなにも出土していない。

SK302　長径1.95ｍ、短径1.4ｍ、深さ55㎝の楕円形の土坑である。土坑中から「舟形土器」と称しうる特殊な鉢形土器が出土している。

自然流路　西から東にむかってながれる流路である。Ⅱ調査区内で南にむかって分岐している。流路中から縄文晩期の土器片が少量出土している。

fig. 67　第３遺構面全景

fig. 68　SK302

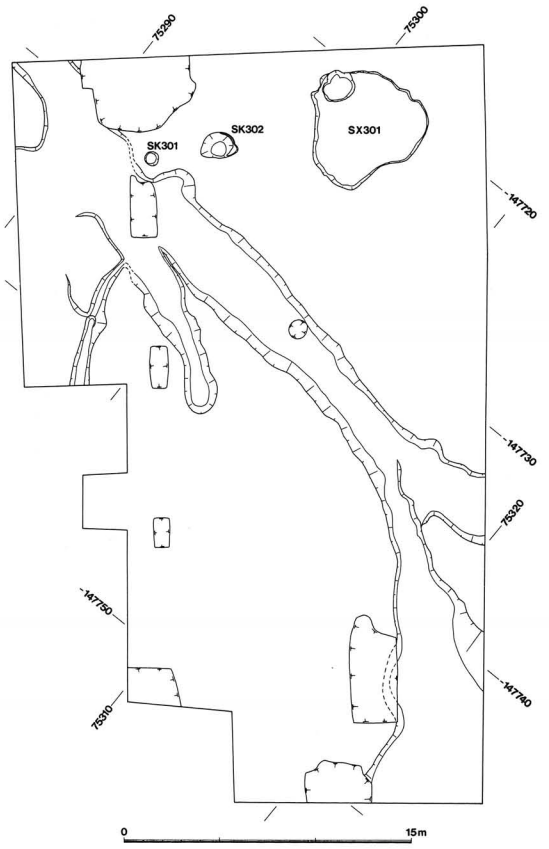


fig. 69　第３遺構面平面図

SX301　　径６ｍ、深さ５～15cmの不整形の土坑である。土坑西側の壁に接した部分に長径85cm、短径80cm、深さ12cmの楕円形のピットが穿たれている。土坑中からは縄文土器片のほか、サヌカイトチップが出土している。土坑底には拳大の礫が10個散在していた。

第４遺構面　　縄文時代後期前半の遺構面である。土坑６基、ピット３個と配石遺構一か所が検出されている。

SK402　　長径70cm、短径46cm、深さ15cmの楕円形の土坑である。10～20cm大の礫５個とともに深鉢１個体が出土している。深鉢は波状口縁で口縁端部内面および体部下半に縄文をほどこしている。北白河上層式に属するものと考えられる。

SK403　　長径85cm、短径65cm、深さ15cmの

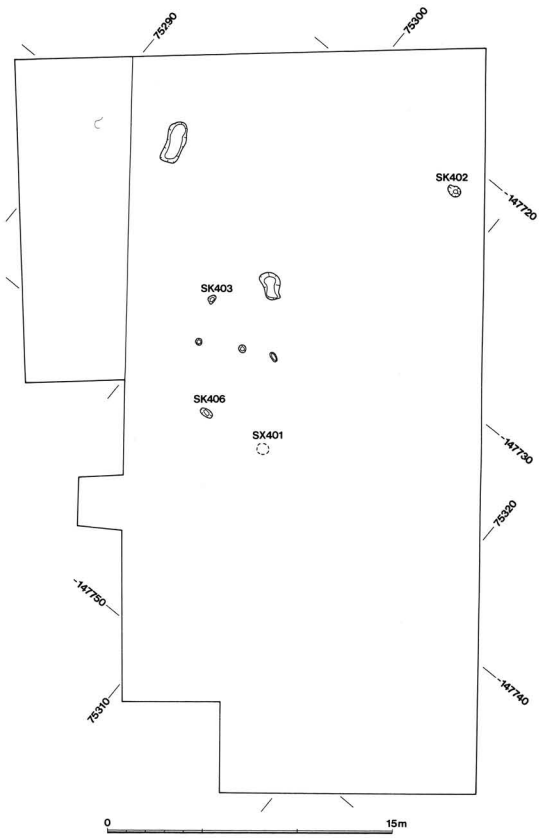


fig. 70　第４遺構面平面図

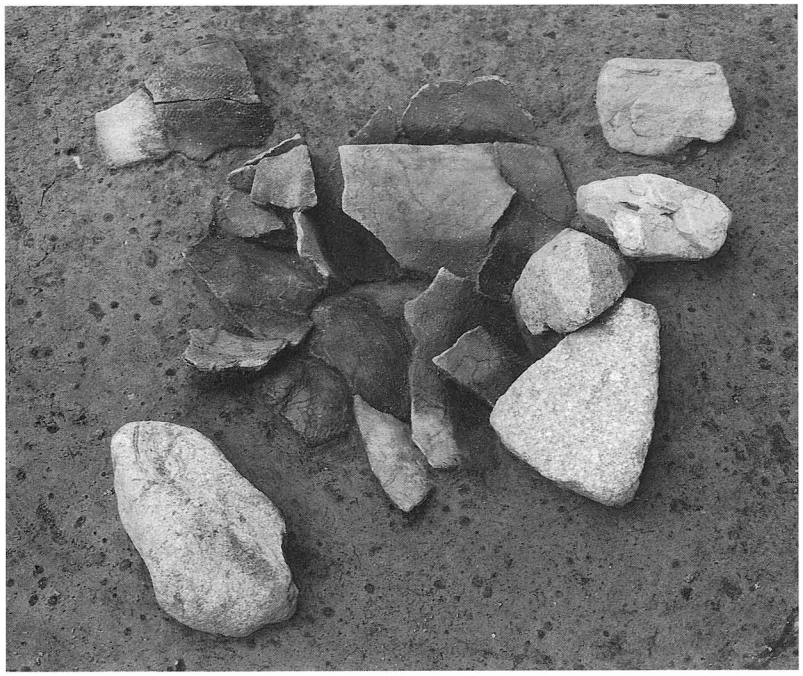


fig. 71　SK402

楕円形の土坑である。土坑埋土上層から浅鉢の口縁部１/２弱が出土している。

SK406　長径90㎝、短径65㎝、深さ10㎝の楕円形の土坑である。土坑埋土上層から深鉢１個体が出土している。北白河上層式に属するものと考えられる。

SX401　20～30㎝大の礫５個で構成される配石遺構である。礫に焼けた痕跡はない。配石の付近で縄文土器片数点が出土している。

第５遺構面　縄文時代後期前半の遺構面である。土坑１基と自然流路、自然の落ち込みが検出されている。

自然流路、自然の落ち込みからの土器の出土は少ない。また土坑から遺物の出土はまったくない。出土した遺物の多くは遺構面上の堆積土である青灰色シルト層からの出土である。

３．まとめ

今回の調査では近世～縄文時代後期にかけて５つの遺構面が検出された。縄文時代晩期については市営地下鉄建設の際の立会・試掘調査で晩期の土器が出土し集落の存在が予想されたが、今回の調査範囲内では住居などは確認されなかった。しかし包含層中からの遺物の出土量も多く、特殊なつくりの土器も出土しており、今後集落が発見される可能性は高い。第４・５遺構面上の堆積土である灰黄色シルト層および青灰色シルト層からは縄文時代後期前半の遺物が多量に含まれている。縄文時代後期前半の深鉢１個体分の破片が出土した土坑が２か所検出され、内１か所では拳倍大の礫を配しているが、これらの土坑の性格は明らかでない。縄文時代後期前半の遺物が神戸市内でこれだけまとまって出土した例は少なく、貴重なものといえよう。

11. 戎町（えびすちょう）遺跡　第12次調査

1．はじめに

戎町遺跡は須磨区戎町を中心に広がる、縄文時代から中世の集落跡である。現在までに弥生時代前期の水田や、弥生時代中期の竪穴住居等が検出されている。

これまでの発掘調査は、主要地方道西出・高松・前池線を挟んでその東西で計11次を数える。

今回当地にマンション建設の計画がおこり、平成６年３月８日に試掘坑を２か所設定し、土層状態等の確認を行った。その結果いずれの試掘坑からも遺物包含層が検出され、発掘調査が必要となった。

発掘調査はマンション建設によって遺跡が影響される基礎部分についてのみ実施する事となった。調査中に、遺構面がさらに２面あることが確認され、期間を延長し、調査を完了した。

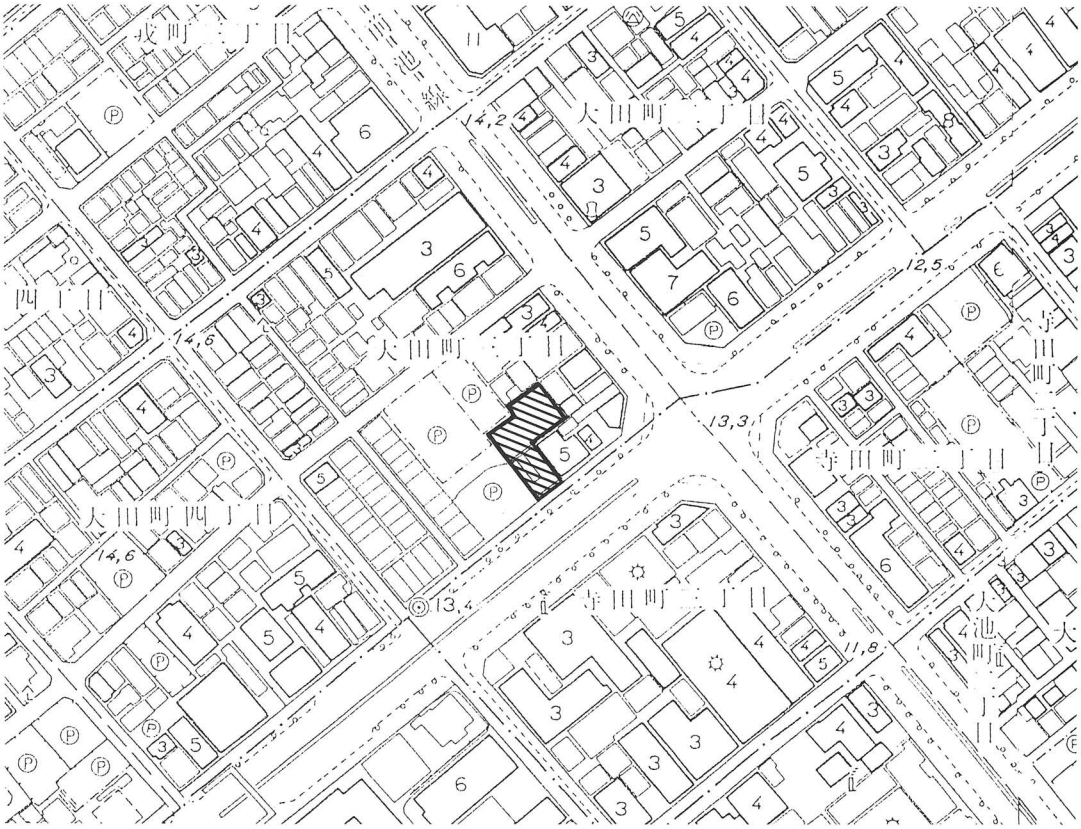


fig. 72
調査地点位置図
１：2,500

2．調査の概要

調査箇所は計20あり、それをＡ～Ｔ区と呼んだ（但し、ＪとＭ、ＬとＮは近接しており調査効率を高めるため、一連にして掘削、調査を行った。）。

第１遺構面

第１遺構面ではＥ区、Ｊ－Ｍ区、Ｏ区で弥生時代中期の遺物包含層の上面を切る溝状遺構が検出された。またＲ区の西壁で確認出来たピットも同時期のものである。遺構の時期は弥生時代末期の庄内期と考えられる。

第２遺構面

弥生時代中期の遺物包含層（第４・５層）除去後に検出された遺構面で土坑、溝、柱穴等がある。

弥生時代中期前葉～中葉（近畿第Ⅱ様式～第Ⅲ様式前半）と考えられる。

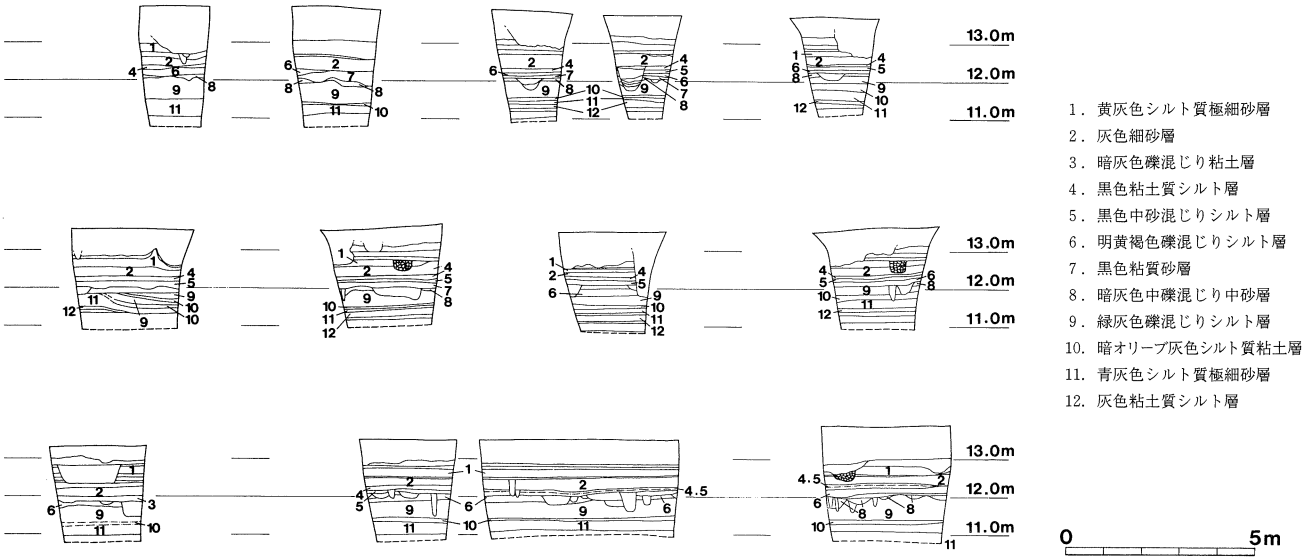


fig. 73　調査区断面図

第３遺構面　第２遺構面のベース土、明黄褐色礫交じりシルト（第６層）または、黒色粘質砂（第７層）を除去した段階で検出された遺構面である。

土坑、溝、柱穴等がある。遺構の時期は第２遺構面のものとほとんど変わらず、弥生時代中期前葉～中葉である。

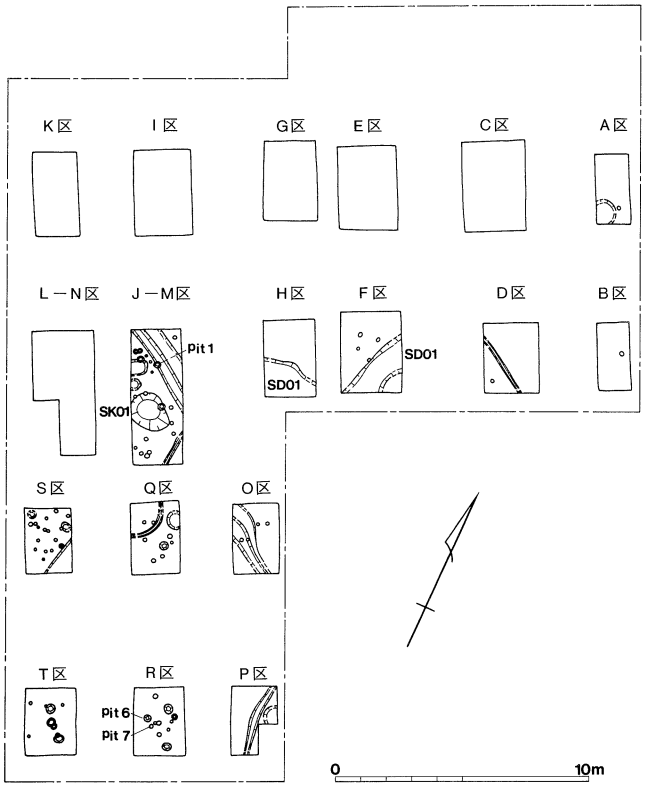


fig. 74　第２遺構面平面図

第４遺構面　第３遺構面のベース土は、少量の弥生時代前期遺物をふくむ緑灰色礫交じりシルト（第９層）で、約20～40cmの厚さがある。この緑灰色礫交じりシルトの直下に、弥生時代前期の遺物包含層である暗オリーブ灰色シルト質粘土層がある（第10層）。遺物は特に、Ｃ区、Ｅ区、Ｆ区、Ｇ区、Ｉ区から多量に出土した。遺構はＣ区から遺物包含層除去後にピットが１か所検出された。包含層、遺構ともに弥生時代前期後半のものである。

第５遺構面　暗オリーブ灰色シルト質粘土層直下には、また遺物をほとんど包含しない土層が約５～20cm堆積しその下層に灰色粘土質シルト（第12層）の遺物包含層がある。この層からも完形に近い壺形土器や石庖丁等が出土したが、暗オリーブ灰色シルト質粘土層ほどの量はない。

時期的には、上層の包含層とほぼ変わらない。遺構は検出されなかった。

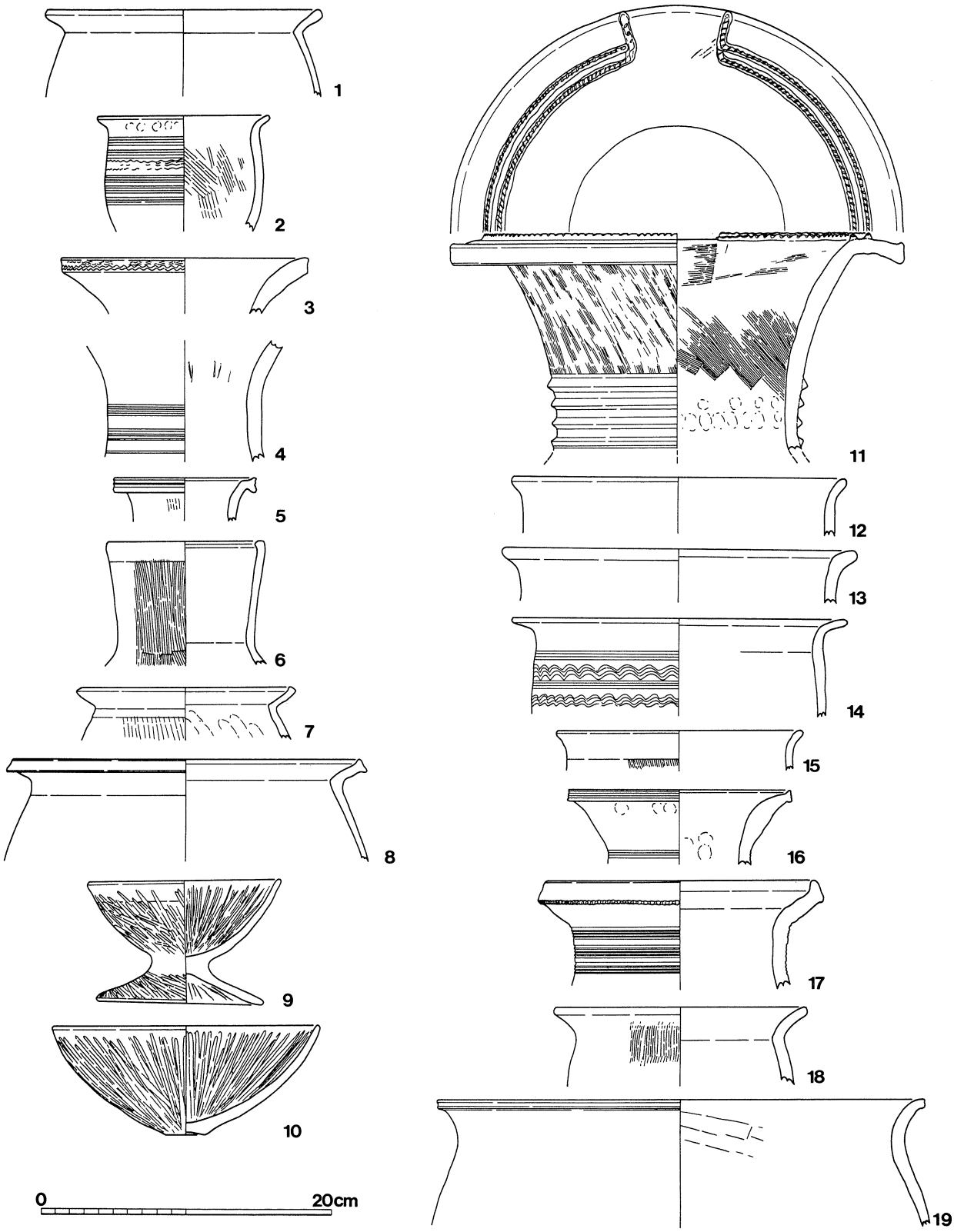


fig. 75　出土土器実測図（1・2：第1面E区SD01　3：第2面F区SD01　4：第3面G区SD01　5～8：第2面H区SD01
9・10：第1面R区西壁ピット　11：第2面J－M区ピット1　12：第2面J－M区ピット17
13・14：第2面J－M区SK01　15：第3面J－M区ピット2　16：第3面J－M区SK02
17：第3面J－M区SK03　18：第2面R区ピット6　19：第2面R区ピット7）

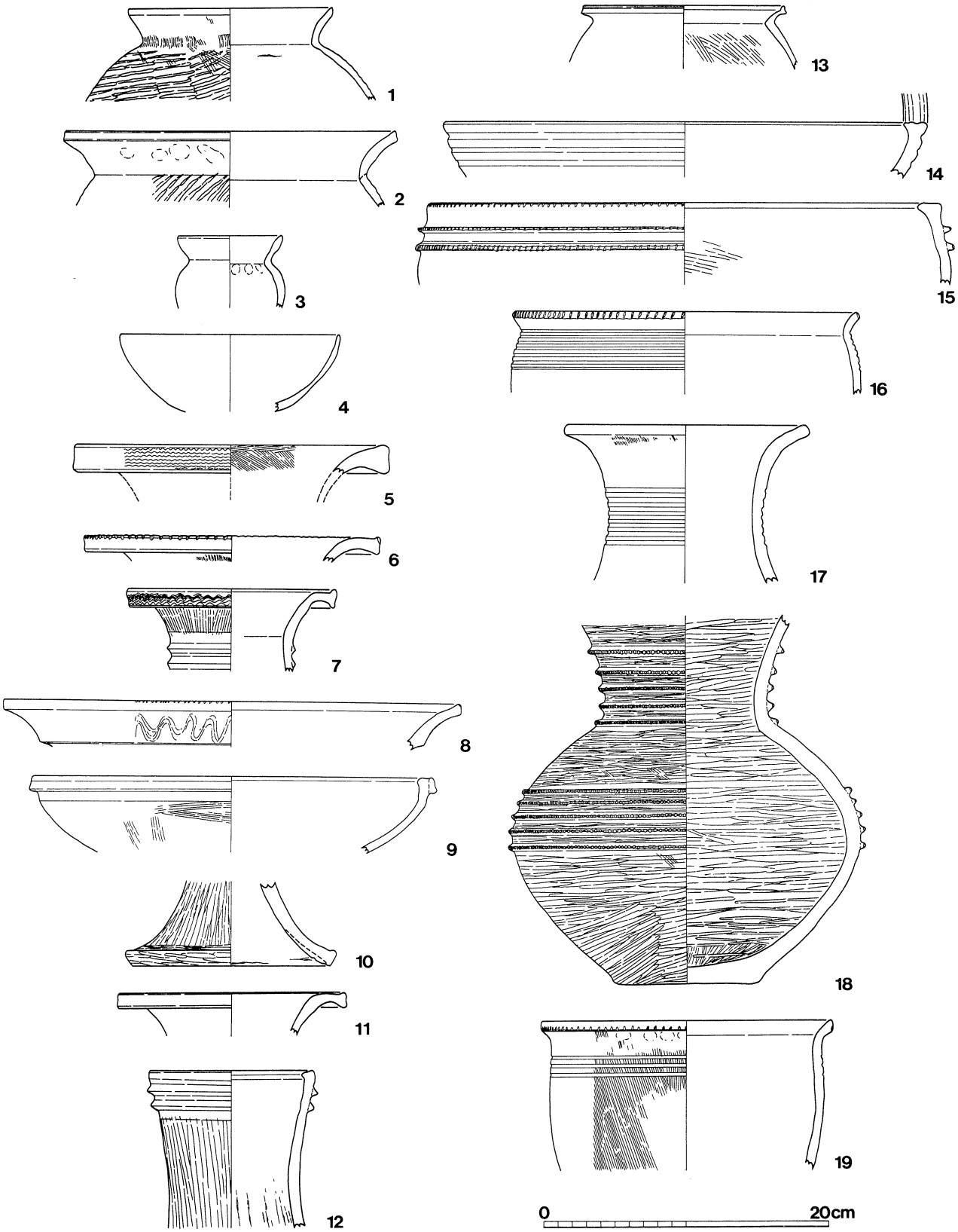


fig. 76　第１層～第２層出土土器実測図

（１・２：Ｅ区第１層　３：Ｒ区第３層　４：Ｒ区第２層　５・８・10：Ｂ区第４～５層　６：Ｆ区第４～５層
７：Ｋ区第５層　９：Ｆ区第５層　11・12：Ｇ区第７層　13・14：Ｉ区第７層　15：Ｉ区第８層
16：Ｈ区第９層　17：Ｆ区第11層　18：Ｅ区第12層　19：Ｆ区第12層）

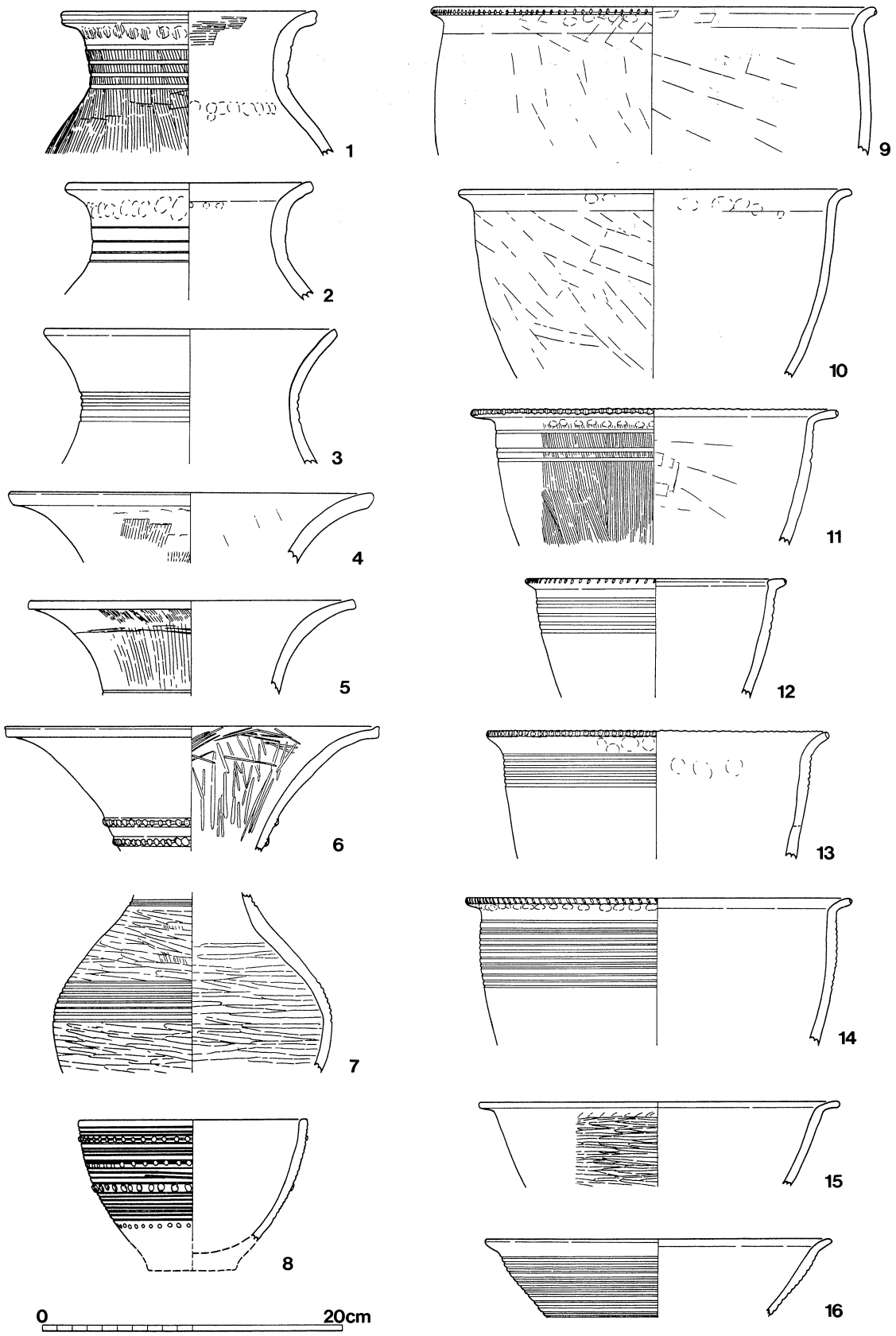


fig. 77　第10層出土土器実測図（C区：14・15　E区：4・7・9・10・13・16　F区：2・3・8・12
G区：1　I区：5・6・11）

この灰色粘土質シルト層の下は、青灰色シルト質細砂－青緑色砂礫－灰色粘土層と続くが、これら３層は全くの無遺物層である。

今回検出された遺構面は以上の計５面であるが、T.P.12.6m付近の灰色細砂層（第２層）上面も中世の遺構面となる可能性がある。

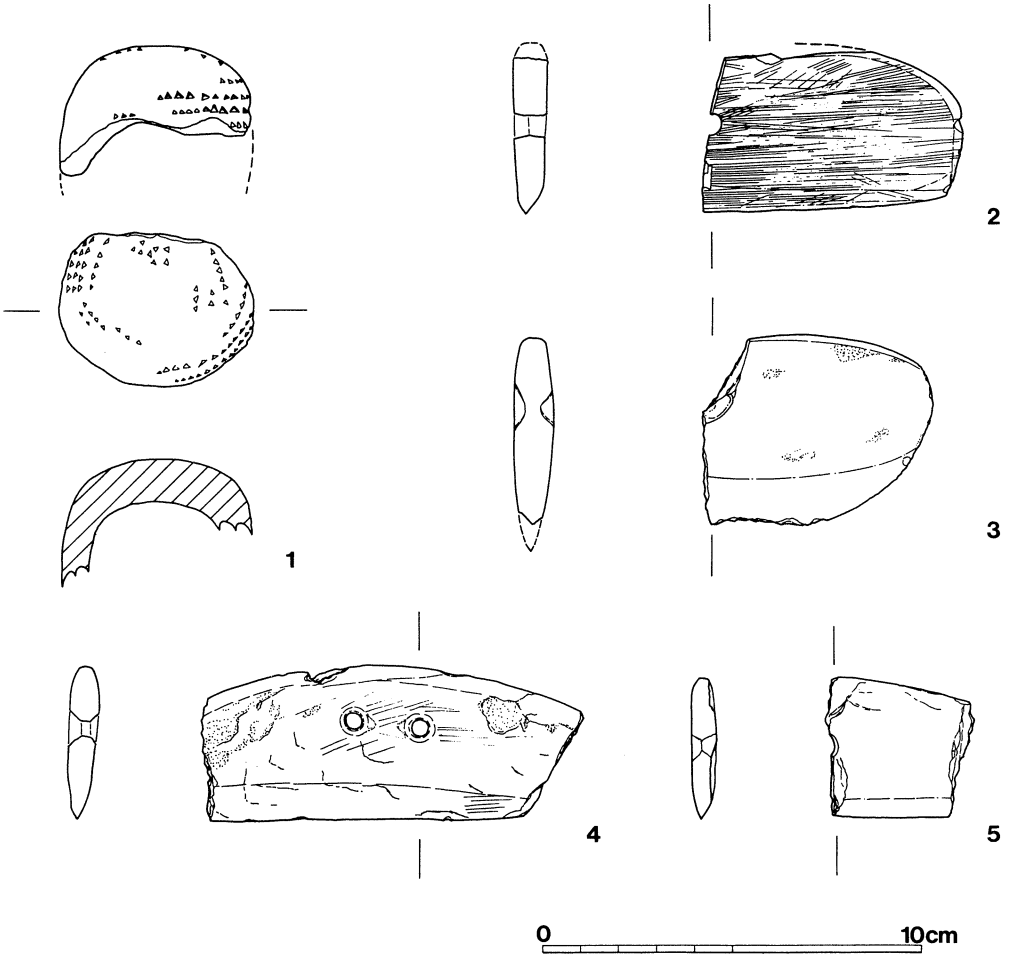


fig. 78　土製品・石庖丁実測図

（１：Ｃ区第10層土製品　２：Ｃ区第12層石庖丁　３：Ｐ区第２～４層石庖丁
４：Ｊ－Ｍ区第５層石庖丁　５：Ｈ区第４～５層石庖丁）

３．まとめ

今回出土した遺物は28ℓコンテナで33箱を数え、発掘調査面積の狭小さを考えるとその量はかなり多いものと思われる。

遺物の大半は弥生時代前期後半～中期中葉のもので、同中期後半以降の遺物は極端に減少する。

遺物のなかで注目されるのは、Ｃ区の暗オリーブ灰色シルト質粘土層から出土した直径約５㎝の半球形土製品である。厚さ約１㎝のもので、表面に三角形の刺突文が施されている（fig. 78－１）。

また当調査では石庖丁が４点検出されたが、１点は砂岩製、２点は緑色片岩と思われるもの、１点は神戸市北区の塩田付近で産出する石を使用したと考えられるものである。前３点は弥生時代中期中葉、最後の１点は弥生時代前期後半に属する。石材に関してはさらに検討が必要だが砂岩製石庖丁は明石川流域から、緑色片岩製石庖丁は和歌山県紀の川流域からもたらされたものである可能性がある（fig.78－２～５）。

12. 大田町遺跡　第５次調査

１．はじめに

大田町遺跡は平成２年の試掘調査によって発見された遺跡で、これまで４次に及ぶ発掘調査が実施され、奈良～平安時代の掘立柱建物があわせて20棟以上確認されている。出土遺物も土師器・須恵器・黒色土器のほかに緑釉陶器・灰釉陶器が多数出土している。特に第３次調査で出土した「荒田郡」銘の円面硯は遺跡の性格を示す遺物である。

これらの調査により大田町遺跡は官衙的な施設と周辺の官人の集落をあわせたような遺跡であり、山陽道に面した「須磨駅」の可能性が推定されている。

また、下層では古墳時代の土坑から滑石製品が約550点以上出土している。

当遺跡の周辺には、弥生時代前期後半の水田が検出された戎町遺跡、古墳時代の豪族居館が検出された松野遺跡、中世の集落遺跡である権現町遺跡等がある。

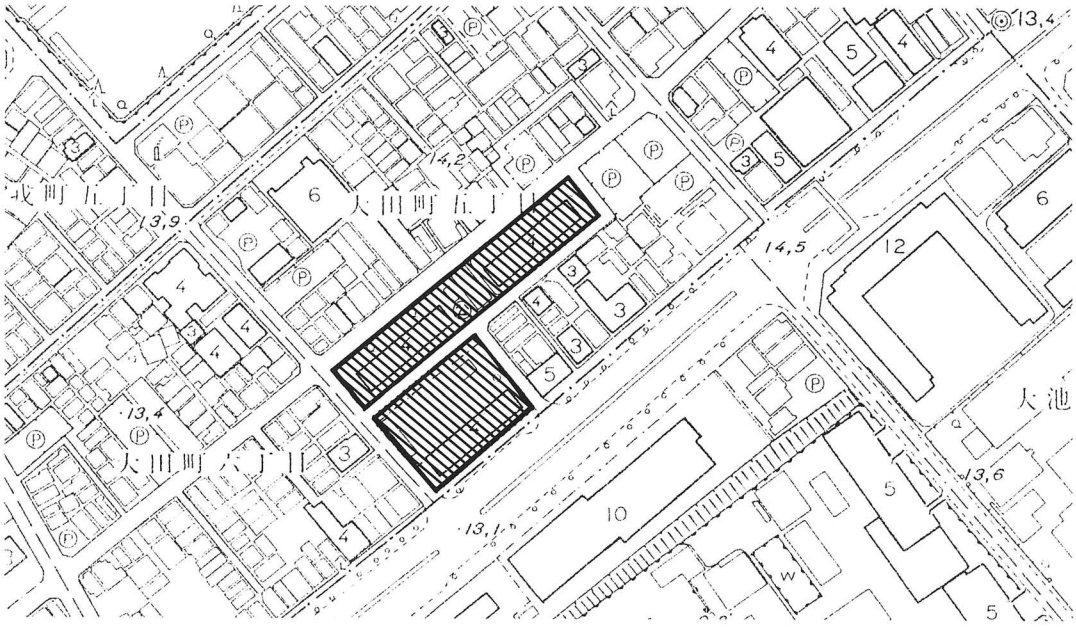


fig. 79
調査地点位置図
１：2,500

今回の調査は、市営住宅の建て替えに伴うもので、平成５年度に試掘調査を実施し、平安時代の遺物が出土したので、工事により文化財が影響を受ける部分について、平成６年９月より発掘調査を実施した。なお、掘削深度が浅く文化財に影響を及ぼさない部分については調査を実施せず、保存を図ることにした。そのため第４遺構面からはトレンチ調査の形態になった。

なお調査区は、Ａ・Ｂ・Ｃの３区に設定した。

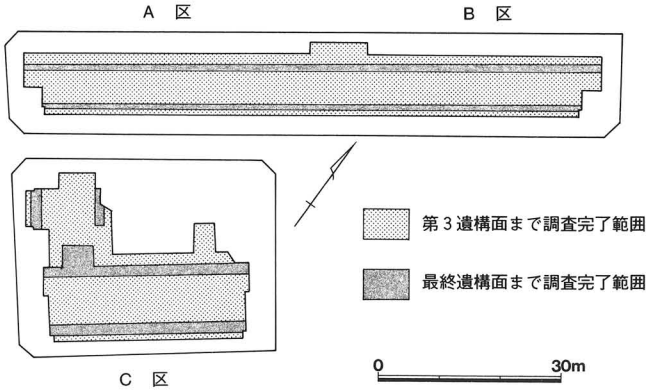


fig. 80　調査区平面図

２．調査の概要

大田町遺跡は、妙法寺川によって形成された自然堤防上に立地している。

調査区の基本土層は、fig. 81のとおりである。このうち第４層が９世紀の遺物包含層で、

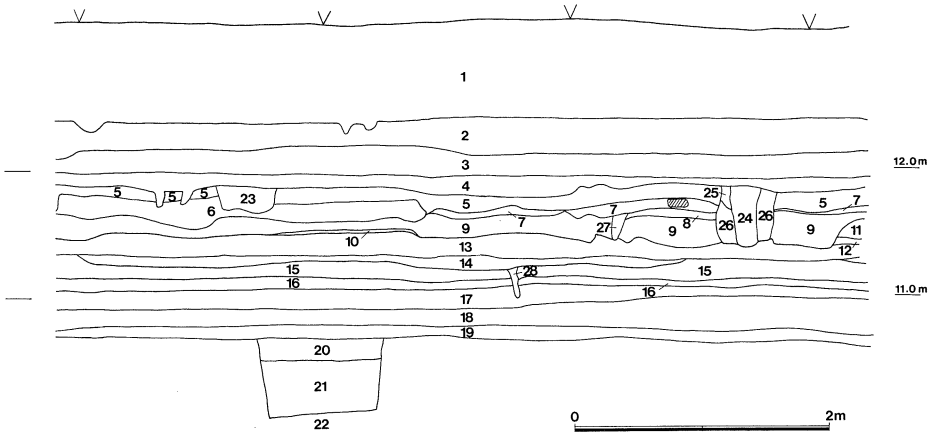


fig. 81　調査区断面図

第５層上面が第１遺構面、第９層上面が第２遺構面、第13層上面が第３遺構面、第16層上面が第４遺構面、第18層上面が第５遺構面、第19層上面が第６遺構面である。

調査は第３層まで重機で除去した後、人力で掘削を行い、遺構検出に努めた。発掘調査の結果、遺構面はＡ区で８面、Ｃ区で６面確認した。

第１遺構面　掘立柱建物14棟、杭列２列、溝２条、井戸１基、土坑、柱穴が検出された。

掘立柱建物

Ａ・Ｂ区

SB101　５基の柱穴が１列に並ぶ遺構である。柱穴の掘形の直径は40～50㎝である。長さは8.2ｍ以上である。SB102と並行しており、掘立柱建物又は建物に伴う遺構である可能性が高い。掘立柱建物であれば、SB102と同規模であると考えられる。

SB102　東西２間、南北４間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形は一辺約80㎝の方形である。規模は、4.2×7.2ｍ以上である。棟方向は、Ａ区とＣ区で検出されたSD101とほぼ並行している。

SB103　東西３間以上、南北１間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は60～70㎝である。規模は、4.0ｍ以上×1.8ｍ以上である。棟方向は、SB101とほぼ一致している。

SB104　東西２間、南北２間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は40～50㎝である。規模は、4.0×4.2ｍ以上である。棟方向は、SB101とほぼ一致している。

SB105　東西２間、南北３間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は40～50㎝である。規模は、4.4×6.7ｍ以上である。棟方向は、SB101とほぼ一致している。

SB106　東西３間以上、南北１間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は20～40㎝である。規模は、4.0×1.8ｍ以上である。

SB107　東西３間、南北３間の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は30～40㎝である。規模は、6.8×6.8ｍである。

SB108　東西４間、南北２間の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は20～40㎝である。規模は、8.4×6.7ｍである。

Ｃ区

SB101　東西２間、南北５間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形は１辺60～80㎝程度の方形である。規模は、3.8×10.5ｍ以上である。

SB102　東西２間、南北４間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は40～50㎝である。規模は、3.4×7.8ｍ以上である。

SB103　東西２間、南北４間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は40～60㎝である。規模は、3.4×8.2ｍ以上である。

SB104　東西２間、南北５間の掘立柱建物で、東西両面に廂をもち、北東隅に井戸を囲む建物が取りついている。規模は、4.8×10.6ｍである。

SB105　東西２間、南北４間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は50㎝程度である。規模は、5.9×10.6ｍ以上である。

SB106　東西４間、南北５間の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は30～50㎝である。規模は、8.4×8.9ｍである。

Ａ・Ｂ区の建物の方向からみるとSB101～105の５棟のグルーピングは可能である。これら以外の建物のまとまりについては現在のところ不明である。

Ｃ区の建物の方向からみると３つのグループに分けることができる。SB101・102・104の３棟とSB105・106の２棟とSB103の１棟である。出土土器と柱穴埋土からは明確な時期差は認められないが、SB103とSB104は柱穴の切り合いからSB104が新しいことがわかる。SB104とSB106も切り合いからSB106が新しい。したがって、SB103－SB104－SB106の順に建てられたことがわかる。

柱　列　柱列が２列検出された。Ａ・Ｂ区のSB101～104の棟方向とほぼ一致している。

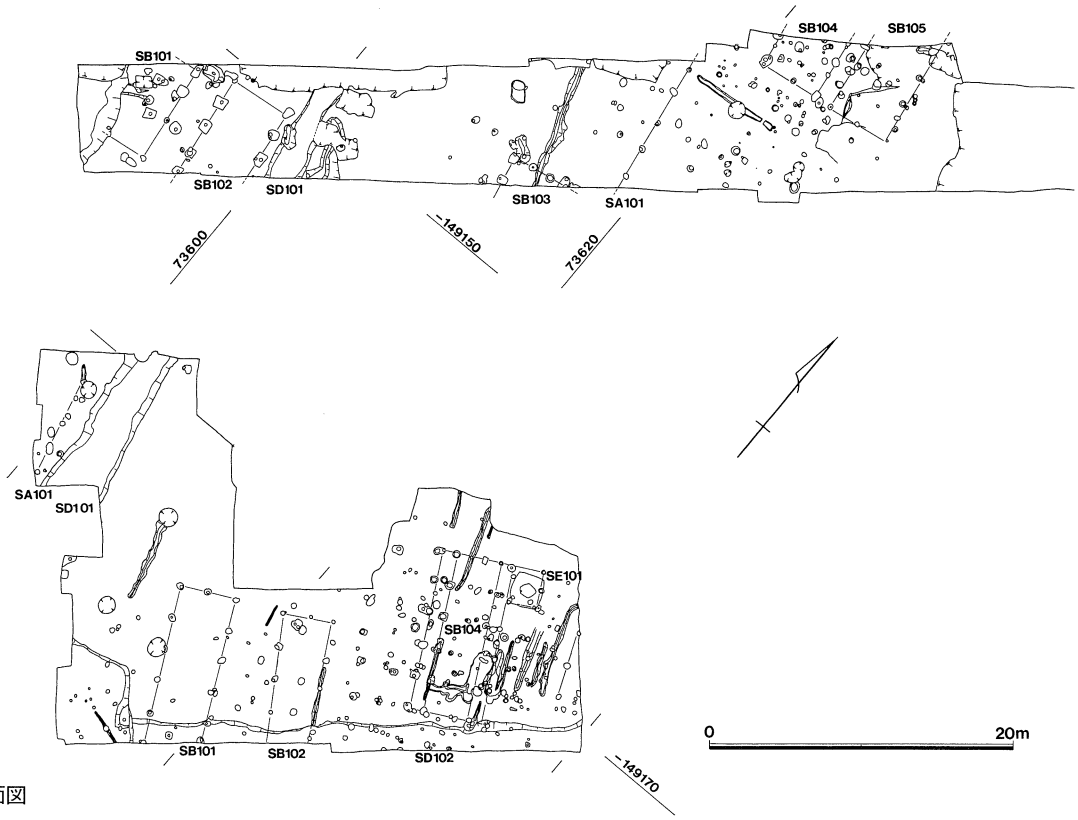


fig. 82
Ａ・Ｃ区
第１遺構面平面図

Ｂ区　SA101　５基の柱穴が１列に並ぶ遺構で、柵の可能性がある。Ａ・Ｂ区のSB101～104の棟方向とほぼ一致している。柱穴の掘形の直径は40～50㎝である。長さは8.2ｍ以上である。

Ｃ区　SA101　５基の柱穴が１列に並ぶ遺構で、Ｂ区SA101と同様の方向である。柱穴の掘形の直径は40～50㎝である。長さは6.8ｍ以上である。

溝　出土した建物の方向と一致するものと、現在の区画に並行するものがある。

埋納土器　直径45㎝、深さ30㎝の円形の土器埋納遺構で、高台を打ち欠いた須恵器壺が据えられていた。

土器埋納遺構の須恵器壺の中の土を除去する途中で、銅銭が出土したためＸ線撮影を行ったところ、銅銭があわせて７枚、中に存在していることが確認された。その内訳は和同開珎（初鋳708年）２枚、萬年通宝（初鋳760年）３枚、神功開宝（初鋳765年）１枚、不明銅銭１枚である。また、ナス、モモ、メロン仲間の種子も確認された。この遺構の時期は、壺の年代から８世紀の終わり頃と考えられる。

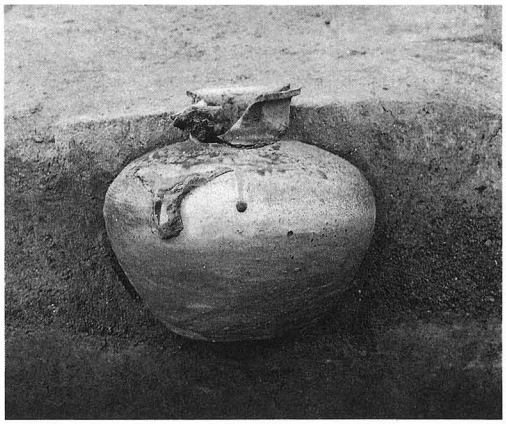


fig. 83　埋納土器

土器埋納遺構の性格を知る手掛かりとして、須恵器壺内の土の残存脂肪酸分析を実施した。その結果、土器に残存している脂肪は、ヒトの胎盤を埋納した胞衣壺に残存する脂肪と類似していることが明らかになった。また、埋納された品物のセットから考えれば、「歯固」という齢を固め、長命を願う儀式の可能性も考えられる。

Ａ・Ｃ区　SD101　最大幅３ｍ、深さ50㎝程度の溝で、ほぼ南北に流れる。埋土より多量の遺物が出土している。上層では９世紀後半の瓦、緑釉、灰釉を含む一括遺物が出土した。

Ｃ区　SD102　調査区南端で北側の肩を検出したもので、全貌はわからないが、溝の可能性が高い。深さ15～30㎝程度で、真北より約50°東へ振っており、現在の道路に並行している。埋土より多量の遺物が出土している。遺物からみて、埋没時期は９世紀後半と考えられるが、切り合いからSD102が埋没したのち掘立柱建物が建てられたことがわかる。

井　戸　SE101　一辺約230㎝の隅丸方形の掘形の井戸で、井戸枠の大きさは直径約70㎝である。深さは検出面から140㎝を測る。井戸枠は幅約30㎝、厚さ約５㎝の板を８枚組み合わせており、各々柄穴をあけて接続している。板と板の組み合わさる部分の裏側には薄い副板を当てている。

内部からは完形品の椀・皿などが出土している。時期は９世紀後半である。

出土遺物　主な遺物は、須恵器・土師器の他、瓦、緑釉陶器、墨書土器である。現在整理中だが、瓦は平瓦・丸瓦のほか軒丸瓦が１点出土している。墨書土器は２点出土しており、１点は「東」と読めるが、もう１点は現在判読できない。

第２遺構面　掘立柱建物、柱穴等が検出された。

Ａ・Ｂ区　建物として纏まるものは不明である。

Ｃ区　SB201　東西２間、南北４間以上の掘立柱建物である。柱穴の掘形は、長辺約120㎝、短辺約80㎝程度の方形である。規模は、4.5×4.5ｍ以上である。

Ａ・Ｃ区　SD201　幅約１ｍ、深さ40㎝程度の溝で、SD101の西肩に沿って流れている。埋土には６世紀後半から８世紀後半の遺物が混在している。

第３遺構面　Ａ～Ｃ区で水田が検出された。各水田はほぼ南北方向に並んでいる。

畦　畔　等高線に直行して南北方向に幅約１ｍの大規模な畦畔を設けており、そこから幅40～

50cmの小畦畔が東西南北に延びている。

区　画　それぞれの水田の形状には、一部不整形のものもあるが、そのほとんどは正方形ないしは長方形に近いものである。

面　積　A・B区の各水田の面積は、10～22m²である。C区の各水田の面積は15～25m²で、南側つまり標高が下がるにつれて区画が大きくなっていることがわかる。

水配り　水配りは、水口が数か所しか確認できなかったため、明らかではないが、恐らく北から南へのゆるやかな傾斜に沿った「畦越し」による配水を行っていたものと推定できる。

時　期　水田を覆っていた洪水砂および水田耕土層から土器の細片が出土しているが、時期を特定することはできない。

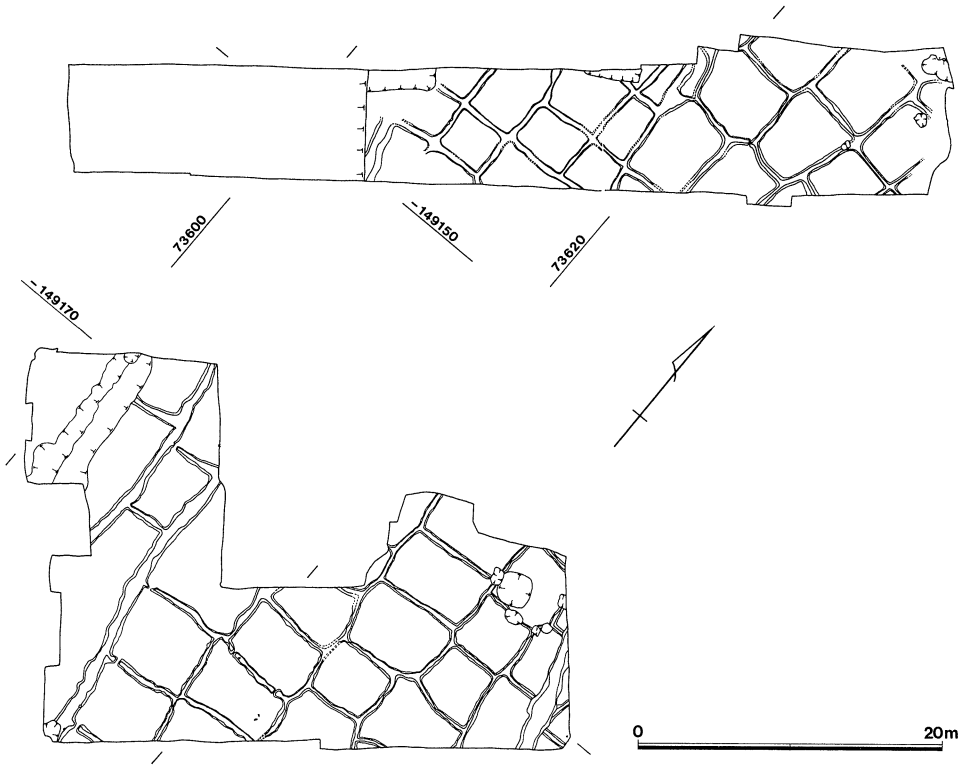


fig. 84
A・C区
第3遺構面平面図

第4遺構面　A区及びC区の一部で畦畔が検出された。水田の規模は不明である。時期についても不明である。

第5遺構面　竪穴住居、土坑、ピット、溝が検出された。

B区　SB501　直径6.0mの円形の竪穴住居で、壁高は20cmを測る。周壁溝は、幅20cm程度の溝が北側を除き検出できた。

中央土坑は直径90cm、深さ20cmを測り、炭、焼土を含んでいる。全体は検出できなかったが、6本柱の建物であろう。時期は出土土器から弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）である。

B区　SB502　直径約8mの円形の竪穴住居で、壁高は20cmを測る。東壁には周壁溝がまわる。全体は検出できなかったが、8本柱の建物であろう。中央には炭化物がつまった土坑が2基ある。北壁に接して貯蔵穴と思われる土坑が掘り込まれている。西壁の側には踏み石のような偏平な石が置かれている。時期は出土土器から弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）である。

B区　SK516　一辺約80cm、深さ30cmの方形の土坑である。土器と共に、桃の種子が数個出土した。

C区　SK501　長辺160cm、短辺100cm、深さ30cmの長方形の土坑で、埋土から土器が多量に出土してい

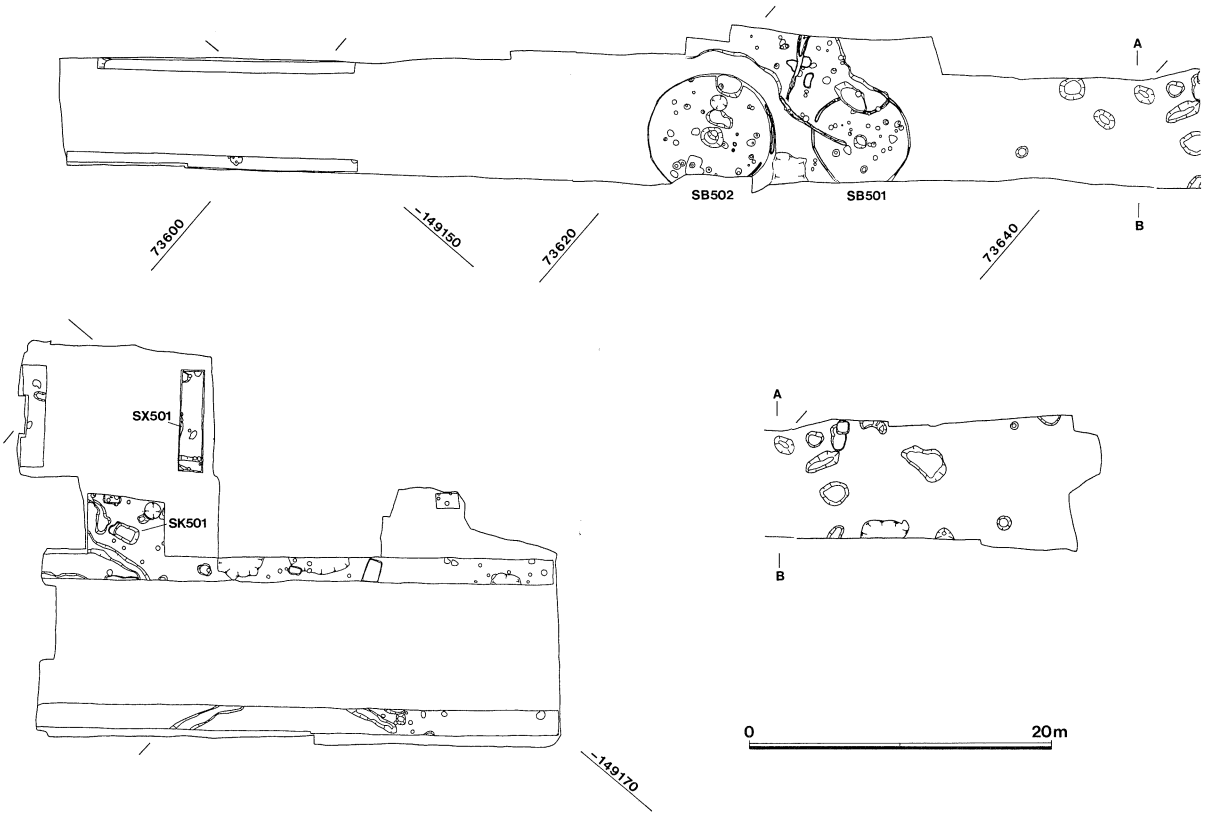


fig. 85　A・B・C区　第5遺構面平面図

る。時期は弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）である。

SX501　一部分を検出しただけであるが、検出部分の長さ190㎝、深さ30㎝を測る。埋土から多量の弥生土器と共に石庖丁が2点出土している。なお上層の包含層から、サヌカイト製刃部磨製大型石庖丁が1点出土している。時期は弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）である。

第6遺構面　A区及びC区で土坑、ピットが検出された。建物としてまとまるものは確認できなかった。出土遺物から、時期は弥生時代中期前葉（第Ⅱ様式）である。

第7遺構面　A区2トレンチでは柱穴が8基検出された。出土遺物から、時期は弥生時代前期後半（第Ⅰ様式）である。

第8遺構面　明確な遺構はないが、弥生時代前期後半（第Ⅰ様式）の完形の壺が8個体出土した。

3．まとめ

今回の調査では、当遺跡で初めて弥生時代の遺構が検出された。東に隣接する戎町遺跡との関係が注目される。当遺跡では弥生時代中期後葉（第Ⅳ様式）から古墳時代中期の遺物がほとんど検出されておらず、第3及び第4遺構面で検出された水田面が、この時期に当たる事から、生産域として利用されていたと考えられる。

SD101から出土した9世紀代の遺物は、種類、量共に豊富で、良好な一括遺物として捉えられる。

駅家に関係する資料は得られなかった。しかし、規模、方向に規則性のある建物群の検出や、9世紀代の瓦、施釉陶器の出土量がこれまでの調査例より多く、官衙クラスの施設であった可能性が高い。

また、C区SD102は第2次・第3次調査で検出された溝と連続するものと推定され、古代山陽道の側溝の可能性が考えられる。

13. 垂水（たるみ）・日向（ひゅうが）遺跡　第11次調査

1．はじめに

垂水・日向遺跡の発掘調査は1988年にはじまり、今年度で７年目になる。これまでの調査で、縄文時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代の遺構、遺物が明らかにされると共に、その面的な分布状況を把握し得るようになってきた。

今回の調査は、第10次調査区の北側に隣接する。調査区は１次調査に次ぐ残りの良さで、調査区の全面で遺構を確認した。

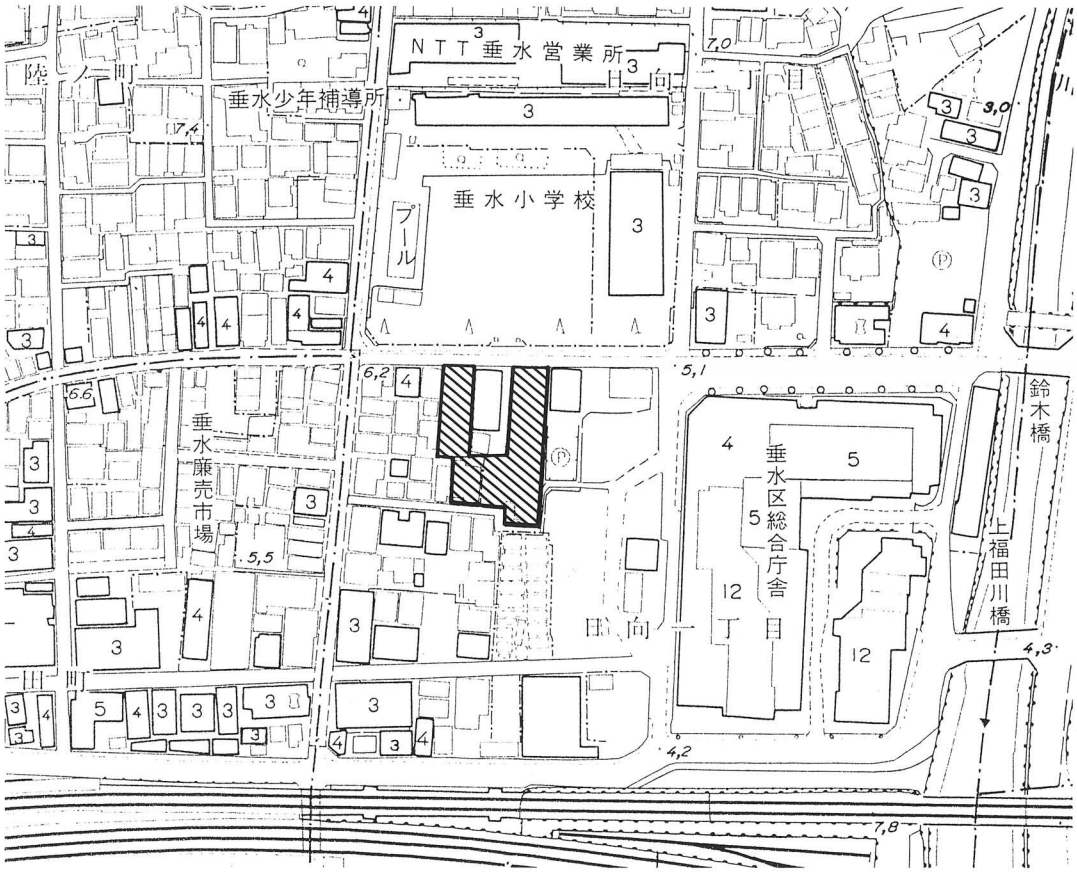


fig. 86
調査地点位置図
1：2,500

2．調査の概要

鎌倉時代

平安時代

現地表下約30㎝で中近世の水田耕作土が現れる。この土層約20㎝を掘り下げると、平安時代の遺構面になる。この遺構面はこれまでの調査では第５次・10次調査においてのみ確認されていたもので、遺構の埋土が灰色系を呈する。この遺構検出面を第Ⅰ遺構面と呼ぶ。小型円形の掘形の柱穴約30基と、溝状遺構等を確認した。柱穴のうち、遺構としてのまとまりが認識できたのは南北方向の柵列のみである。なお、南の第10次調査で確認された掘立柱建物に続くと見られるような柱は認められず、２×３間の規模でほぼ確定出来るものと思われる。調査で確認された遺構の概要は、以下のとおりである。

SA01　調査区南端にあり、ほぼ南北に主軸をもつ柵列である。

SA02　SA01の東側にあり、ほぼ平行している。その方向性からみれば、同時性も指摘できる所である。しかし、SA01の柱穴の埋土とは違っており、また、柱穴の深さにも違いが認められることから、SA01とは時期が異なるものとみられ、おそらく、SA01に先行するものであろう。

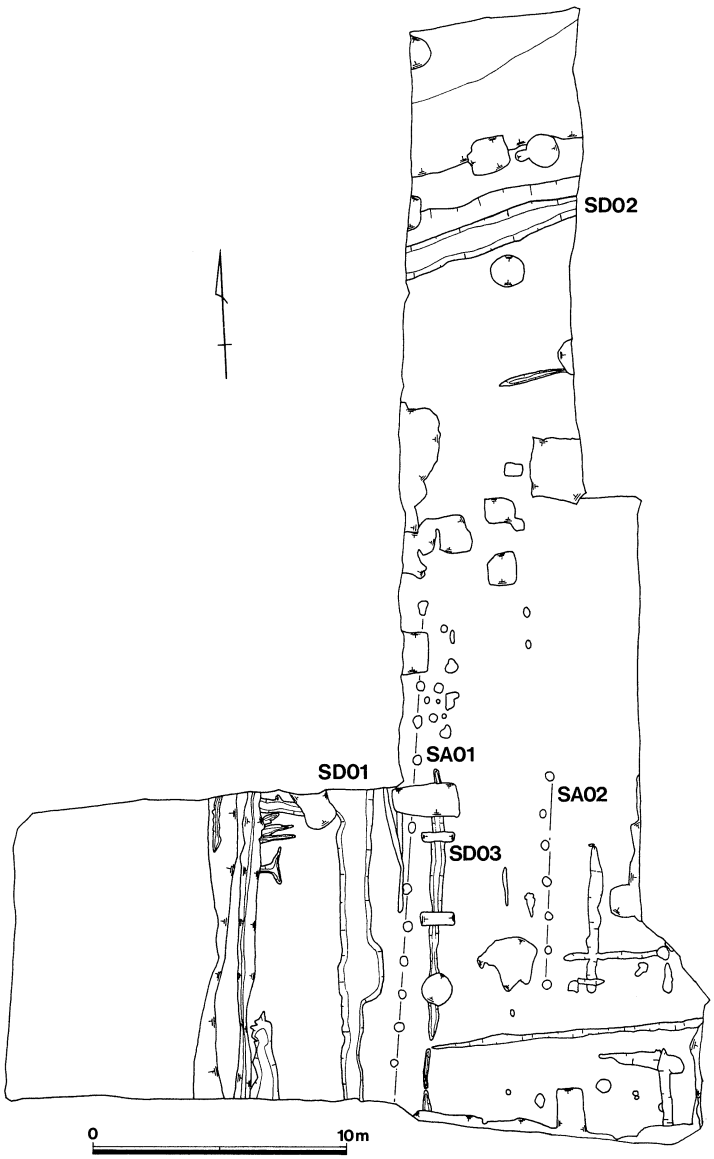


fig. 87
第Ⅰ遺構面平面図

SD01　SA01を挟む形で、SD01・03が存在する。SD01は幅１ｍ、深さ20cm程の溝で、中央部分に50cmほどの膨らみをもつ。

SD03　幅50cm、深さ10cmほどの溝である。

SA01およびSD01・03はほぼ同時期と考えられ、居住域におけるなんらかの区画を目的として造られたものと考えられる。

古墳時代　第Ⅰ遺構面の下、５～10cmでこれまでの第Ⅰ遺構面に達する。ここではこれを第Ⅱ遺構面と呼ぶ。この第Ⅱ遺構面では、溝を多数確認したが、その方向には一貫性がなく、性格等は不明である。

SB01　調査区北部で、一辺５ｍ程の竪穴住居と思われる遺構を確認したが、柱穴等は確認出来なかった。なお、この遺構からは、わずかながら土器が出土しており、この遺物によれば、遺構は古墳時代のものと考えられる。おそらく、須恵器出現以前と思われるが、庄内期に属するか否かは、断定しがたい。

SD04　調査区南端にて、古墳時代前期（庄内期）に属すると思われる土器を伴う溝を一条検出している。

縄文時代　第Ⅱ遺構面下約1.5mで縄文時代後期の洪水層に達する。これまでの調査ではこの洪水層は平均1.5m程度の堆積が認められたが、当調査区では南半で0.5～1.5m、北半では1m以下の堆積であった。また、洪水層から発見される流木も、これまでの調査では、多量に検出されてきた。しかし、前年度の調査成果において、北部で流木はほとんど出土していなかったが、それに続く今回の調査区でも、流木はほとんど出土しなかった。しかし、西の調査区では、洪水層から発見される流木が多量に出土しており、従来とは違った新たな河道の存在する可能性もある。それでも、全体で52点を確認したにすぎない。

調査区中央付近で確認した流木は、幹の直径66cm、長さ310cm以上あり、その場で倒れたように出土している。この木の根は、下の層位を貫いており、おそらくここで生えていたに違いないであろう。

洪水層から出土した縄文土器は、中・後期に属するもので、約50点出土している。大部分は磨滅もなく大型の破片も含まれることから、遠方から流されたというよりも、この調査区の近辺に堆積していたものが流されたと考えられる。

土器の出土状況からみて、集落の存在が想定される所であるが、調査区内は海岸線と想定されており、縄文時代の集落は未だ確認されていない。おそらく、調査区北部のごく近辺で確認できるものと思われる。

調査区全体では、洪水によって以前に堆積した土層が削り去られていることが少なく、そのためアカホヤ火山灰層の堆積が広範囲に残存している。また、これまでの調査では確認できなかったアカホヤ火山灰層の上層の堆積も僅かながら残存していた。この層位は堆積層序からみると、潮汐によるものと考えられ、縄文時代前期にはT.P.2.6m付近まで海水準が上昇していたことが推定される。

アカホヤ火山灰を含む土層は厚さ45～50cmの堆積が認められるが、これまでの分析で1次堆積は約10cm程度と考えられ、それ以上は2次堆積と考えられている。この堆積を層位毎に順次下げていく途中で、前年度には、北から南へ蛇行する、いわゆる「澪筋」が確認されている。しかし、今回の調査では、洪水層と共に掘り下げを行ったため、方向等はつかめていない。僅かに断面でその存在を確認したに止まる。

この層位を更に下げると、これまでの調査でも確認されている漣痕（ripple mark）が検出された。部分的に3層で確認できた。1・2層は9～11条／10cmと細かいもので、1層目が南北方向、2層目が東西方向の波によって形成されている。小さな水たまりのなかで形成されたものであろうか。3層目の漣痕は、これまでに検出したものと同様のもので、45～56条／2mで南北方向の波によって形成されたものである。方位はN14～20°Wである。

アカホヤ火山灰の一次堆積直下で、足跡を検出した。西南西から東北東に向かって、蛇行しながら歩行したものである。足跡の痕跡や埋土から、シルト層上に薄く黄褐色細砂が堆積したのちに足跡がつけられたものとみられ、検出面と火山灰堆積との間に全く間層を含んでいない。足跡の埋土には若干の火山灰層がシルト層と逆転している部分がある。これを踏み込みによるものとすれば、この足跡は火山灰降下直後に人による歩行によって残れたものと考えることができる。

T.P.1.6mあたりで、ヒトの足跡を検出した。計２面で、東西方向や北北西から南南東にむかうもので計４列検出している。

T.P.0.6～0.4mあたりで、これまでの調査同様、ヒトの足跡を検出した。計３面で足跡を確認したが、偶蹄類の足跡も検出した最終の足跡面では、数量的にも保存状態からも、これまでで最も良好なものであった。足跡の方向としては、南北方向と共に、東西方向も多く確認した。

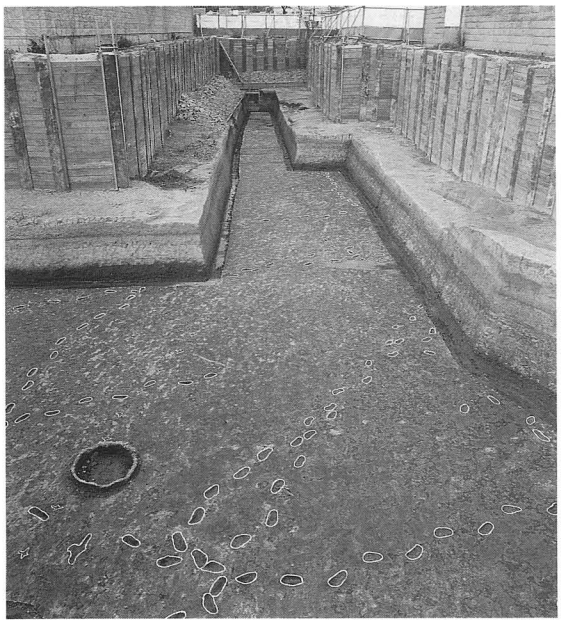


fig. 88　縄文人の足跡

fig. 89　縄文人の足跡

３．まとめ

今回の調査では、第Ⅰ遺構面とした平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構面を確認できた。これまでの調査では、おそらく同一面で検出してきた建物跡を、遺物以外で明確に時期分類できる手掛かりを得た。この面は当調査区の北方に広がっていることから、今後の調査ではよりよい成果が得られるであろう。

縄文時代の流木としてこれまで一括してあつかってきたものが、現地で生えていたものも含まれる事がより明らかになってきた。今回の調査区では、数点のみがその可能性を考えられる。今後の調査でもそれを踏まえれば、かなりの精度で峻別することができるであろう。

アカホヤ火山灰の堆積は、これまでになく広範囲にわたって残存していた。漣痕からは、当時の岸の形態が確認できそうであるし、前年度の調査に引き続き「澪筋」を確認したことは、その堆積環境を推定していく上で大きな収穫であった。また、火山灰が、調査区北端部においても確認できたが、その検出レベルにほとんど差がなく、海中面とされる部分が、すくなくとも調査区北端部にまで及んでいたことが想定される。

さらに、火山灰降下中につけられた足跡の検出は大きな収穫である。これまでの調査では確認されておらず、国内においても余り知られていないもののようであり、今後の類例調査を期したい。

14. 舞子浜（まいこはま）遺跡　第９次調査

１．はじめに

舞子浜遺跡は、神戸市垂水区東舞子町に所在し、標高4.0～4.5ｍの砂堆上に立地している。現在は、ＪＲ舞子駅の南東側の舞子公園周辺にかけて広がる松林となっている。

これまでに８次にわたる調査が実施され、10基の埴輪円筒棺が出土している。砂堆上に築造されているため、人骨が良好に保存されている例も多い。

２．調査の概要

今回の調査は、舞子駅裏雨水幹線築造工事に伴う調査で、第８次調査区のすぐ北隣である。

調査の結果、調査区の４か所で、埴輪棺を６基（埴輪棺１～６）検出した。

また、埴輪棺を取り巻くようにして周溝を３条（周溝１～周溝３）と周溝からのびる溝状遺構を２条（SD01・05）検出した。

埴輪棺１（ST01）

調査区の中央付近よりやや西側で検出した。主軸方向はＮ49°Ｗで、全長は、1.87ｍ、幅35～40㎝である。鰭付朝顔形埴輪を２個組み合わせて、棺身として利用している。

棺身の埴輪は、いずれも鰭が上下に、透かし孔が水平になるように設置している。

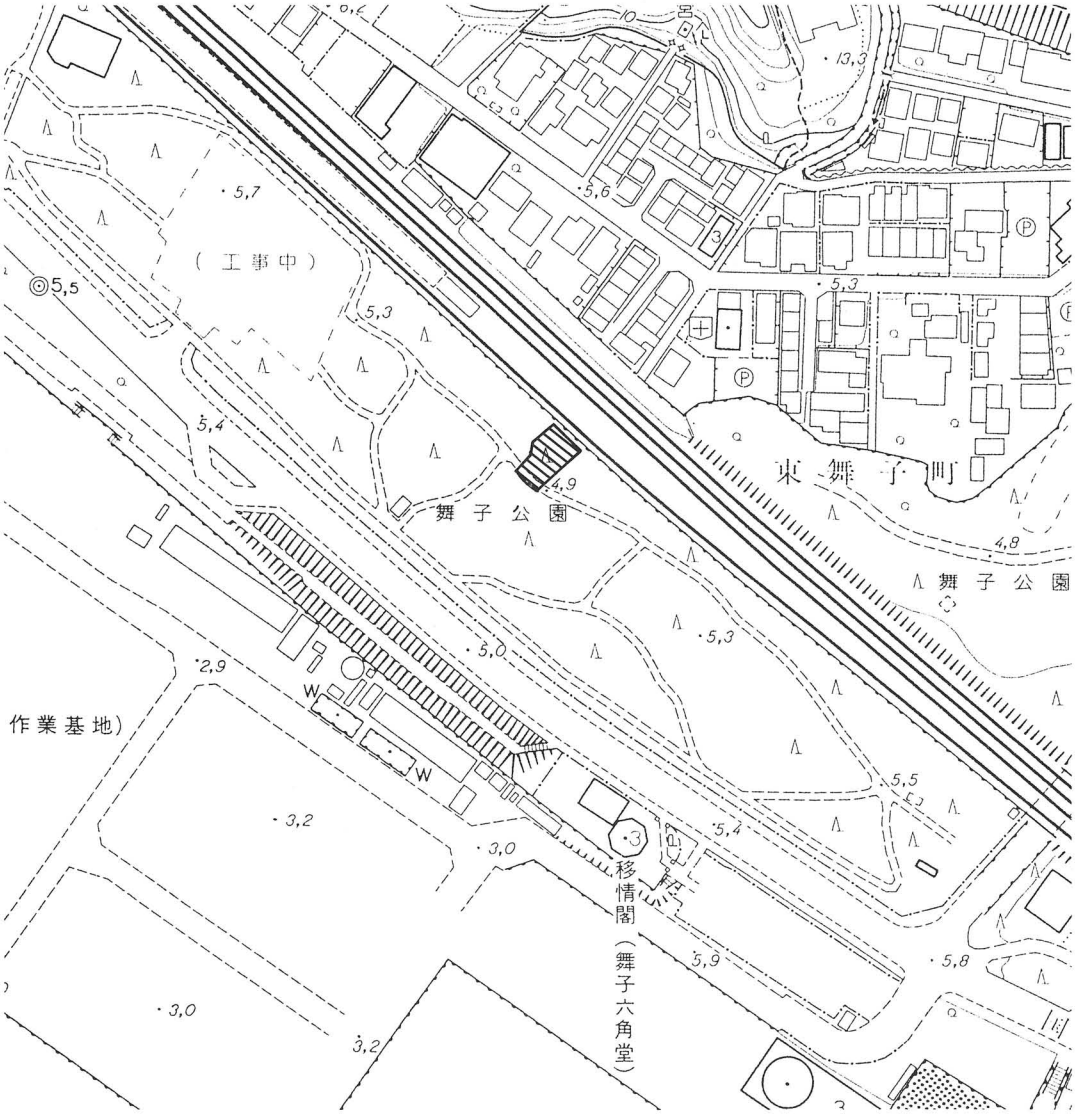


fig. 90
調査地点位置図
１：2,500